

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成29年4月1日
(第68期) 至 平成30年3月31日

株式会社クレディセゾン

第68期（自平成29年4月1日 至平成30年3月31日）

有価証券報告書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

株式会社クレディセゾン

目 次

頁

第68期 有価証券報告書

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	6
4 【関係会社の状況】	7
5 【従業員の状況】	9
第2 【事業の状況】	10
1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	10
2 【事業等のリスク】	12
3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	14
4 【経営上の重要な契約等】	28
5 【研究開発活動】	28
第3 【設備の状況】	29
1 【設備投資等の概要】	29
2 【主要な設備の状況】	30
3 【設備の新設、除却等の計画】	31
第4 【提出会社の状況】	32
1 【株式等の状況】	32
2 【自己株式の取得等の状況】	35
3 【配当政策】	36
4 【株価の推移】	36
5 【役員の状況】	37
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	44
第5 【経理の状況】	55
1 【連結財務諸表等】	56
2 【財務諸表等】	105
第6 【提出会社の株式事務の概要】	122
第7 【提出会社の参考情報】	123
1 【提出会社の親会社等の情報】	123
2 【その他の参考情報】	123
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	124

監査報告書

内部統制報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月20日
【事業年度】	第68期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
【会社名】	株式会社クレディセゾン
【英訳名】	Credit Saison Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 林 野 宏
【本店の所在の場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番1号
【電話番号】	(03)3988-2112
【事務連絡者氏名】	取締役経理部管掌 馬 場 信 吾
【最寄りの連絡場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番1号
【電話番号】	(03)3988-2112
【事務連絡者氏名】	取締役経理部管掌 馬 場 信 吾
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 最近5連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移

回次	第64期	第65期	第66期	第67期	第68期
決算年月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月	平成30年 3 月
営業収益 (百万円)	247, 577	259, 076	269, 919	278, 944	292, 183
経常利益 (百万円)	44, 408	43, 687	43, 802	53, 065	56, 717
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	25, 552	12, 628	26, 163	42, 253	38, 329
包括利益 (百万円)	33, 623	29, 766	25, 398	33, 606	39, 507
純資産 (百万円)	422, 829	447, 082	418, 988	446, 882	480, 669
総資産 (百万円)	2, 285, 943	2, 373, 299	2, 550, 990	2, 720, 051	2, 940, 027
1 株当たり純資産 (円)	2, 283. 29	2, 424. 05	2, 563. 61	2, 724. 88	2, 933. 46
1 株当たり当期純利益 (円)	139. 14	68. 77	147. 37	258. 70	234. 67
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益 (円)	138. 90	—	—	255. 28	—
自己資本比率 (%)	18. 34	18. 76	16. 41	16. 36	16. 30
自己資本利益率 (%)	6. 30	2. 92	6. 06	9. 78	8. 29
株価収益率 (倍)	14. 75	31. 38	13. 29	7. 68	7. 44
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△80, 533	△85, 717	△102, 444	△103, 280	△54, 808
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△7, 675	△3, 676	△23, 898	△19, 462	△46, 380
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	83, 363	88, 434	139, 394	121, 208	112, 592
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	52, 678	51, 781	64, 813	63, 215	74, 557
従業員数 (名)	3, 689 (5, 210)	3, 726 (5, 171)	3, 732 (5, 397)	3, 867 (5, 316)	5, 394 (3, 094)

- (注) 1 営業収益には、消費税等は含まれておりません。
2 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
3 第65期、第66期及び、当連結会計年度の「潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益」については、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

(2) 提出会社の最近5事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次	第64期	第65期	第66期	第67期	第68期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
取扱高 (百万円)	6,737,558	7,153,795	7,458,944	7,914,568	8,409,848
営業収益 (百万円)	205,873	219,336	228,713	238,637	249,865
経常利益 (百万円)	34,872	38,449	32,614	28,210	38,871
当期純利益 (百万円)	18,637	11,315	25,570	21,045	22,190
資本金 (百万円)	75,929	75,929	75,929	75,929	75,929
発行済株式総数 (株)	185,444,772	185,444,772	185,444,772	185,444,772	185,444,772
純資産 (百万円)	367,808	388,470	359,428	374,477	396,831
総資産 (百万円)	2,200,459	2,287,986	2,468,797	2,623,644	2,831,296
1株当たり純資産 (円)	2,002.13	2,114.61	2,199.56	2,291.62	2,428.43
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額) (円)	30.00 (—)	30.00 (—)	35.00 (—)	35.00 (—)	35.00 (—)
1株当たり当期純利益 (円)	101.45	61.60	143.97	128.79	135.80
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	16.72	16.98	14.56	14.27	14.02
自己資本利益率 (%)	5.20	2.99	6.84	5.74	5.75
株価収益率 (倍)	20.24	35.03	13.61	15.42	12.86
配当性向 (%)	29.57	48.70	24.31	27.18	25.77
従業員数 (名)	2,007 (1,457)	2,078 (1,475)	2,163 (1,523)	2,289 (1,549)	3,297 (702)

(注) 1 取扱高及び営業収益には、消費税等は含まれておりません。

2 従業員数欄の(外書)は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。

3 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」は、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

2【沿革】

昭和26年 5 月	株式会社緑屋を設立
昭和38年 7 月	東京証券取引所市場第二部に上場
昭和43年 6 月	東京証券取引所市場第一部に指定
昭和51年 3 月	㈱西武百貨店〔現 ㈱そごう・西武〕と資本提携
昭和54年11月	ミドリヤファイナンス㈱〔㈱アトリウムリアルティ（※1）〕設立
昭和55年 8 月	株式会社西武クレジットに社名変更、㈱志澤と合併
昭和56年 6 月	セゾングループのクレジット・ファイナンス基幹会社としてスタート
昭和57年 8 月	セゾンカード発行、発行拠点（セゾンカウンター）の全国展開を開始
昭和57年 8 月	リース事業を開始
昭和59年 2 月	㈱西武抵当証券〔現 ㈱セゾンファンデックス（現 連結子会社）〕設立
昭和60年 5 月	信用保証事業を開始
昭和63年 7 月	セゾンVISA・MasterCardインターナショナルカード発行
平成元年10月	株式会社クレディセゾンに社名変更
平成 3 年 1 月	アフィニティ（提携）カード事業を開始
平成 4 年 3 月	㈱ヴィーヴルに資本参加
平成 6 年 4 月	総合割賦購入あっせん業者に登録
平成 7 年 6 月	セゾンJCBインターナショナルカード発行
平成 9 年 2 月	㈱セゾンダイレクトマーケティングに資本参加
平成 9 年11月	セゾン・アメリカン・エクスプレス・カード発行
平成14年 2 月	㈱ローソン・シーエス・カードに資本参加
平成15年10月	出光クレジット㈱に資本参加
平成16年 8 月	りそなカード㈱に資本参加
平成17年 3 月	ユーシーカード㈱に資本参加
平成18年 1 月	ユーシーカード㈱（UC会員事業会社）（※2）を吸収合併
平成18年 3 月	㈱アトリウム〔㈱アトリウムリアルティ（※1）〕の株式をジャスダック証券取引所に上場
平成18年10月	ジェービーエヌ債権回収㈱（現 連結子会社）の株式を大阪証券取引所ヘラクレス市場に上場
平成18年10月	静銀セゾンカード㈱に資本参加
平成18年11月	大和ハウスフィナンシャル㈱に資本参加
平成18年12月	㈱アトリウム〔㈱アトリウムリアルティ（※1）〕の株式を東京証券取引所市場第一部に上場
平成19年 2 月	高島屋クレジット㈱に追加出資
平成20年 3 月	㈱ヴィーヴルが㈱ウラクアオヤマを吸収合併し、㈱コンチェルト（現 連結子会社）に商号変更
平成20年 4 月	㈱キュービタス（現 連結子会社）への会社分割及び資本参加
平成20年 4 月	㈱ローソン・シーエス・カードに追加出資
平成20年 9 月	㈱ローソン・シーエス・カードを吸収合併
平成21年 2 月	ジェービーエヌ債権回収㈱（現 連結子会社）は株式移転方式により当該会社の完全親会社となる純粋持株会社JPNホールディングス㈱〔現 ㈱セゾンパーソナルプラス（現 連結子会社）〕を設立
平成21年 8 月	株式交換により㈱アトリウム〔㈱アトリウムリアルティ（※1）〕を完全子会社化
平成22年 9 月	㈱セブンCSカードサービスを設立
平成23年 4 月	提携カードイシューア事業の一部を分割し、㈱セブンCSカードサービスへ承継
平成24年 4 月	㈱アトリウム（準備会社）を設立
平成24年 8 月	㈱セゾンファンデックス（現 連結子会社）が㈱ハウスプランニングを吸収合併
平成24年 9 月	㈱アトリウムリアルティ（※1）の事業の一部を分割し、㈱アトリウム（現 連結子会社）へ承継
平成25年 4 月	ベトナム・ハノイ市に現地法人Vietnam Saison Consulting Company Limited.を設立
平成26年11月	東南アジアのEC における決済領域において、バーチャルブランドプリペイドカード事業を展開するシンガポールのMatchmove Pay Pte. Ltd. と資本業務提携
平成27年 5 月	ベトナムにおいてHD Finance Company Ltd. に資本参加し、新たにHD SAISON Finance Company Ltd. として合併事業を展開

平成27年 6 月	株式交換により J P Nホールディングス(株) [現 (株)セゾンパーソナルプラス (現 連結子会社)] を完全子会社化
平成27年 9 月	インドネシアにおいてファイナンス事業を行う合弁会社PT. Saison Modern Finance (現 連結子会社) を設立
平成28年 1 月	(株)ヒューマンプラスが J P Nホールディングス(株)を吸収合併
平成28年 3 月	(株)アトリウムリアルティ (※ 1) を清算
平成28年 4 月	(株)ヒューマンプラスが(株)セゾンパーソナルプラス (現 連結子会社) に商号変更

- ※ 1 平成24年 9 月 1 日付で、旧(株)アトリウムは(株)アトリウムリアルティに商号変更し、大手不動産会社による出資・協力を得ながら当該不動産の開発・販売等を行い、最終的に(株)アトリウムリアルティは平成28年 3 月24日をもって清算いたしました。
- ※ 2 ユーシーカード(株)は平成17年10月に会社分割を行い、加盟店事業に特化してまいりましたが、平成29年 1 月より会員事業及び加盟店事業を総合的に事業展開できるようビジネスモデルを変更しております。

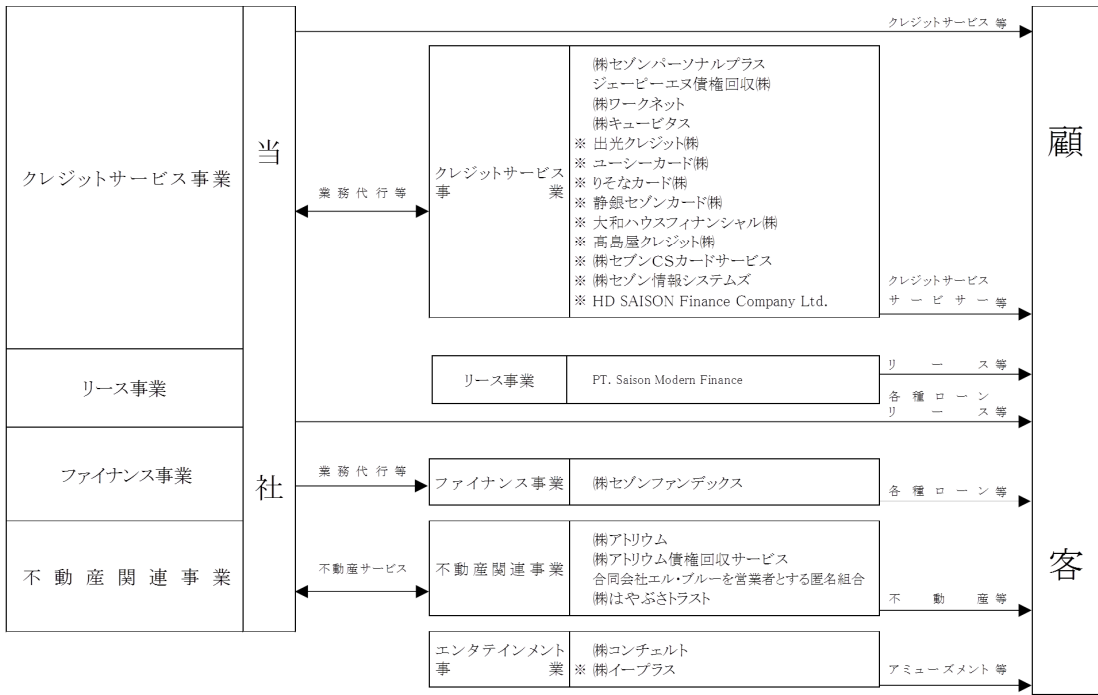
3【事業の内容】

当社及び当社の関係会社（以下「当関係会社グループ」という）は、クレジットサービス、リース、ファイナンス、不動産関連、エンタテインメント等を主な事業の内容として、各社が各々の顧客と直結した事業活動を展開しております。

当関係会社グループの事業の報告セグメントとその概要及び当関係会社グループ各社との主な関連は、次のとおりであります。

クレジットサービス事業……	クレジットカード事業及びサービサー（債権回収）事業等を行っております。
＜主な関係会社＞	(株)セゾンパーソナルプラス、ジェーピーエヌ債権回収(株)、(株)ワークネット、(株)キュービタス、出光クレジット(株)、ユーシーカード(株)、りそなカード(株)、静銀セゾンカード(株)、大和ハウスフィナンシャル(株)、高島屋クレジット(株)、(株)セブンCSカードサービス、(株)セゾン情報システムズ、HD SAISON Finance Company Ltd.
リース事業……………	リース事業を行っております。
＜主な関係会社＞	PT. Saison Modern Finance
ファイナンス事業……………	信用保証事業及びファイナンス関連事業を行っております。
＜主な関係会社＞	(株)セゾンファンデックス
不動産関連事業……………	不動産事業及び不動産賃貸事業等を行っております。
＜主な関係会社＞	(株)アトリウム、(株)アトリウム債権回収サービス、合同会社エル・ブルーを営業者とする匿名組合、(株)はやぶさトラスト
エンタテインメント事業……	アミューズメント事業等を行っております。
＜主な関係会社＞	(株)コンチェルト、(株)イープラス

事業の系統図は次のとおりです。



無印………連結子会社

※ ……持分法適用関連会社

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合又は 被所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ㈱セゾンファンデックス	東京都豊島区	4,500	クレジットサー ビス事業 及びファイナ ンス事業	100.0 (一)	当社は、カードの決済代行業務、当社ATM機での代行融資及び貸付等を行っております。 役員の兼任等 有
㈱コンチェルト	東京都豊島区	2,216	不動産関連事業 及びエンタテインメント事業	100.0 (一)	当社は、事務用機器等のリース及び事務所用建物の賃借を行っております。また、カード加盟店契約に基づき、当社は立替払いを行っております。 役員の兼任等 有
ジェーピーエス債権回収㈱	埼玉県朝霞市	1,053	クレジットサー ビス事業	100.0 (100.0)	当社の債権回収の一部を業務委託しております。また、当社は事務用機器等のリースを行っております。 役員の兼任等 無
㈱アトリウム債権回収サービス	東京都千代田区	500	不動産関連事業	100.0 (100.0)	－
㈱キュービタス	東京都新宿区	100	クレジットサー ビス事業	51.0 (一)	当社は、カードの業務委託及び貸付等を行っております。 役員の兼任等 有
㈱ワークネット	東京都豊島区	100	クレジットサー ビス事業	100.0 (100.0)	－
㈱セゾンパーソナルプラス	東京都豊島区	82	クレジットサー ビス事業	100.0 (一)	当社は、人材派遣の委託を行っております。 役員の兼任等 有
㈱アトリウム	東京都千代田区	50	不動産関連事業	100.0 (一)	当社の不動産担保ローン顧客の保証を行っております。また、当社は事務用機器等のリース及び貸付を行っております。 役員の兼任等 有
㈱はやぶさトラスト	東京都千代田区	10	不動産関連事業	100.0 (100.0)	－
合同会社エル・ブルーを営業者とする匿名組合	東京都港区	10	不動産関連事業	－ (100.0)	－
PT. Saison Modern Finance	インドネシア ジャカルタ	1,000億 インドネシ アルピア	リース事業	70.0 (一)	役員の兼任等 無
(持分法適用関連会社) 出光クレジット㈱	東京都墨田区	1,950	クレジットサー ビス事業	50.0 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 有
㈱セゾン情報システムズ (注) 3	東京都豊島区	1,367	クレジットサー ビス事業	46.8 (一)	当社のシステム開発及び情報処理の事務委託等をしております。 役員の兼任等 無
りそなカード㈱	東京都江東区	1,000	クレジットサー ビス事業	22.4 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 無
㈱イープラス	東京都渋谷区	972	エンタテインメ ント事業	50.0 (一)	カード加盟店契約に基づき、当社は立替払いを行っております。 役員の兼任等 無
ユーシーカード㈱	東京都港区	500	クレジットサー ビス事業	31.0 (一)	当社は、カードの業務委託等を行っております。 役員の兼任等 有
㈱セブンCSカードサービス	東京都千代田区	100	クレジットサー ビス事業	49.0 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 有
高島屋クレジット㈱	東京都中央区	100	クレジットサー ビス事業	33.4 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 有
大和ハウスフィナンシャル㈱	大阪市中央区	100	クレジットサー ビス事業	30.0 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 有
静銀セゾンカード㈱	静岡市駿河区	50	クレジットサー ビス事業	50.0 (一)	当社は、カードの業務受託等を行っております。 役員の兼任等 有
HD SAISON Finance Company Ltd.	ベトナム ホーチミン	11,000億 ベトナムドン	クレジットサー ビス事業	49.0 (一)	役員の兼任等 有

- (注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された報告セグメントの名称を記載しております。
- 2 「議決権の所有又は被所有割合」欄の（内書）は間接所有であります。
- 3 有価証券報告書の提出会社であります。
- 4 特定子会社に該当する会社はありません。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成30年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（名）
クレジットサービス事業	4,175 (2,793)
リース事業	264 (5)
ファイナンス事業	307 (14)
不動産関連事業	213 (46)
エンタテインメント事業	241 (222)
全社（共通）	194 (14)
合計	5,394 (3,094)

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
 2 従業員数欄の（外書）は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
 3 前連結会計年度末と比べ従業員数が1,527名増加しております。主な増加要因は、平成29年9月16日の当社人事制度改定により、アルバイトを除く嘱託及びパートの雇用形態を従業員として変更したことによるものです。

(2) 提出会社の状況

平成30年3月31日現在

従業員数（名）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）
3,297 (702)	39.1	10.4	5,044,865

セグメントの名称	従業員数（名）
クレジットサービス事業	2,622 (679)
リース事業	256 (3)
ファイナンス事業	225 (6)
全社（共通）	194 (14)
合計	3,297 (702)

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
 2 従業員数欄の（外書）は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
 3 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
 4 前事業年度末と比べ従業員数が1,008名増加しております。主な増加要因は、平成29年9月16日の人事制度改定により、アルバイトを除く嘱託及びパートの雇用形態を従業員として変更したことによるものです。

(3) 労働組合の状況

組合の活動については特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、「サービス先端企業」として、「顧客満足主義の実践」「取引先との相互利益の尊重」「創造的革新の社風創り」の3点を共通の価値観として浸透させ、競争に打ち勝ち、お客様、株主の皆様、そしてすべての取引先の皆様の期待に添うようにチャレンジを続け社会的責任を果たしてまいります。

カードビジネスを中核に、ネットビジネスやリース事業、ファイナンス事業など、さまざまなビジネスにおいてグループ各社とのシナジーを強化していく一方、お客様に付加価値の高いサービスを提供するため、多種多様な企業との提携ネットワークの充実を図ってまいります。また、カード会員など顧客基盤の拡充によって、提携先企業の売上拡大と顧客ロイヤルティの向上に寄与することで、当社グループ及び提携先企業の相互利益を極大化してまいります。

(2) 中長期的な会社の経営戦略及び対処すべき課題

当社は、「サービス先端企業」という経営理念のもと、30年以上にわたるカードビジネスで培ってきたノウハウや約3,700万人の顧客基盤、革新的な商品・サービス、多種多様な提携パートナーといった企業資産を活用し、あらゆる個人・法人に対して最適なソリューションを提供し続けております。当社グループを取り巻く経営環境は、AI（人工知能）に代表される先進的なテクノロジーを用いた顧客サービスの革新や業務のオートメーション化など、業界を超えてイノベーションが加速しており、企業間競争がより一層激しさを増すものと予想されます。

このような状況において、当社は「Neo Finance Company in Asia」を経営ビジョンとして掲げた中期経営計画の最終年度を迎えるにあたり、マーケットにおける競争力をより一層強固にするために、ビジネスモデルの変革に引き続き取り組んでまいります。クレジットカードビジネスだけでなく、ビッグデータを活用したインターネットビジネスやファイナンスビジネス、法人マーケットのキャッシュレス化を推進するソリューションビジネス、“貯蓄から投資へ”の流れを捉えた資産運用ビジネス、そして日本で培ったノウハウを活用したアジア圏内の金融ビジネスを軸に、お客様のニーズと利便性を徹底的に追求する姿勢とオープンイノベーションを推進することで、「アジアにおいて他にない新たなファイナンスカンパニー」となることに挑戦してまいります。

同時に、今までの延長線上ではないビジネスモデルの変革にむけ、社員一人ひとりが情熱を持ってチャレンジを続けるイノベティブな企業体への成長を目指し、女性活躍をはじめとするダイバーシティ&インクルージョンを強く推進してまいります。今後も、お客様の利便性向上や提携先企業の売上高拡大に貢献する「コラボレーション経営」の追求とビジネス領域の拡大に取り組み、さまざまな社会の課題に対して当社ならではのアプローチを継続いたします。そして、Environment（環境）・Social（社会）・Governance（ガバナンス）を意識した経営を実践し、これまでよりも便利で豊かな社会の発展に寄与することで、当社の持続的な企業価値の向上を目指してまいります。

当連結会計年度を終えた時点で、当社グループにおける対処すべき事業上の課題及び諸施策は、次のとおりであります。

① クレジットカードビジネスのリモデリングによるキャッシュレス化の推進

当社及びカード合弁会社などグループ各社が、会員募集やプロセッシング機能、与信・回収体制等それぞれの強みを発揮することで、顧客基盤を拡大するとともに、資本や系列・規模にとらわれないさまざまな企業との事業連携により、お客様からご支持いただける決済サービスの開発・提供を推進し、マーケットシェアの拡大に取り組んでまいります。

決済サービスの多様化として、クレジットカードに加え、プリペイドカードやスマートフォン決済サービス、決済代行機能など、現金市場を打ち崩す施策の展開により、キャッシュレス決済市場におけるNo.1カンパニーを目指してまいります。また、個人消費にとどまらず、法人決済マーケットの取り込みとして、企業規模・ニーズに応じた最適なソリューションを提供することで、企業における各種決済領域のキャッシュレス化とバックオフィス業務の効率化を推進してまいります。

当社は、有効期限のないポイントを発行しております。ポイントで長期投資を疑似体験できる「ポイント運用サービス」の開始、㈱ゆうちょ銀行及び日本郵便㈱が発行するプリペイドカード「mijica(ミジカ)」へのポイントプログラム提供など、これまでのクレジットカードポイントの常識を覆しながら新たな「永久不滅ポイント経済圏」の構築を進めております。今後も、お客様に利便性の高いサービスを企画・提供し、彩り豊かな生活を楽しんでいただくことで、唯一無二のポイントサービスとして成長してまいります。

② デジタルデバイス・顧客データを駆使したビジネス創造

成長を続けるネット市場に対応すべく、ネット会員やスマートフォン向けアプリ会員のさらなる増強に努めるとともに、優良なコンテンツ・プラットフォームを持つ有力ネット企業や新技術を有するベンチャー企業と機動的に連携し、総合ポイントサイト「セゾンポイントモール」を始めとする新規ネットビジネスを創造し、ネット上のさまざまなサービスから収益を生み出す新たなビジネスモデルを確立してまいります。

また、1,500万人超のネット会員の興味・関心を踏まえたコンテンツビジネスやオリジナルメディア開発のほか、顧客属性やカード利用履歴・WEB上での行動履歴などの当社保有データと外部企業データとの連携により、カード会員に対する最適な情報配信や、法人向けマーケティングソリューションの提供を実現するビッグデータを活用した広告・マーケティング事業の創造に取り組んでまいります。

③ マーケットニーズに即したリース事業やファイナンス事業のさらなる成長戦略

クレジットカード事業のみならず、事業者の設備投資計画に合わせてOA通信機器や厨房機器などを提供するリース&レンタル、地域金融機関と提携し、資金使途を事業性資金にも広げたフリーローンの信用保証、カード会員向け優待を付加した「フラット35」、投資用不動産購入をサポートする「セゾンの資産形成ローン」など、マーケットニーズに即したファイナンス機能の提供と提携先企業とのリレーション強化を通じて収益源の多様化を実現しております。また、家賃保証事業に参入し「セゾンの家賃保証 Rent Quick」の取り扱いを開始するなど環境変化に強いノンバンクとしての事業基盤構築に取り組んでまいります。

④ アジア圏内でのリテール金融ビジネスの推進と中長期的な海外戦略の基盤づくり

既に進出している中国・ベトナム・インドネシア・シンガポールにおいては、現地法人など資本業務提携を行った現地企業との連携強化により、各国の消費者ニーズに即した商品やサービスの提供を推し進め、リテール金融ビジネスの事業推進を加速してまいります。

また、未進出エリアにおいては、各国に進出している日系有力企業及び現地企業との戦略的パートナーシップにより現地ネットワークや事業領域を拡大し、フィリピン、マレーシア、タイ、ミャンマー、インドなど近隣のアジア諸国のファイナンス市場への参入を推進することで中長期的な海外戦略の基盤づくりへと事業展開を進めてまいります。

⑤ 与信管理・回収体制強化による債権の健全化や経費構造の転換による事業の筋肉質化

多重債務者の未然防止対応に注力する一方、審査から回収にいたるオペレーション体制を常に改善し、効果的かつ効率的な与信・回収体制の強化を図るとともに、内外の環境変化に応じた審査基準の機動的な見直しを行うことで、継続的に債権内容の健全化に努めております。

また、ITの活用による業務効率化と与信精度向上を意識した施策により、事業構造のさらなる筋肉質化を図ってまいります。

⑥ コーポレート・ガバナンスの充実・強化

当社は、株主の皆様はもとより、お客様、取引先、当社グループで働く社員というステークホルダーの皆様から理解と賛同を得るためには、経営目標の達成とあわせてコーポレート・ガバナンスの充実が極めて重要であると認識し、経営における透明性の向上と経営監視機能の強化のため、内部統制システムやコンプライアンス体制の整備を図っております。

当社グループの業務に直接関連する法令をはじめ、あらゆる法令やルールへの遵守・運用、個人情報の適正管理に向けた全社的な取り組み、お客様に安心してカードをご利用いただくためのシステムの安全性・安定性の確保と効率化などに継続して取り組んでまいります。

今後も引き続き、グループ各社との情報連携及びグループ経営管理体制のさらなる充実を図り、連結企業価値向上に向けたガバナンス体制の強化を進めてまいります。

2【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、文中における将来に関する事項は、有価証券報告書提出日現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経済状況

当社グループの主要事業であるクレジットサービス事業、リース事業、ファイナンス事業、不動産関連事業及びエンタテインメント事業の業績及び財政状態は、国内の経済状況の影響を受けます。すなわち、景気後退に伴う雇用環境、家計可処分所得、個人消費等の悪化が、当社グループが提供しているクレジットカードやローン、信用保証及び不動産担保融資等の取扱状況や返済状況、ひいては営業収益や貸倒関連費用等に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、中小規模の企業を主要顧客とするリース事業についても、景気後退に伴う設備投資低迷や企業業績悪化によって、営業収益や貸倒関連費用をはじめとした業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 調達金利の変動

社債の発行や金融機関からの借入等に加え、金利スワップ等の活用により資金の安定化、固定化を図るなど、金利上昇への対応を進めておりますが、想定以上の金融情勢の変動や当社グループの格付けの引き下げによって調達金利が上昇し、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。すなわち、貸付金利等の変更は、顧客との規約の変更、同業他社の適用金利等、総合的判断が必要とされるため、調達金利の上昇分を適用金利に転嫁できない事態が生じた結果、利鞘の縮小を招く可能性があります。

(3) 競争環境

日本の金融制度は規制が緩和されてきており、これに伴ってリテール金融業界再編の動きが活発化しております。クレジットカード業界においても再編や異業種からの新規参入が増加するなど、ますます競争が激化しております。このような市場変化に伴い、加盟店手数料率の低下をはじめとした、取引先との取引条件の変更等が生じた場合、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 主要提携先の業績悪化

クレジットサービス事業において、提携カード発行契約あるいは加盟店契約等を通じて多数の企業や団体と提携しておりますが、こうした提携先の業績悪化が、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。例えば、当社の有力なカード会員獲得チャネルである、提携小売企業の集客力や売上の落ち込みが会員獲得の不調や取扱高の低迷につながり、ひいては営業収益にマイナスの影響を与える可能性があります。

また、当社グループはこうした提携先の一部と出資関係を結んでいるため、提携先の業績悪化が、保有する有価証券の評価損をもたらす可能性があります。

(5) システムオペレーションにおけるトラブル

クレジットサービス事業をはじめとして、当社グループの主要な事業は、コンピュータシステムや通信ネットワークを使用し、大量かつ多岐にわたるオペレーションを実施しております。従って、当社グループ若しくは外部接続先のハードウェアやソフトウェアの欠陥等によるシステムエラー、アクセス数の増加等の一時的な過負荷による当社グループ若しくは外部接続先のシステムの作動不能、自然災害や事故等による通信ネットワークの切断、不正若しくは不適切なオペレーションの実施といった事態が生じた場合、当社グループの営業に重大な支障を来し、ひいては当社グループに対する信頼性の著しい低下等により、業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) 個人情報の漏洩等

当社グループは、カード会員情報等の個人情報を大量に有しており、適正管理に向けた全社的な取り組みを実施しておりますが、万が一、個人情報の漏洩や不正利用などの事態が生じた場合、個人情報保護法に基づく業務規程違反として勧告、命令、罰則処分を受ける可能性があります。これにより、当社グループに対する信頼性が著しく低下することで、業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

(7) 規制の変更

当社グループは、現時点の規制に従って、また、規制上のリスクを伴って業務を遂行しております。当社グループの事業は、「割賦販売法」、「貸金業法」、その他の法令の適用を受けておりますが、これらの法令の将来における改定若しくは解釈の変更や厳格化、又は新たな法的規制によって発生する事態により、当社グループの業務遂行や業績及び財政状態に大きな影響を及ぼす可能性があります。

また、「利息制限法」に定められた利息の上限金利を超過する部分に対して、不当利得として返還を請求される場合があります。当社グループは将来における当該返還請求に備え、利息返還損失引当金を計上しておりますが、今後の法的規制の動向等によって当該返還請求が予想外に拡大した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

但し、どのような影響が発生しうるかについて、その種類・内容・程度等を予測することは非常に困難であり、当社グループがコントロールしうるものではありません。

(8) たな卸資産及び固定資産の減損又は評価損

当社グループが保有する土地・建物の時価が著しく下落した場合、又は固定資産を使用している事業の営業損益に悪化が見られ、短期的にその状況の回復が見込まれない場合、当該固定資産の減損が発生し、業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。また、投資有価証券・関係会社株式・出資金について、時価が著しく下落又は投資先の業績が著しく悪化した場合には評価損が発生する可能性があります。

(9) 自然災害等

地震等の大規模な自然災害により、当社グループの保有する店舗や施設等への物理的な損害、従業員への人的被害があった場合には、当社グループの業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

（1）財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、政府による経済政策や日本銀行の金融緩和等により、企業収益や雇用・所得環境の改善が見られるなど、景気は緩やかな回復基調で推移いたしました。一方で、中国を始めアジア新興国等の経済の先行き、政策に関する不確実性、米国における今後の政策の動向並びに金融資本市場の変動の影響などに引き続き留意が必要な状況となっております。

当社グループを取り巻く経営環境は、AI（人工知能）に代表される先進的なテクノロジーを用いた顧客サービスの革新や業務のオートメーション化など、業界を超えてイノベーションが加速しており、企業間競争がより一層激しさを増しております。

このような状況において、当社は「サービス先端企業」という経営理念のもと、「Neo Finance Company in Asia」を中期経営ビジョンとして掲げる中期経営計画を前期より始動いたしました。2年目となる当期につきましては、成長のスピードをさらに加速させるため、グループ全体でビジネスモデルの変革に挑戦してまいりました。モバイル決済をはじめとしたカードレス決済スキームへの先駆的対応や先進的なポイントサービスの創造により「永久不滅ポイント」の付加価値を高めるなど、顧客のニーズや利便性を追求した商品・サービスの提供に努めるとともに、日本で培ったノウハウを活用してアジアでのリテール金融ビジネスの拡大に取り組みました。また、当社グループ社員により結成されたグループ「東池袋52」は、さまざまな外部イベントに参加し、若年層を中心としたお客様との親近感を醸成するなど、当社ブランドの向上につながりました。さらに、24時間365日オンライン処理が可能な共同基幹システムの運用を開始したほか、複数に分類されている社員区分を撤廃し、全員を無期雇用とした上で、賃金を含むすべての制度を統一する「全社員共通人事制度」を導入するなど、中長期にわたって成長企業であり続けるための基盤構築に取り組んでまいりました。

この結果、当連結会計年度の財政状態及び経営成績は以下のとおりとなりました。

（a）財政状態

当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末と比較して2,199億76百万円増加し、2兆9,400億27百万円となりました。これは主に、ショッピング取扱高の増加等により割賦売掛金が1,593億67百万円増加したこと及び投資有価証券が238億85百万円増加したことによるものです。

当連結会計年度末の負債は、前連結会計年度末と比較して1,861億89百万円増加し、2兆4,593億58百万円となりました。これは主に、有利子負債が1,197億66百万円増加したこと及び支払手形及び買掛金が573億33百万円増加したことによるものです。

当連結会計年度末の純資産は、前連結会計年度末と比較して337億86百万円増加し、4,806億69百万円となりました。これは主に、利益剰余金が326億10百万円増加したことによるものです。

（b）経営成績

当連結会計年度における経営成績は次のとおりです。

	(百万円)			(円)	
	営業収益	営業利益	経常利益	親会社株主に 帰属する当期純利益	1株当たり 当期純利益
当連結会計年度	292,183	40,771	56,717	38,329	234.67
前連結会計年度	278,944	31,213	53,065	42,253	258.70
伸び率	4.7%	30.6%	6.9%	△9.3%	△9.3%

営業収益については、当社グループの商品・サービスを組み合わせ、個人・法人のニーズに応じたソリューション営業を全社一丸となって推進するとともに、先進的なテクノロジーを用いるベンチャー企業等と連携し新たな収益源の創出に向けた取り組みを強化するなど、持続的成長を支える顧客基盤拡大に努めました。

主力の「クレジットサービス事業」では、プレミアムカードである「セゾン・アメリカン・エクスプレス®・カード」に加え、「三井ショッピングパークカード《セゾン》」など提携カードの会員募集を推進いたしました。

また、企業のバックオフィス業務の効率化など、ビジネスをサポートする法人・個人事業主向けカードの会員募集を推進する一方で、WEB等を活用したカード会員募集の効率化にも取り組みました。以上の結果、新規カード会員数は244万人（前期比6.6%減）となりましたが、退会防止策により当連結会計年度末のカード会員数は2,695万人（前期末比1.8%増）となりました。

カード取扱高拡大の取り組みとしては、提携小売業を中心としたカード利用活性プロモーションに加え、公共料金や携帯電話料金、税金など継続決済の登録促進、企業における事業費決済を推進した結果、ショッピング取扱高は4兆6,830億円（前期比4.6%増）、ショッピングのリボルビング残高は4,142億円（前期末比8.8%増）、カードキャッシング残高は2,317億円（前期末比0.1%増）と伸長したことなどにより、同事業全体では増収となりました。

「リース事業」では、リース既存主力販売店との共同キャンペーン実施等による信頼関係強化や新規重点販売店への営業強化に取り組んだものの減収となりました。

「ファイナンス事業」では、新たに家賃保証事業に参入したほか、信用保証事業において提携金融機関との営業・管理両面にわたる密接な連携により保証残高が3,452億円（前期末比3.3%増）と伸長したことや、提携先のニーズを汲み取った「フラット35」及び「セゾンの資産形成ローン」が収益貢献したことなどにより、増収となりました。

「不動産関連事業」では、堅調な市況を背景に、実需向けの不動産を中心に需要が継続したことなどにより、増収となりました。

「エンタテインメント事業」では、アミューズメント事業における競争激化の影響等により、減収となりました。

以上の結果、営業収益は2,921億83百万円（前期比4.7%増）となりました。

営業費用においては、市場金利低下の影響等により金融費用が減少したものの、カード取扱高拡大に伴う連動費用の増加や共同基幹システムが稼動したことなどの影響により、2,514億12百万円（前期比1.5%増）となりました。

以上の結果、営業利益は407億71百万円（前期比30.6%増）、経常利益は567億17百万円（前期比6.9%増）となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益は、保有する投資有価証券の一部を売却したことに伴い特別利益として投資有価証券売却益を85億36百万円計上した一方で、共同基幹システムへの移行に係る一時費用として129億69百万円の特別損失を計上した影響などにより、383億29百万円（前期比9.3%減）となりました。

1株当たり当期純利益は234円67銭となりました。

当連結会計年度におけるセグメントの業績は次のとおりです。

（単位：百万円）

	営業収益			営業利益		
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	伸び率	前連結 会計年度	当連結 会計年度	伸び率
クレジットサービス	211,633	220,320	4.1%	7,971	12,719	59.6%
リース	13,278	12,885	△3.0%	4,313	4,349	0.8%
ファイナンス	31,074	35,417	14.0%	12,817	16,213	26.5%
不動産関連	13,648	15,472	13.4%	4,904	6,401	30.5%
エンタテインメント	10,396	9,288	△10.7%	1,199	1,082	△9.8%
計	280,030	293,384	4.8%	31,208	40,767	30.6%
調整額	△1,086	△1,200	—	5	3	—
連結	278,944	292,183	4.7%	31,213	40,771	30.6%

※ 各セグメントの営業収益及び営業利益は、セグメント間取引消去前の数値を記載しております。

<クレジットサービス事業>

クレジットカード事業、サービサー（債権回収）事業等から構成されております。スマートフォンの活用や、高い技術力をもつベンチャー企業による新たな決済サービスの展開などにより、個人・法人領域ともにキャッシュレス化の潮流が続いております。

このような状況のもと、当社は「顧客の利便性を追求した決済サービスの拡充」「顧客基盤とビッグデータを活用したフィージビネスの拡充」「アジア圏内でのリテール金融ビジネスの推進」など、収益基盤の強化を図りました。また、債権リスクへの取り組み強化に継続して取り組むとともに、テクノロジーを活用した顧客対応・バックオフィス業務の自動化等、事業効率の向上に努めてまいりました。

当連結会計年度における営業収益は2,203億20百万円（前期比4.1%増）、営業利益は127億19百万円（前期比59.6%増）となりました。

当セグメントにおける主な事業の状況は次のとおりです。

① クレジットカード事業

当連結会計年度の新規カード会員数は244万人（前期比6.6%減）、当連結会計年度末のカード会員数は、2,695万人（前期末比1.8%増）、カードの年間稼働会員数は1,498万人（前期比1.3%増）となりました。

また、当連結会計年度のショッピング取扱高は4兆6,830億円（前期比4.6%増）、当連結会計年度末のショッピングのリボルビング残高は4,142億円（前期末比8.8%増）、カードキャッシング残高は2,317億円（前期末比0.1%増）となりました。

当連結会計年度の主なトピックスは以下のとおりです。

a. 顧客の利便性を追求した決済サービスの拡充

当社は、日本の個人消費における最大の決済手段である現金市場を打ち崩す施策の展開により、キャッシュレス社会を実現すべく、クレジットカードやプリペイドカードなどさまざまな決済手段の開発・提供を推進しております。

クレジットカードでは、プレミアムカードである「セゾン・アメリカン・エクスプレス®・カード」の中でも特に高稼働・高単価が見込まれるプラチナカード・ゴールドカードの会員募集に継続して注力いたしました。また、三井不動産㈱・三井不動産商業マネジメント㈱と提携・発行している「三井ショッピングパークカード《セゾン》」の推進に加え、ウォルマート・ジャパン・ホールディングス㈱及び合同会社西友と提携・発行している「ウォルマートカード セゾン・アメリカン・エクスプレス®・カード」、㈱パルコと提携・発行している「PARCOカード」等、提携先企業と共同でのカード会員募集に取り組みました。

サービス面では、お客様のご利用状況に応じたプロモーション施策の推進に加え、提携小売業を中心としたカード利用活性プロモーション、リボルビング払いやボーナス払いの訴求強化に取り組むとともに、公共料金や携帯電話料金、税金等の継続的なカード決済の推進、「Apple Pay」の登録・利用施策の強化など現金マーケットの取り込みに積極的に取り組み、ショッピング取扱高の拡大に努めました。

法人決済マーケットの取り込みとしては、クラウド型経費精算ソリューションを提供する企業等と提携し、当社コーポレートカードと組み合わせることで、企業の経費精算業務の大幅な省力化などに取り組んだほか、個人事業主の事業費決済のニーズに対応するビジネスカード「セゾンプラチナ・ビジネス・アメリカン・エクスプレス®・カード」の発行を推進するなど、企業規模・ニーズに対する最適なソリューションを提供することで、企業における各種決済領域のキャッシュレス化とバックオフィス業務の効率化に取り組んでいます。

また、総務省が推進するマイナンバーカードを活用したマイキープラットフォーム構想に賛同し、「永久不滅ポイント」の地域経済応援ポイントへの交換プログラムに参加するなど、決済・ポイントを通じた地域経済活性化への貢献に取り組んでいます。

一方、決済領域の拡大に向けた取り組みとしては、ドラッグストア業界大手の㈱ココカラファインと提携・発行している「ココカラクラブカード」や、海外渡航者向けプリペイドカード「NEO MONEY」、㈱パルコと提携・発行している「PARCOプリカ」等を継続して推進するとともに、㈱ゆうちょ銀行及び日本郵便㈱が発行するプリペイドカード「mijica（ミジカ）」の業務運営を受託し、ご利用に応じた永久不滅ポイントの付与や、セゾンカードのショッピングで貯まった永久不滅ポイントから「mijica（ミジカ）」へのチャージを可能にするなど、プリペイドカードのリーディング企業としてのノウハウを最大限活用し、さらなる新規提携先の開拓や商品性の向上に努めました。

b. 顧客基盤とビッグデータを活用したフィービジネスの拡充

当社は、インターネットを活用した新規ビジネス開発を推進するにあたり、基盤となるネット会員の拡大に努めており、当連結会計年度末のネット会員数は1,501万人（前期末比8.3%増）となりました。ネット会員とのコミュニケーション手段として提供しているスマートフォン用アプリ「セゾンPortal」「UC Portal」のダウンロード数がセゾンカウンターやホームページ上での訴求により伸長し、ネットサービス全般の利用促進に寄与しております。このほか、新たなサービスとして、平成30年1月より㈱Origamiと協業して「セゾンPortal」「UC Portal」内に、事前のカード登録手続きなく利用できるスマートフォン決済サービス「セゾンOrigami Pay」「UC Origami Pay」を導入しております。

また、永久不滅ポイントに係わる新しい取り組みとして、気軽に長期投資の疑似体験が可能な「ポイント運用サービス」を積極的に訴求し、当連結会計年度末において、13万人の会員の皆様にご利用いただいております。平成29年7月には当社が運営するポイントモールである「永久不滅.com」を、「セゾンポイントモール」に名称変更し、「貯める」「使う（交換する）」「運用する」を実現する総合ポイントサイトへと発展させることで、「永久不滅ポイント経済圏」構築の第一歩と位置づけるとともに、スマートフォンユーザーの利便性向上のため「セゾンポイントモールアプリ」の提供を開始しました。

拡大するネット会員基盤や会員データを活用したマーケティング事業では、前期比13.9%の収益増を実現いたしました。セゾンポイントモールやNetアンサー、Eメール等のオウンドメディアを活用した広告販売に加え、㈱ヴァリユーズとの共同事業であるインターネット行動ログ分析サービスの「eMark+（イーマークプラス）」等のマーケティングソリューションが堅調に推移しております。

当社は、変化の激しいIT分野において、先進的な技術やビジネスモデルを積極的に取り込むために有力ネット企業とのアライアンスや、ベンチャー企業とのオープンイノベーションを推進しております。平成29年4月にはビッグデータ基盤「セゾンDMP」が保有するデータを活用した付加価値提供型ビジネスのさらなる強化を目的に、最新のアドテクノロジーを駆使した次世代型デジタルマーケティングカンパニーである㈱オムニバスの発行済株式を100%取得いたしました。個人消費の活性化に向けたビッグデータの活用が官民共同の課題として推進される中、当社は業界最大規模の顧客基盤や決済ノウハウ、デジタルマーケティング技術を有効に活用することで新たなビッグデータビジネスモデルの創出に取り組むなど、ネット上のさまざまなサービスから収益を生み出す新たなビジネスモデルを構築してまいります。

c. 債権リスクへの取り組み

初期与信・途上与信においては、内外の環境やお客様の状況に応じた適正与信を実施するとともに、モニタリング強化によって不正利用被害の抑制を図っております。債権回収においては、お支払い期日までの事前入金訴求によって延滞発生を未然に防止する一方、延滞発生後のお客様に対してはコンタクト及びカウンセリングの強化により、お客様に寄り添った債権保全を行っております。

d. アジア圏内でのリテール金融ビジネスの推進

当社は、海外事業を将来の収益基盤の新たな柱として位置づけ、成長著しいアジア圏内においてファイナンスビジネスを中心に事業を展開しております。

ベトナムにおけるHD SAISON Finance Company Ltd. では、二輪・家電向けローンを中心としたリテールファイナンス事業を展開しており、平成27年5月の資本参加以降、営業拠点数・債権残高はともに大幅に拡大し、ベトナム国内での存在感を一層高めることに成功しております。また、クレジットカード事業の新規立ち上げやベトナム事業のさらなる拡大に向け、Ho Chi Minh City Development Joint Stock Commercial Bankの株式の一部を取得いたしました。今後、両社が持つ事業やノウハウ、ネットワークを活用することで、急速に成長するベトナムのリテールファイナンス市場において消費者ニーズに即した商品やサービスの提供を推進し、現地における圧倒的No.1の総合リテールファイナンスカンパニーの実現を目指してまいります。

また、東南アジア配車サービス最大手であるGrab Inc.（現Grab Holdings Inc.）と資本業務提携のうえ、東南アジアにおいてスマートフォンを活用したデジタルレンディングの開始に向けGrab Financial Services Asia Inc.を設立いたしました。登録ドライバーの配車履歴や実働状況、決済数などのデータを活用し、240万人のGrab登録ドライバーへのローン提供から開始し、一般ユーザーへと対象を拡大してまいります。当社が30年以上にわたり、日本のリテールファイナンス事業で培った与信ノウハウを活かしながら、将来的には高精度の信用スコアリングを構築し、新たなビジネス創出やカードレス決済の事業化を目指してまいります。

② サービサー（債権回収）事業

小口無担保債権の回収等の受託と債権買取を主な事業としております。企業業績並びに雇用・所得の改善による経済の緩やかな回復を背景に、新規取引先の増加、回収スキルの向上等により取引量及び回収金額が拡大した結果、同事業全体では増益となりました。

(A) 取扱高

(単位:百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
カードショッピング	4,476,608	4,683,038
カードキャッシング	261,138	254,223
証書ローン	10,943	9,009
プロセッシング・他社カード代行	2,670,191	2,871,731
クレジットサービス関連	32,827	30,779
クレジットサービス事業計	7,451,709	7,848,782

(注) 上記の部門別取扱高の内容及び範囲、主な手数料等の状況は次のとおりであります。

カードショッピング	取扱高は、当社が発行するクレジットカードによるカード会員のショッピング利用額であります。カードショッピングにより得られる主な手数料〔主要な料率〕は、カード会員がリボルビング払い等を利用した場合の会員（顧客）手数料〔クレジット対象額に対して実質年率9.6%～15.0%〕、加盟店より得られる加盟店手数料〔クレジット対象額の1.6%〕であります。
カードキャッシング	取扱高は、当社及び連結子会社が発行するクレジットカード又はローン専用カードによるカード会員のキャッシング利用額であります。カードキャッシングにより得られる主な手数料〔主要な料率〕は、利息〔融資額に対して実質年率6.5%～18.0%〕であります。
証書ローン	取扱高は、当社及び連結子会社がカードキャッシング以外で直接会員又は顧客に金銭を貸付ける取引における融資元本の期中平均残高であります。主な手数料〔主要な料率〕は、利息〔融資額に対して実質年率3.8%～17.4%〕であります。
プロセッシング・ 他社カード代行	取扱高は、当社がプロセッシング業務を受託している会社のカードによるショッピング利用額及び、当社ATM機の利用について提携している他社カードのカード会員のキャッシング利用額であります。手数料については提携会社より得られる代行手数料等であります。

(B) 営業収益

(単位:百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
カードショッピング	124,654	131,827
カードキャッシング	35,473	34,745
証書ローン	1,511	1,329
プロセッシング・他社カード代行	25,542	27,034
業務代行	13,934	15,045
クレジットサービス関連	9,217	8,969
金融収益	261	208
セグメント間の内部営業収益又は振替高	1,037	1,158
クレジットサービス事業計	211,633	220,320

(C) 会員数及び利用者数

区分	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
クレジットカード発行枚数(枚)	26,466,056	26,950,538
利用者数		
カードショッピング(人)	11,737,698	11,682,610
カードキャッシング(人)	782,742	742,077
証書ローン(人)	32,327	21,037
プロセッシング・他社カード代行(件)	42	42
クレジットサービス関連(人)	21,266	20,567

- (注) 1 クレジットカード発行枚数は自社カードと提携カードの発行枚数の合計であります。
2 利用者数は主として平成29年3月及び平成30年3月における顧客に対する請求件数であります。

<リース事業>

審査ノウハウと与信スピードを強みに、事業者の設備投資計画に合わせ、OA通信機器や厨房機器、空調機器などを中心に営業を推進しております。既存主力販売店との共同キャンペーン実施等による信頼関係強化や、新規重点販売店への営業強化に取り組んだ結果、当連結会計年度における取扱高は1,145億円(前期比5.7%増)、営業収益は128億85百万円(前期比3.0%減)、営業利益は43億49百万円(前期比0.8%増)となりました。

(A) 取扱高

(単位:百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
リース	108,366	114,576
リース事業計	108,366	114,576

(注) 上記の部門別取扱高の内容及び範囲、主な手数料等の状況は次のとおりであります。

リース 当社が顧客に事務用機器等を賃貸する所有権移転外ファイナンス・リース取引であり、取扱高の範囲はリース契約額であります。主な手数料〔主要な料率〕は、リース契約残高に含まれる利息〔リース契約期間に応じてリース取得価額の1.4%～4.6%〕であります。

(B) 営業収益

(単位: 百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
リース	13, 241	12, 851
金融収益	13	14
セグメント間の内部営業収益又は振替高	24	19
リース事業計	13, 278	12, 885

(C) 利用者数

区分	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
リース (件)	420, 456	422, 366

(注) 利用者数は主として連結会計年度末における残高保有件数であります。

<ファイナンス事業>

信用保証事業、ファイナンス関連事業から構成されております。信用保証事業では、提携金融機関との営業・管理両面の密接な連携を通じて良質案件の獲得に注力した結果、保証残高が伸長いたしました。また、ファイナンス関連事業では、「フラット35」並びに「セゾンの資産形成ローン」を中心に提携先のニーズを汲み取り、良質な資産の積み上げに取り組みました。

以上の結果、当連結会計年度における営業収益は354億17百万円（前期比14.0%増）、営業利益は162億13百万円（前期比26.5%増）となりました。

当セグメントにおける主な事業の状況は次のとおりです。

① 信用保証事業

個人向け証書貸付型フリーローンの保証業務を中心に、提携金融機関との営業・管理両面にわたる密接な連携により、良質な案件の獲得に注力してまいりました。資金使途を事業性資金にも広げたフリーローン保証商品を通じて、地域金融機関等とのきめ細やかな連携体制の構築に努めた結果、当連結会計年度においては、提携先数は合計で405先（前期末差2先増）、保証残高（債務保証損失引当金控除前）は3,424億円（前期末比2.5%増）となりました。

② ファイナンス関連事業

「フラット35」は、カード会員向け優待やクレジットカード事業で培ったセゾンブランドが持つ信頼感・安心感等を背景に「セゾンのホームアシストローン」（住宅購入時の諸費用ローン）を含めた住宅ローンパッケージとして住宅購入時のサポートを推進いたしました。以上の結果、当連結会計年度の実行件数は6,627件（前期比24.3%増）、実行金額は1,965億円（前期比28.7%増）、貸出残高（住宅金融支援機構への債権譲渡済残高）は5,934億円（前期末比31.8%増）となりました。

また、「セゾンの資産形成ローン」（投資用マンション購入ローン）は、勉強会等を通じた提携先との連携強化により、当連結会計年度の実行件数は5,098件（前期比35.4%増）、実行金額は1,380億円（前期比38.5%増）、貸出残高は3,415億円（前期末比57.5%増）となりました。

当連結会計年度末におけるファイナンス関連事業の債権残高は4,864億円（前期末比46.4%増）となりました。

さらに、平成29年7月に開始した「セゾンの家賃保証 Rent Quick」は、フラット35や資産形成ローン等の事業を通じて築いた提携先との連携により営業強化に努めております。当社はこれまで「フラット35」や「セゾンの資産形成ローン」等の住宅購入時の資金ニーズに応えてまいりましたが、「セゾンの家賃保証 Rent Quick」により、賃貸から購入までをカバーする生活創造金融サービスを展開してまいります。

(A) 取扱高

(単位:百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
信用保証	180,358	153,826
ファイナンス関連	247,037	373,469
ファイナンス事業計	427,395	527,295

(注) 上記の部門別取扱高の内容及び範囲、主な手数料等の状況は次のとおりであります。

信用保証	提携金融機関が行っている融資に関して、当社及び連結子会社が顧客の債務を保証する取引であり、取扱高の範囲は保証元本であります。主な手数料〔主要な料率〕は、保証残高に対して得られる保証料〔平均保証料率6.0%〕であります。
ファイナンス関連	当社及び連結子会社が直接顧客に金銭を貸付ける取引であり、取扱高の範囲は融資元本の期中平均残高であります。主な手数料〔主要な料率〕は、不動産融資におきましては利息〔融資額に対して実質年率1.2%～15.0%と諸手数料(融資額の3.0%以内)〕であります。

(B) 営業収益

(単位:百万円)

部門別	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
信用保証	18,017	18,905
ファイナンス関連	13,056	16,511
セグメント間の内部営業収益又は振替高	—	—
ファイナンス事業計	31,074	35,417

(C) 利用者数

区分	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
信用保証 (件)	331,723	326,686
ファイナンス関連 (件)	36,159	49,471

(注) 信用保証は連結会計年度末における残高保有件数であります。また、ファイナンス関連は主として平成29年3月及び平成30年3月における顧客に対する請求件数であります。

<不動産関連事業>

不動産事業、不動産賃貸事業等から構成されております。堅調な市況を背景に、実需向けの不動産を中心に需要が継続したことにより、不動産売上が増加した結果、当連結会計年度の営業収益は154億72百万円(前期比13.4%増)、営業利益は64億1百万円(前期比30.5%増)となりました。

<エンタテインメント事業>

アミューズメント事業等から構成されており、お客様に支持される健全で安心・快適な店舗づくりに取り組んでおります。当連結会計年度の営業収益は92億88百万円(前期比10.7%減)、営業利益は10億82百万円(前期比9.8%減)となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

① 営業活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における営業活動に使用したキャッシュ・フローは、548億8百万円の支出（前連結会計年度は1,032億80百万円の支出）となりました。

これは主に、買掛金等の営業債務の純増額573億33百万円の収入、税金等調整前当期純利益523億7百万円の計上がある一方で、割賦売掛金等の営業債権の純増額である1,601億2百万円の支出によるものであります。

② 投資活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における投資活動に使用したキャッシュ・フローは、463億80百万円の支出（前連結会計年度は194億62百万円の支出）となりました。

これは主に、投資有価証券の売却等による147億51百万円の収入がある一方で、共同基幹システム開発等の有形及び無形固定資産の取得による445億18百万円の支出によるものであります。

③ 財務活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における財務活動により得られたキャッシュ・フローは、1,125億92百万円の収入（前連結会計年度は1,212億8百万円の収入）となりました。

これは主に、長期借入金の返済による698億85百万円の支出がある一方で、長期借入れによる1,047億円の収入、社債の発行による845億64百万円の収入によるものであります。

以上の結果、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末と比較して、113億42百万円増加し、745億57百万円となりました。

経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの営業収益は「クレジットサービス事業」「リース事業」「ファイナンス事業」「不動産関連事業」「エンタテインメント事業」のセグメントにより構成されております。特に、クレジットカード事業を中心とした「クレジットサービス事業」は主要なセグメントで、当連結会計年度において営業収益合計の7割を超えております。

当社グループの主な営業収益は、カードショッピングが利用された場合に発生する加盟店手数料、カードショッピングのリボルビング払い、カードキャッシング、各種ローン等が利用された場合に発生する顧客手数料等であり

ます。

これに対して当社グループの主な営業費用は、広告宣伝費、ポイント交換費用、貸倒関連費用、人件費、支払手数料、金融費用であります。広告宣伝費及び人件費の相当部分については、主に将来の収益拡大につながるカード会員等の新規顧客獲得に費やされます。

なお、以下の分析におきましては、文中で特に断りがない限り、連結財務諸表の報告数値に基づいた情報であります。

また、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成されております。当社経営陣は、連結財務諸表の作成に際し、決算日における資産・負債の報告数値及び偶発債務の開示と会計期間における収益・費用の報告数値に影響を与える種々の仮定と見積りを行います。

主な項目としては、営業債権、投資有価証券、財務活動、ポイント交換費用、法人税等があり、当社経営陣はこれらの項目に対して継続して評価しております。

見積りであることから不確実な要素があるため、実際の結果と異なる場合があります。特に以下の重要な会計方針が、当社の連結財務諸表の作成における見積りに重要な影響を及ぼすものと考えており、財政状態及び経営成績に関する以下の分析が行われております。

① カードショッピング及びカードキャッシングの収益認識

カードショッピングの顧客手数料のうち、リボルビング払いにつきましては、元本残高に手数料率を乗じて締日の翌日から日割りで算出し、毎月末に当月の期間分を収益認識いたします。分割（アドオン）払いを指定した場合は、利用の時点で手数料総額を算出した後、請求期日が到来した時点で収益認識いたします。当該請求期日が決算日をまたがる場合、翌期以降に係る金額は「割賦利益繰延」として繰延べます。

また、リボルビング払いや分割払いに係る加盟店手数料も、請求期日が到来した時点で収益認識しているため、当該請求期日が決算日をまたがる場合、翌期以降に係る金額を「割賦利益繰延」として繰延べます。

これに対し、カードキャッシングの利息は、元本残高に料率を乗じて日割で算出いたします。収益認識の時期は、カードショッピングの顧客手数料と同様になります。

② 債権流動化

当社グループは、資金調達の一手段として、カードショッピング債権及びリース投資資産の一部を流動化しております。

カードショッピング債権のうち1回払い債権等については、当該債権が計上されるごとに、特定目的会社に売却しますが、その売却代金は必要に応じて前倒入金が可能であり、資金調達と同様の効果が得られます。また、調達コスト相当額を金融費用として認識しております。

リース投資資産については、当該債権を信託し、そこから得られる優先受益権をABL方式による償還を受け、資金調達しております。調達した金額を負債の部に「債権流動化借入金」として計上しており、調達コスト相当額を金融費用として認識しております。

③ 貸倒引当金

貸倒引当金は、主に延滞期間、民事再生や自己破産申し立て等の法的対応等の状況を考慮して、将来の貸倒れの発生を吸収するのに充分であると見込まれる金額を計上しております。法的対応の債務者が増加した場合等、現実の貸倒発生額と当初の見積りとの乖離が生じ、その結果、貸倒引当金が過大若しくは過小となる可能性があります。

④ 利息返還損失引当金

利息返還損失引当金は、将来の利息返還の請求に備え、過去の返還実績等を勘案した必要額を計上しております。なお、今後の法的規制の動向等によって当該返還請求が予想外に増加及び減少した場合、現実の返還額と当初の見積りとの乖離が生じ、その結果、利息返還損失引当金が過大若しくは過小となる可能性があります。

⑤ ポイント引当金

クレジットカードの主な特典として、カードショッピングの利用額に応じて、幅広いアイテムに交換可能なポイントプログラムを提供しております。将来のポイント交換により発生すると予想される費用を、期末のポイント残高を基礎に将来交換が見込まれるポイント残高を見積り、それにポイント単価を乗じて、「ポイント引当金」として計上しております。なお、当該引当金の繰入額については、販売費及び一般管理費の「ポイント引当金繰入額」として計上しております。

⑥ たな卸資産及び固定資産の減損又は評価損

保有する土地・建物の時価が著しく下落した場合、若しくは固定資産を使用している事業の営業損益に悪化が見られ、短期的にその状況の回復が見込まれない場合には、帳簿価額を減額しております。

⑦ 投資有価証券の評価

保有する投資有価証券について、投資先の財政状態の悪化等により、評価額が取得価額と比べ、大幅に下落した場合には、評価損を計上しております。

東京証券取引所等に公開している株式につきましては、期末時点の時価を評価額として使用し、その他の株式につきましては、直近に終了した決算期の財務諸表等を基に、評価額を算出しております。

⑧ 繰延税金資産

当社グループは、将来の課税所得に対する見積りに基づき、一時差異について繰延税金資産を計上しております。

将来の課税所得に対する見積りや実績が低下し、当社グループの繰延税金資産が回収できない可能性が生じた場合には、繰延税金資産を取り崩すため、その分当期純利益の減少をもたらします。

(2) 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当連結会計年度の業績は「経営成績等の状況の概要」で述べたとおり、営業収益は2,921億83百万円（前期比4.7%増）、営業利益は407億71百万円（前期比30.6%増）、経常利益は567億17百万円（前期比6.9%増）、親会社株主に帰属する当期純利益は383億29百万円（前期比9.3%減）となりました。

① 営業収益

表1は、営業収益の内訳を記載しております。当連結会計年度は、「クレジットサービス事業」において、ショッピング取扱高やショッピングのリボルビング残高が増加したことに加え、「ファイナンス事業」において、信用保証残高や「セゾンの資産形成ローン」の貸出残高が増加したことにより、営業収益は2,921億83百万円（前期比4.7%増）となりました。

表1 連結損益計算書の主要項目

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	伸び率 (%)
	金額（百万円）	金額（百万円）	
クレジットサービス事業収益	210,336	218,952	4.1
リース事業収益	13,241	12,851	△2.9
ファイナンス事業収益	31,072	35,417	14.0
不動産関連事業利益	13,619	15,446	13.4
エンタテインメント事業利益	10,396	9,288	△10.7
金融収益	279	226	△18.7
営業収益合計	278,944	292,183	4.7

表2は、表1のクレジットサービス事業収益の内訳であります。

表2 クレジットサービス事業収益の内訳

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	伸び率 (%)
	金額（百万円）	金額（百万円）	
カードショッピング	124,654	131,827	5.8
うち加盟店手数料	70,990	73,597	3.7
うち顧客手数料	45,607	49,940	9.5
うち年会費等	8,056	8,289	2.9
カードキャッシング	35,473	34,745	△2.1
証書ローン	1,511	1,329	△12.0
プロセッシング・他社カード代行	25,542	27,034	5.8
業務代行	13,934	15,045	8.0
クレジットサービス関連	9,219	8,969	△2.7
クレジットサービス事業収益合計	210,336	218,952	4.1

② 販売費及び一般管理費

表3は、販売費及び一般管理費の内訳を記載したものであります。販売費及び一般管理費は、利息返還損失引当金繰入額が減少した一方で、カード取扱高拡大に伴う運動費用の増加や共同基幹システムが稼動したことなどの影響により、2,417億40百万円（前期比2.1%増）となりました。

表3 販売費及び一般管理費の内訳

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	伸び率 (%)
	金額（百万円）	金額（百万円）	
貸倒関連費用	43,346	30,183	△30.4
うち貸倒引当金繰入額	21,162	22,407	5.9
うち利息返還損失引当金繰入額	15,961	629	△96.1
うち債務保証損失引当金繰入額	6,221	7,128	14.6
うち貸倒損失	—	19	—
貸倒関連費用を除く販売費及び一般管理費	193,315	211,557	9.4
うち広告宣伝費	25,231	26,354	4.5
うちポイント引当金繰入額	14,717	16,642	13.1
うち人件費	46,547	48,662	4.5
うち支払手数料	63,611	71,265	12.0
販売費及び一般管理費合計	236,661	241,740	2.1

③ 金融費用

金融費用は、市場金利が低下したことに加え、低利な調達を積極的に活用するなどした結果、96億71百万円（前期比12.6%減）となりました。

④ 営業外損益

営業外収益は166億2百万円（前期比24.6%減）となりました。

営業外費用は6億55百万円（前期比298.0%増）となりました。

⑤ 特別損益

特別利益は、投資有価証券売却益を計上したことなどにより、88億30百万円（前期比34.2%減）となりました。

特別損失は、共同基幹システムへの移行に係る一時費用を計上したことなどにより、132億40百万円（前期比209.4%増）となりました。

以上の結果、親会社株主に帰属する当期純利益は383億29百万円（前期比9.3%減）となりました。

(3) 割賦売掛金の状況及び債権リスクの状況

以下の分析におきましては、連結財務諸表の報告数値に基づいた情報（以下「報告ベース」という）に加え、クレジットカード債権の流動化取引が行なわれている場合には、流動化取引が行われていないと仮定した場合の情報（以下「管理ベース」という）も記載しております。なお、文中で特に断りが無い限り、当該情報は報告ベースの情報であります。

これは、事業運営に際しては管理ベースの情報も考慮する必要があり、特に事業の動向を把握する際、取扱高に見合った収益の動向を認識するため、流動化された債権と流動化されていない債権を一括して捉えることが不可欠であると考えているからであります。

表4は、割賦売掛金残高の内訳であります。一部の項目につき報告ベースと管理ベースとで差異が生じている場合には、カッコ書きによって管理ベースの数値を表示しております。当連結会計年度末の割賦売掛金残高は、報告ベースでは1兆9,275億44百万円（前期比9.0%増）、管理ベースでも同額の1兆9,275億44百万円（前期比7.8%増）となりました。

なお、会計方針の変更に伴い、前連結会計年度末及び当連結会計年度末の無担保の買取債権につきましては、割賦売掛金から買取債権に表示変更しております。

表4 割賦売掛金残高の内訳（報告ベース。ただし、カッコ内の数値は管理ベース。）

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)	伸び率 (%)
	金額（百万円）	金額（百万円）	
カードショッピング	1,038,929	1,028,581	△1.0
	(1,058,929)	(1,028,581)	(△2.9)
うちリボルビング払い債権	380,822	414,225	8.8
カードキャッシング	231,469	231,776	0.1
証書ローン	12,915	10,375	△19.7
プロセッシング・他社カード代行	90,885	100,932	11.1
クレジットサービス関連	1,006	959	△4.7
クレジットサービス事業計	1,375,206	1,372,624	△0.2
	(1,395,206)	(1,372,624)	(△1.6)
リース事業計	58,963	66,820	13.3
信用保証	1,550	1,557	0.5
ファイナンス関連	332,393	486,485	46.4
ファイナンス事業計	333,943	488,043	46.1
不動産関連事業債権	63	56	△11.3
割賦売掛金残高	1,768,176	1,927,544	9.0
	(1,788,176)	(1,927,544)	(7.8)

表5は、営業債権に対する延滞及び引当状況を記載したものです。

管理ベースの割賦売掛金残高、買取債権及びリース投資資産残高に偶発債務を加算した残高（以下「営業債権」という）のうち、3ヶ月以上延滞債権残高は563億2百万円（前期比11.9%増）となりました。期末の貸倒引当金残高（流動資産）は、505億70百万円（前期比6.9%増）となりました。これらの結果、3ヶ月以上延滞債権残高に対する充足率は前期末の126.8%から117.8%に下降いたしました。

なお、会計方針の変更に伴い、前連結会計年度末及び当連結会計年度末の買取債権を営業債権残高に含めております。

表5 営業債権に対する延滞及び引当状況

		前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)	伸び率 (%)
		金額（百万円）	金額（百万円）	
営業債権残高	①	2,365,047	2,519,919	6.5
3ヶ月以上延滞債権残高	②	50,302	56,302	11.9
②のうち担保相当額	③	13,005	13,372	2.8
貸倒引当金残高（流動資産）	④	47,289	50,570	6.9
3ヶ月以上延滞比率（＝②÷①）		2.1%	2.2%	—
3ヶ月以上延滞債権に対する充足率 （＝④÷（②－③））		126.8%	117.8%	—
（参考）担保相当額控除後3ヶ月 以上延滞比率（＝（②－③）÷①）		1.6%	1.7%	—

表6は、当社グループの貸倒引当金の動態を記載したものです。

表6 貸倒引当金の動態

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	伸び率 (%)
	金額（百万円）	金額（百万円）	
期首貸倒引当金残高	48,363	50,266	3.9
増加	25,980	28,593	10.1
減少	24,077	25,366	5.4
期末貸倒引当金残高	50,266	53,494	6.4
（参考）貸倒損失	—	19	—

(4) 資本の財源および資金の流動性

① 調達政策

当社グループでは資金調達において安定性とコストを重視し、調達手法の多様化を図っております。主な調達方法では、銀行、系統金融機関、生命保険会社、損害保険会社との相対取引のほか、シンジケートローンやコミットメントラインの設定といった間接調達、また普通社債やコマーシャル・ペーパー(CP)の発行等の直接調達に取り組んでおります。平成30年3月31日現在の連結有利子負債(リース債務17億円を含む)は1兆9,572億円であり、借入金61.6%、社債17.4%、CP19.9%、営業債権の流動化等1.1%から構成されております。

間接調達については既存取引先とのリレーションを図る一方で、長期の安定的な取引が望める金融機関を対象に、新たな取引先を開拓し調達先の分散化を図るなど、リファイナンスリスクの軽減及びコスト削減に努めております。また、直接調達については普通社債やCP以外に、当社の信用状況に左右されない債権の流動化など資金調達手法の多様化により、流動性リスクの軽減やコスト削減を図っております。

当社では資本市場から円滑な資金調達を行うため、発行する債券について(株)格付投資情報センター(R&I)から国内無担保社債に「A+」、国内CPに「a-1」の格付けを取得しております。

② 流動性の確保

当社グループの保有する資産のうち65.6%がクレジットサービス事業を中心とした割賦売掛金であり、その回転率も年間平均4回を上回り、高い流動性を維持しております。

③ キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度におけるキャッシュ・フローの状況につきましては、「第一部 企業情報 第2 事業の状況 3 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析 (2) キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度中において、当社並びに連結子会社が実施いたしました設備投資並びに設備の除却及び売却のうち、主なものは以下のとおりであります。

① 主要な設備投資

クレジットサービス事業

(株)クレディセゾン)

5,397百万円 コンピュータシステム関連等
139,913百万円 共同基幹システム関連

(株)キュービタス)

1,373百万円 コンピュータシステム関連等
30,771百万円 共同基幹システム関連

(注) 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

② 主要な設備の除却及び売却

主要な設備の除却又は売却はありません。

2【主要な設備の状況】

当社並びに当社の連結子会社の各事業所における主要な設備、投下資本並びに従業員の配置状況は次のとおりであります。

(1) 提出会社（㈱クレディセゾン）

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の種類別の帳簿価額（百万円）						従業員数 (人)
		土地		建物	その他	ソフト ウェア	合計	
		金額	面積（㎡）					
本社他 (東京都豊島 区他)	クレジット サービス事業 リース事業 ファイナンス事 業 不動産関連事業	94	1,238,207	420	1,172	142,838	144,526	1,675
東京支社 (東京都文京 区) 他東日本地域 7 支社等 (注 5)	クレジット サービス事業 リース事業	3,156 [3,156]	4,715 [4,715]	2,928 [2,808]	175 [88]	54 [46]	6,314 [6,099]	947
関西支社 (大阪市中央 区) 他西日本地域 4 支社等 (注 6)	クレジット サービス事業 リース事業	3,194 [3,194]	1,470 [1,470]	1,924 [1,887]	54 [9]	2 [0]	5,176 [5,091]	675

(注) 1 上記中「内書」の資産は、㈱キュービタスに賃貸しております。

2 帳簿価額のうち「その他」の欄は器具備品等であります。

3 上記のほか、賃借（リース）によるATM機他があります。

4 従業員数は就業人員であります。

5 内訳は、北海道（札幌市中央区）、東北（仙台市青葉区）、北関東（さいたま市大宮区）、東関東（千葉市美浜区）、神奈川（横浜市西区）、債権管理部（東京都文京区）、信用管理部（東京都豊島区）であります。

6 内訳は、東海（名古屋市中村区）、中四国（広島市中区）、九州（福岡市博多区）、コンサルティングセンター（大阪市中央区）であります。

7 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 子会社

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の種類別の帳簿価額（百万円）							従業員数 (人)
			土地		借地権	建物	その他	ソフト ウェア	合計	
			金額	面積 (㎡)						
(株)コンチェ ルト	コンサートホ ール荒川店 (東京都荒川 区) 他24店舗	エンタテイ ンメント 事業	1, 047	12, 764	617	1, 923	1, 567	－	5, 156	241
	渋谷プライム (東京都渋谷 区) 他賃貸物件 12件	不動産関連 事業	15, 205	10, 869	338	6, 974	18	－	22, 536	20
(株)キュービ タス	本社他 (東京都新宿 区他 2 拠点)	クレジット サービス 事業	－	－	－	14	584	31, 724	32, 323	1, 375

(注) 1 帳簿価額のうち「その他」の欄は器具備品等であります。

2 上記のほか、賃借（リース）によるソフトウェア他があります。

3 従業員数は就業人員であります。

4 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

3【設備の新設、除却等の計画】

平成30年3月31日現在計画中の主なものは次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容 (セグメント)	投資予定額		資金調達方法	着手年月	完了予定年月
			総額 (百万円)	既支払額 (百万円)			
(株)クレディセゾン	本社他 (東京都豊島区)	共同基幹システム関連 (クレジットサービス事業)	(注) 2	1,494	内部留保及び借入金	平成18年4月	(注) 2
		コンピュータシステム関連 (クレジットサービス事業)	6,332	281	内部留保及び借入金	平成26年9月	平成31年3月
(株)キュービタス	本社他 (東京都新宿区)	共同基幹システム関連 (クレジットサービス事業)	(注) 2	30,695	内部留保及び借入金	平成18年4月	(注) 2
		コンピュータシステム関連 (クレジットサービス事業)	2,023	－	内部留保及び借入金	平成30年4月	平成31年3月

(注) 1 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

2 平成30年度の共同基幹システム関連の投資額は約500億円を見込んでおり、完了予定については平成30年度下期以降を予定しております。

(2) 重要な設備の除売却

経常的な設備の更新のための除却等を除き、重要な設備の除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	300,000,000
計	300,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成30年6月20日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	185,444,772	185,444,772	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は100株であります。
計	185,444,772	185,444,772	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成21年8月1日～ (注)	3,560	185,444	—	75,929	3,164	82,497

(注) 当社の連結子会社である㈱アトリウムとの株式交換に伴う新株発行による増加であります。

交換比率 ㈱アトリウムの普通株式1株につき、当社の普通株式0.13株

(5) 【所有者別状況】

平成30年 3 月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）								単元未満 株式の状況 （株）
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 （人）	－	62	37	140	505	7	9, 510	10, 261	－
所有株式数 （単元）	－	741, 563	47, 929	95, 626	671, 207	49	296, 708	1, 853, 082	136, 572
所有株式数の 割合（％）	－	40. 02	2. 59	5. 16	36. 22	0. 00	16. 01	100. 00	－

- (注) 1 自己株式は22,034,101株であり、「個人その他」の欄に220,341単元、「単元未満株式の状況」の欄に1株含めて記載しております。なお、平成30年3月31日現在の実質的な所有株式数は22,033,901株であります。
- 2 上記「その他の法人」の欄には7単元、「単元未満株式の状況」の欄に84株の証券保管振替機構名義の株式が含まれております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年 3 月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の 総数に対する 所有株式数の 割合 (%)
日本マスタートラスト信託銀行(株) (信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	25,984	15.90
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	13,732	8.40
BNYMSANV AS AGENT/CLIENTS LUX UCITS NON TREATY 1	VERTIGO BUILDING - POLARIS 2-4 RUE EUGENE RUPPERT L-2453 LUXEMBOURG GRAND DUCHY OF LUXEMBOURG	7,643	4.68
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	6,275	3.84
HSBC BANK PLC A/C CLIENTS 1	8 CANADA SQUARE, LONDON E14 5HQ	4,818	2.95
JP MORGAN CHASE BANK 385632	25 BANK STREET, CANARY WHARF, LONDON, E14 5JP, UNITED KINGDOM	3,753	2.30
資産管理サービス信託銀行(株) (証券投資信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番12号	3,637	2.23
資産管理サービス信託銀行(株) (投信受入担保口)	東京都中央区晴海1丁目8番12号	3,370	2.06
(株)みずほ銀行	東京都千代田区大手町1丁目5番5号	3,000	1.84
日本トラスティ・サービス信託銀行(株) (信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	2,860	1.75
計	—	75,075	45.94

(注) 当社は、自己株式を22,033,901株保有しておりますが、上記大株主からは除外しております。

(注) 次の法人から、大量保有報告書（変更報告書）の提出があり、次のとおり株式を所有している旨報告を受けておりますが、平成30年3月31日現在における当該法人名義の実質所有株式数の確認ができませんので、上記「大株主の状況」では考慮しておりません。

氏名又は名称	住所	報告義務発生日	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
※ブラックロック・ジャパン株式会社 他6社	東京都千代田区丸の内1丁目8番3号	平成29年5月31日	9,415	5.08
※イーストスプリング・インベストメンツ（シンガポール）リミテッド 他1社	シンガポール共和国マリーナ・ブルバード10、#32-10、マリーナ・ベイ・フィナンシャルセンター・タワー2	平成29年9月15日	15,814	8.53
※ティー・ロウ・プライス・アソシエイツ、インク 他1社	米国メリーランド州、20202、ボルチモア、イースト・プラット・ストリート100	平成29年12月15日	8,991	4.85
※日興アセットマネジメント株式会社 他2社	東京都港区赤坂9丁目7番1号	平成30年3月15日	12,515	6.75
野村アセットマネジメント株式会社	東京都中央区日本橋1丁目12番1号	平成30年3月15日	13,162	7.10

(注) 上表中の「氏名又は名称」覧の※につきましては共同保有であるため、大量保有報告書（変更報告書）上の所有株式数上位者の名称及び住所を記載しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 22,033,900	—	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式
完全議決権株式 (その他)	普通株式 163,274,300	1,632,743	同上
単元未満株式	普通株式 136,572	—	同上
発行済株式総数	185,444,772	—	—
総株主の議決権	—	1,632,743	—

(注) 1 「完全議決権株式 (その他)」欄の普通株式には700株（議決権7個）、「単元未満株式」欄の普通株式には84株の証券保管振替機構名義の株式が含まれております。

2 「単元未満株式」欄には、当社所有株式が次のとおり含まれております。
自己保有株式 1株

②【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合 (%)
(自己保有株式) ㈱クレディセゾン	東京都豊島区東池袋 3丁目1番1号	22,033,900	—	22,033,900	11.9
合計		22,033,900	—	22,033,900	11.9

(注) このほか株主名簿上は当社名義となっておりますが、実質的に所有していない株式が200株（議決権2個）あります。なお、当該株式数は上記「① 発行済株式」の「完全議決権株式（その他）」欄に含めております。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	758	1,573,867
当期間における取得自己株式 (注)	44	78,795

(注) 当期間における取得自己株式数には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (一)	—	—	—	—
保有自己株式数	22,033,901	—	22,033,945	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社では企業体質の強化と継続的な事業拡大に向けた取り組みが、株主価値の増大のために重要であると考えております。利益還元につきましては、これらを実現する内部留保金の充実を図る一方、株主の皆様へ適正かつ安定的、継続的な配当を行っていきたいと考えております。

当社の剰余金の配当は、期末配当の年1回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、期末配当は株主総会であります。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、以上を踏まえ、1株当たり35円としております。

また、内部留保資金につきましては、ローコストオペレーションの実現と継続的な事業拡大を推進するために効率的に投資してまいりたいと考えております。

なお、当社は毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めており、この決定機関は取締役会であります。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
平成30年6月20日 定時株主総会決議	5,719	35

4【株価の推移】

(1)【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第64期	第65期	第66期	第67期	第68期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高（円）	2,996	2,460	2,836	2,256	2,425
最低（円）	1,955	1,763	1,766	1,596	1,647

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2)【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	平成29年11月	平成29年12月	平成30年1月	平成30年2月	平成30年3月
最高（円）	2,425	2,327	2,192	2,230	2,014	1,860
最低（円）	2,263	2,031	2,018	1,982	1,718	1,647

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5【役員の状況】

男性17名 女性2名 (役員のうち女性の比率10.5%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
代表取締役 会長	—	前 川 輝 之	昭和17年1月24日生	昭和39年3月 平成3年4月 平成3年6月 平成10年4月 平成13年2月 平成14年6月 平成17年3月 平成17年4月 平成18年3月 平成19年3月 平成20年3月 平成21年3月 平成22年3月 平成23年3月 平成24年5月 平成26年6月 平成27年3月 平成28年2月 平成28年3月 平成28年6月 平成30年3月	当社入社 当社営業一部長(兼) 営業推進部長 当社取締役 当社常務取締役 当社専務取締役 当社代表取締役専務 当社監査室・みずほUC提携推進室担当 当社代表取締役副社長 当社社長補佐(兼) 提携本部長(兼) 広報室・監査室担当 当社経営本部長(兼) 広報室・監査室 担当 当社広報室・経営管理部・総務部管掌 当社広報室・企画部・財務部・経営管 理部・総務部管掌 当社広報室・財務部・総務部・営業推 進事業部管掌 当社広報室・財務経理部・総務部・人 事部・システム企画部管掌 当社広報室・総務部・人事部・システ ム企画部管掌 当社広報室・総務部・システム企画部 管掌 当社広報室・監査室・総務部管掌 当社広報室・監査室・財務経理部・リ スク統括部・総務部管掌 当社代表取締役会長(現任) 当社監査室・財務部・経理部・営業推 進事業部管掌 当社監査室・営業推進事業部管掌 当社監査室管掌(現任)	(注) 3	430
代表取締役 社長	—	林 野 宏	昭和17年8月5日生	昭和40年4月 昭和57年3月 昭和58年4月 昭和60年4月 平成7年6月 平成11年6月 平成12年6月 平成15年6月 平成15年6月 平成21年3月 平成27年3月 平成30年3月	株式会社西武百貨店(現㈱そごう・西 武)入社 当社入社 クレジット本部営業企画部 長 当社取締役 当社常務取締役 当社専務取締役 当社代表取締役専務 当社代表取締役社長(現任) 株式会社りそな銀行取締役 株式会社りそなホールディングス取締 役 当社監査室・カード事業部管掌 当社カード事業部管掌 当社カード事業部・戦略企画部管掌 (現任)	(注) 3	767

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
代表取締役 副社長	—	高 橋 直 樹	昭和25年 8 月 5 日生	昭和49年 4 月 平成15年 4 月 平成16年 4 月 平成17年 4 月 平成17年 6 月 平成19年 3 月 平成20年 3 月 平成21年 3 月 平成22年 3 月 平成23年 3 月 平成24年 3 月 平成26年 3 月 平成28年 3 月 平成30年 3 月	株式会社富士銀行（現㈱みずほフィナンシャルグループ）入行 株式会社みずほコーポレート銀行（現㈱みずほ銀行）執行役員大阪営業第二部長 同行常務執行役員営業担当役員 当社入社 顧問 当社常務取締役 当社戦略本部長 当社ネットビジネス部・イノベーション部管掌 当社戦略投資部・ネット事業部・ファイナンス事業部管掌 当社専務取締役 当社企画部・経営管理部・戦略投資部・総合リスク管理室・ファイナンス事業部管掌 当社代表取締役専務 当社経営企画部・戦略投資部・ネット事業部管掌 当社経営企画部・戦略投資部・クレジット事業部・ネット事業部管掌（兼）クレジット事業部長 当社経営企画部・ネット事業部・海外事業部管掌 当社代表取締役副社長（現任） 当社広報室・経営企画部・戦略人事部・ネット事業部管掌 当社広報室・経営企画部・デジタル事業部管掌（現任）	(注) 3	220
専務取締役	ファイ ナンス 事業部長	山 本 寛	昭和30年 6 月 4 日生	昭和53年 4 月 平成14年 4 月 平成14年10月 平成17年 4 月 平成18年 3 月 平成19年 4 月 平成19年 6 月 平成20年 3 月 平成23年 3 月 平成25年 3 月 平成26年 3 月 平成26年 6 月 平成27年 3 月 平成27年10月 平成28年 3 月 平成30年 3 月	株式会社第一勧業銀行（現㈱みずほフィナンシャルグループ）入行 株式会社みずほコーポレート銀行（現㈱みずほ銀行）業務推進部参事役 同行大阪営業第三部長 同行営業第十二部長 同行執行役員営業第十二部長 当社入社 顧問 当社取締役 当社ファイナンス事業部長 当社常務取締役 当社コンプライアンス部・ファイナンス事業部管掌（兼）ファイナンス事業部長 当社CS推進室・ファイナンス事業部管掌（兼）リース&レンタル営業部担当 当社CS推進室・ファイナンス事業部管掌（兼）ビジネス決済推進部・みずほ提携推進部担当 当社ファイナンス事業部管掌（兼）ビジネス決済推進部・みずほ提携推進部担当 当社ファイナンス事業部管掌（兼）ビジネス決済推進部・みずほ提携推進部・カードファイナンス部担当 当社ファイナンス事業部管掌（兼）法人営業部・ビジネス決済推進部・みずほ提携推進部・カードファイナンス部担当 当社専務取締役（現任） 当社リスク統括部・ファイナンス事業部管掌（兼）ビジネス決済推進部・カードファイナンス部担当 当社ファイナンス事業部管掌（兼）ファイナンス事業部長（兼）ビジネス決済推進部・カードファイナンス部担当（現任）	(注) 3	183

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
専務取締役	—	山 下 昌 宏	昭和33年 3 月 5 日生	昭和56年 4 月 平成15年10月 平成17年 3 月 平成21年 4 月 平成22年 6 月 平成23年 3 月 平成24年 3 月	当社入社 当社カード部長 当社営業計画部長 当社ソリューション三部長 当社取締役 当社カード事業部長 当社常務取締役 当社カード事業部長（兼）アライアンス開発部担当 当社営業推進事業部管掌（兼）アライアンス開発部・AMEX推進部担当 当社システム企画部・営業推進事業部管掌（兼）カード事業部長（兼）アライアンス開発部担当 当社専務取締役（現任） 当社システム企画部管掌（兼）カード事業部長（兼）アライアンス開発部・ペイメント営業部担当 当社戦略人事部・IT戦略部・営業推進事業部管掌（現任）	(注) 3	151
常務取締役	—	水 野 克 己	昭和44年 8 月15日生	平成 4 年 4 月 平成17年 3 月 平成19年 9 月 平成22年 3 月 平成24年10月 平成25年 3 月 平成25年 6 月 平成27年 3 月 平成28年 3 月 平成30年 3 月	当社入社 当社セゾンカード部長 当社UCカード部長 当社ソリューション二部長 当社営業企画部長（兼）商品・サービス開発グループ 部長 当社カード事業部 部長（兼）海外事業部 部長（兼）海外戦略部長 当社取締役 当社営業企画部担当（兼）海外事業部長（兼）海外戦略部長 当社海外事業部長（兼）営業企画部担当 当社常務取締役（現任） 当社海外事業部管掌（兼）営業企画部担当 当社グローバル事業部管掌（兼）戦略企画部担当（現任）	(注) 3	103
常務取締役	カード 事業部長	岡 本 龍 成	昭和42年 4 月26日生	平成 2 年 4 月 平成17年 3 月 平成19年 3 月 平成20年 3 月 平成23年 6 月 平成25年 3 月 平成26年 3 月 平成27年 3 月 平成28年 3 月 平成29年 3 月 平成30年 3 月	当社入社 当社アフィニティカード部長 当社ソリューション推進部長 当社ソリューション一部長 当社取締役 当社リテール営業一部・リテール営業二部・金融・法人営業部担当 当社コンプライアンス部管掌（兼）T&E・サービス営業部・WEB支店・カードファイナンス部・決済開発部担当 当社アフィニティ営業部・WEB支店・カードファイナンス部担当 当社CS推進室管掌（兼）アフィニティ営業 2 部・AMEX推進部・法人営業部担当 当社クレジット事業部管掌（兼）アフィニティ営業 2 部・AMEX推進部担当 当社クレジット事業部管掌（兼）クレジット事業部長（兼）アフィニティ営業 2 部・AMEX推進部担当 当社常務取締役（現任） 当社クレジット事業部管掌（兼）カード事業部長（兼）アフィニティ営業 2 部・アライアンス開発部担当（現任）	(注) 3	132

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
常務取締役	営業推進 事業部長	三 浦 義 昭	昭和41年 9 月 2 日生	平成 2 年 4 月 平成13年10月 平成18年10月 平成23年 3 月 平成25年 3 月 平成27年 3 月 平成28年 3 月 平成28年 6 月 平成29年 3 月 平成30年 3 月	当社入社 当社神奈川支店長 静銀セゾンカード株式会社代表取締役 副社長 当社ネット戦略企画部長 当社ネット事業部長（兼）ネット戦略 企画部長 当社ネット事業部長（兼）インキュベ ーション部長 当社ネット事業部長 当社取締役 当社アフィニティ営業 1 部・ネット事 業部担当 当社常務取締役（現任） 当社営業推進事業部長（兼）アフィニ ティ営業 1 部担当（現任）	(注) 3	36
取締役	—	平 瀬 和 宏	昭和40年 2 月14日生	昭和62年 4 月 平成15年 9 月 平成18年 3 月 平成20年 3 月 平成22年 6 月 平成23年 3 月 平成25年 3 月 平成28年 3 月 平成29年 3 月 平成30年 3 月	当社入社 当社リース事業部 名古屋事業所長 当社リース事業部長 当社リース&レンタル部長 当社取締役（現任） 当社T&E・サービス営業部・リース& レンタル営業部担当 当社営業推進事業部長 当社総務部・CS推進室管掌（兼）戦略 人事部担当 当社総務部・CS推進室管掌（兼）戦略 人事部・ソリューション営業部担当 リスク統括部・総務部・CS推進室管掌 （現任）	(注) 3	102
取締役	グロー バル 事業部長	松 田 昭 博	昭和35年11月 5 日生	昭和58年 4 月 平成14年10月 平成20年 4 月 平成22年 4 月 平成22年 6 月 平成23年 3 月 平成24年 3 月 平成25年 3 月 平成26年 3 月 平成28年 3 月 平成30年 3 月	株式会社富士銀行（現㈱みずほフィナ ンシャルグループ）入行 株式会社みずほコーポレート銀行（現 ㈱みずほ銀行）入行 同行富山営業部 部長 当社入社 顧問 当社取締役（現任） 当社カードファイナンス部担当 当社WEB支店・カードファイナンス部 担当 当社クレジット事業部長（兼）金融・ 法人営業部・みずほ提携推進部担当 当社海外統括部担当 当社海外事業部長 当社グローバル事業部長（現任）	(注) 3	98
取締役	—	馬 場 信 吾	昭和46年 1 月17日生	平成 9 年 4 月 平成19年 3 月 平成24年 5 月 平成27年 3 月 平成28年 6 月 平成30年 3 月	当社入社 当社企画部長 当社財務経理部長 当社経営企画部長 当社取締役（現任） 当社財務部・経理部管掌（兼）経営企 画部担当 当社財務部・経理部管掌（兼）経営企 画部・ペイメント営業部担当（現任）	(注) 3	32

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
取締役	デジタル 事業部長	磯 部 泰 之	昭和44年 8 月 7 日生	平成 4 年 4 月 平成21年 3 月 平成22年 3 月 平成27年 3 月 平成29年 3 月 平成30年 3 月 平成30年 6 月	当社入社 当社企画部長 当社マーケティング部長 当社データマーケティング部長 当社ネット事業部長（兼）デジタルマ ーケティング部長 当社デジタル事業部長（兼）デジタル マーケティング部長（現任） 当社取締役（現任）	(注) 3	5
取締役	—	足 利 駿 二	昭和46年 5 月24日生	平成 6 年 4 月 平成18年 1 月 平成20年10月 平成22年 3 月 平成23年 3 月 平成25年 3 月 平成30年 6 月	ユーシーカード株式会社入社 当社転籍 当社LABIカード部長 当社UC・LABIカード部長 当社AMEX戦略グループ部長 当社AMEX推進部長 当社取締役（現任） 当社AMEX推進部・ソリューション営業 部担当（現任）	(注) 3	10
取締役	—	林 郁	昭和34年12月26日生	平成 7 年 8 月 平成14年 7 月 平成15年 6 月 平成16年11月 平成24年 6 月 平成25年10月 平成25年10月 平成27年10月 平成28年 6 月 平成28年 7 月 平成28年 7 月 平成28年 9 月 平成28年 9 月 平成29年 5 月	株式会社デジタルガレージ代表取締役 株式会社カカコム代表取締役会長 同社取締役会長（現任） 株式会社デジタルガレージ代表取締役 社長（兼）グループCEO マネックスグループ株式会社取締役 ペリトランス株式会社取締役会長 （現任） 株式会社イーコンテクスト取締役会長 （現任） econtext Asia Limited Director President and Chairman（現任） 当社取締役（現任） 株式会社DG Daiwa Ventures取締役 （現任） Digital Garage US, Inc. Director Chairman and CEO（現任） 株式会社BI.Garage代表取締役会長 （兼）CEO（現任） 株式会社デジタルガレージ代表取締役 （兼）社長執行役員グループCEO（現 任） 株式会社DGインキュベーション代表取 締役会長（兼）社長（現任）	(注) 3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
取締役	—	富 樫 直 記	昭和35年10月24日生	昭和59年4月 平成11年1月 平成19年4月 平成22年6月 平成23年3月 平成26年6月 平成29年4月 平成29年6月	日本銀行入行 フューチャーフィナンシャルストラテ ジー株式会社代表取締役社長 経済同友会幹事（現任） オリバー・ワイマングループ株式会社 日本代表パートナー 日興アセットマネジメント株式会社 取締役（現任） 株式会社ナガホリ 取締役（現任） オリバー・ワイマングループ株式会社 代表取締役日本代表パートナー（現 任） 当社取締役（現任）	(注) 3	—
取締役	—	大 槻 奈 那 (戸籍上の氏名 : 松川 奈那)	昭和39年9月17日生	昭和63年4月 平成12年1月 平成17年12月 平成23年6月 平成27年9月 平成28年1月 平成29年6月 平成30年4月 平成30年4月	三井信託銀行株式会社（現三井住友信 託銀行㈱）入行 スタンダード&プアーズ・レーティン グ・ジャパン株式会社日韓金融機関格 付チームヘッド UBS証券株式会社調査部マネジング・ ディレクター メリルリンチ日本証券株式会社マネジ ング・ディレクター 調査部 金融・内 需関連セクターヘッド 名古屋商科大学経済学部教授 マネックス証券株式会社執行役員（現 任） 当社取締役（現任） 名古屋商科大学大学院教授（現任） 二松學舎大学客員教授（現任）	(注) 3	—

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
常勤監査役	—	村 上 喜 堂	昭和23年2月12日生	昭和47年4月 昭和52年7月 平成5年7月 平成10年7月 平成12年6月 平成15年6月 平成17年10月 平成22年6月 平成23年6月	大蔵省（現財務省）入省 米子税務署長 東京国税局総務部長 国税庁調査査察部長 同庁課税部長 同庁次長 東日本高速道路株式会社専務取締役 同社取締役（兼）専務執行役員 当社常勤監査役（現任）	(注) 4	—
監査役	—	笠 原 智 恵 (戸籍上の氏名 ：福田 智恵)	昭和43年9月15日生	平成12年4月 平成20年1月 平成22年1月 平成27年6月	弁護士（第一東京弁護士会）登録（現任） 隼あすか法律事務所パートナー 渥美総合法律事務所・外国法共同事業 （現渥美坂井法律事務所・外国法共同 事業）パートナー（現任） 当社監査役（現任）	(注) 4	—
監査役	—	稲 田 和 房	昭和21年2月13日生	昭和45年3月 平成13年2月 平成13年6月 平成16年2月 平成17年3月 平成19年3月 平成22年2月 平成30年6月	当社入社 当社人事部長 当社取締役 当社常務取締役 当社常務取締役カード本部長 当社常務取締役管理本部長 株式会社セゾンファンデックス代表取 締役社長 当社監査役（現任）	(注) 4	95
計							2,364

- (注) 1 取締役 林 郁、富樫 直記、大槻 奈那の3名は、社外取締役であります。
- 2 監査役 村上 喜堂、笠原 智恵の2名は、いずれも社外監査役であります。
- 3 取締役の任期は、平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 監査役の任期は、平成31年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 5 当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、補欠監査役1名を選任しております。
補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (百株)
横 倉 仁	昭和44年5月30日生	平成4年4月 平成7年3月 平成14年1月 平成19年12月 平成26年4月 平成29年7月	監査法人朝日新和会計社（現有限責任 あずさ監査法人）入所 公認会計士登録 横倉会計事務所開設 弁護士登録 ビンガム・坂井・三村・相澤法律事務 所（現アンダーソン・毛利・友常法律 事務所）入所 早稲田リーガルコモンズ法律事務所パ ートナー（現任） みのり監査法人監事（現任）	(注)	—

(注) 補欠監査役の任期は、退任する監査役の任期の満了する時までとなります。

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

i 提出会社の企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

革新的なサービスを創造し、継続的に企業価値を向上させることによって、株主の皆様から理解と賛同を得るという経営の基本方針を実現するためには、経営における透明性の向上と経営目標の達成に向けた経営監視機能の強化が極めて重要であると認識し、コーポレート・ガバナンスの充実にに向けた様々な取り組みを実施いたしております。

② コーポレート・ガバナンス体制を採用する理由

現在当社では、監査役・監査役会制度を採用しております。また、株主・投資家等からの信頼を確保していくために、社外取締役・社外監査役の選任によるコーポレート・ガバナンスの充実に努めております。取締役会や重要会議体等において、社外取締役から経営における意思決定の妥当性・適正性を確保するための助言・提言を受けることにより、業務に精通した取締役が経営効率の維持向上を図ることができます。また、監査役会は内部監査・内部統制担当役員等と連携を図ることで、経営に対する監督機能を強化しております。

取締役会は、取締役16名（うち社外取締役3名、独立役員に指定されている人数2名）（※）で構成され、経営に関する重要事項についての業務執行を決定するとともに、取締役の職務の執行を監督しております。なお、経営環境の変化に対応した機動的な経営体制を構築するとともに、経営に対する株主の信任を得るため、取締役の任期は1年としております。

監査役会は、監査役3名（うち社外監査役2名、独立役員に指定されている人数2名）（※）で構成されており、監査方針、その他の監査役の職務の執行に関する事項の決定及び監査報告の作成などを行っております。

※平成30年6月20日現在であります。

③ 内部統制システムの整備の状況

1 当社の取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

会社の業務執行が全体として適正かつ健全に行われるため、取締役会は企業統治を一層強化する観点から、実効性ある内部統制システムの構築と会社による全体としての法令・定款遵守体制の確立に努める。また、監査役会はこの内部統制システムの有効性と機能を監査し、課題の早期発見と精度の向上に努めることとする。

2 当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- (1) 取締役の職務執行に係る情報（取締役会議事録、稟議書、決裁書等）は文書で記録し、「情報管理規程」その他の社内規程に基づき保存・管理するものとする。
- (2) 各取締役及び各監査役が前項の情報の閲覧を要求した場合には、速やかに当該要求に対応できる体制を整える。

3 当社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) リスク管理については、「リスク管理規程」及び「損失の危険の管理に関する規程」を定めるとともに、リスク管理委員会及びリスク統括部を中心として、リスクを総合的に管理し、リスク顕在化の抑止及びリスク顕在化による当社への影響の極小化に努める。また、対処すべきリスクが顕在化又はそのおそれがあることが明確になった場合は、「危機管理規程」に基づき、迅速な対応及び会社機能の早期回復に努める。
- (2) 前項のために、「リスク管理規程」、「損失の危険の管理に関する規程」及び「危機管理規程」の関係者に対し定期的な社内教育・訓練を行う。取締役会は定期的にこれらを点検し、是正・改善を指示することにより、リスク管理体制の維持に努める。
- (3) 大規模災害等の緊急事態発生に備え、重要業務の継続及び事業中断リスクを可能な限り低減するための対応策を講じ、有事における経営基盤の安定性確保に努める。

4 当社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- (1) 取締役の業務執行が適切に行われるよう、取締役会は「取締役会規程」に基づき運営する。
- (2) 取締役は、管掌又は担当する部門の業務執行が効率的に行われるよう、「組織・業務分掌規程」、「職務権限規程」に基づき適切に管理、監督する。

5 当社の使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 法令・定款及び「コンプライアンス規程」等の社内規程を遵守した職務執行のため、コンプライアンス委員会及びリスク統括部を中心として、定期的な社内教育を通じて社員へ諸規程及び遵守体制の周知徹底を図る。
- (2) 法令・定款及び社内規程等に違反した事例を発見した場合の通報窓口は、「コンプライアンス相談窓口」とする。コンプライアンス委員会は、通報案件について遅滞なく取締役会及び監査役会に報告し、当該違反の早期解決を図るものとする。
- (3) 社会の秩序や安全を脅かす反社会的勢力からの被害を防止するため、反社会的勢力に屈せず、正義をもって臨むことを当社の行動基準に明記し、すべての社員がこの行動基準を遵守するよう周知徹底を図る。また、「特殊暴力防止対策連合会」への加盟や警察等関連機関との連携により、反社会的勢力による不当要求等には総務部を中心として毅然と対応する。

6 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

(1) 子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の会社への報告に関する体制

当社が定める「関係会社規程」及び子会社と締結する「グループ経営に関する取り決め書」に基づき、経営企画部 グループ戦略室を中心として、子会社の取締役会への出席や子会社の取締役会議事録等の関係資料やその他経営上の重要事項について遅滞なく報告を受ける。

(2) 子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

子会社のリスク管理については、「損失の危険の管理に関する規程」、「リスク管理規程」に基づき、子会社に係る損失回避・適正化のための環境整備を経営企画部 グループ戦略室が担うとともに、リスク統括部が子会社に対して、当社のリスク管理態勢との連携を図り、リスク顕在化の抑止及びリスク顕在化による当社への影響の極小化に努める。

(3) 子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

子会社の自主独立運営による事業の発展を尊重しつつ、子会社の経営上の重要事項については「関係会社規程」、「グループ経営に関する取り決め書」で事前協議事項を定め、「職務権限規程」等に基づき必要に応じて意思決定を行う。また、経営企画部 グループ戦略室が子会社の業務執行状況の監督・情報共有を行い、子会社における業務執行の効率性を確保することに努める。

(4) 子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社監査室が子会社の監査部門と連携し、必要に応じて監査を実施し、業務執行の適正性についてモニタリングを行う。また、法令・定款及び社内規程に違反した事例を発見した場合の通報窓口として、「グループ内ホットライン」を設置し、当該違反の早期解決に役立て、子会社の業務の適正性を確保することに努める。

7 当社の監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項

- (1) 監査役の職務を補助すべき使用人（以下「補助使用人」という）は、監査役の職務を補助する。
- (2) 前項の補助使用人の具体的な人員、職務内容については、監査役会との協議により決定する。

8 前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項及び当該使用人に対する監査役の指示の実効性の確保に関する事項

- (1) 補助使用人の人事（異動・考課等）は、監査役会の同意を必要とする。
- (2) 前項の補助使用人は、内部監査業務以外の当社の業務執行に係る職務を兼務しない。また、当社は監査役の補助使用人に対する指揮命令権を不当に制限しない。

9 当社の監査役への報告に関する体制

(1) 当社の取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制

イ 取締役及び社員は、職務執行に関して重大な法令・定款違反もしくは不正行為の事実、又は会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実を知ったときは、遅滞なく監査役会に報告しなければならない。

ロ 取締役及び社員は、事業、組織に重大な影響を及ぼす決定、事件・事故、業務トラブル等の発生事実、及び社内監査の実施結果を職制を通じて遅滞なく監査役会に報告する。

(2) 子会社の取締役、監査役及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社の監査役に報告するための体制

イ 経営企画部 グループ戦略室は、子会社から報告を受けた取締役会議事録等の関係資料やその他経営上の重要事項について、監査役へ報告を行う。また、子会社の役員及び社員は、必要に応じて当社の監査役に報告することができる。

ロ 子会社の役員及び社員は、職務執行に関して重大な法令・定款違反もしくは不正行為の事実、又は会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事実を知ったときは「グループ内ホットライン」又は経営企画部 グループ戦略室に報告することができる。リスク統括部及び経営企画部 グループ戦略室は、提供された情報をコンプライアンス委員会等で的確に処理するとともに、監査役へ報告を行う。

10 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

当社は、前号の監査役へ報告した者に対し、当該報告をしたことを理由に不利な取扱いを行うことを禁止する。また、前号の通報窓口への情報提供者が一切の不利益を被らないことを「コンプライアンス規程」で定めるとともに、「私たちのコンプライアンス」を通じて社員に周知徹底する。

11 当社の監査役の職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項及びその他当社の監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- (1) 監査役は、重要な意思決定及び業務の執行状況を把握するため重要な会議体に出席するとともに、必要に応じて調査・報告を求めることができる。
- (2) 監査役会は、必要に応じて代表取締役社長と意見交換を行うほか、会計監査人と定期的に意見交換会を開催する。
- (3) 監査役会との情報共有を密にするために、経営企画部、リスク統括部及び監査室との連携を図る。
- (4) 監査役がその職務の執行について、当社に対し費用の前払い等の請求をした場合には、予算管理部門である経営企画部を中心に費用の妥当性を審議・検証の上、速やかに当該費用を処理する。

④ 内部監査、監査役監査及び会計監査人監査の状況

当社は、内部監査部門である監査室（※）がグループ各社を含め、内部統制、リスク管理、コンプライアンス等の監査を実施し、評価及び提言を行っております。

各監査役は、監査役会が定めた監査方針及び監査計画等に従い、取締役会をはじめとする重要な会議体への出席、取締役等からの職務の執行状況の報告の聴取や、重要な決議書類等の閲覧、業務及び財産の状況の調査等により、厳正な監査を行っております。

会計監査人との連携状況につきましては、監査役は、会計監査人から監査方針、監査結果について報告を受ける等、適宜意見交換を行い連携の強化に努めております。

監査室との連携状況につきましては、監査役は、監査室が実施する内部監査の監査方針及び結果について、その都度報告を受けるとともに、必要に応じて、監査役事務局を兼務する監査室に指示し調査を行わせております。

また監査役は、内部統制システムの整備状況について、内部統制統括部門である経営企画部より随時報告を求め、監査の実効性を高めるよう努めております。

監査室は、内部監査方針及び監査結果の報告を行うなど、会計監査人と常時連携を図っております。

財務報告に係る内部統制の整備・運用状況につきましては、内部監査結果を踏まえ、会計監査人とリスク統括部が、適宜意見交換や調査、報告を行うことにより連携を図っております。

※平成30年6月20日現在において、監査室は20名で構成されております。

会計監査人の状況は以下のとおりであります。

業務を執行した公認会計士の氏名、所属する監査法人名及び継続監査年数

業務を執行した公認会計士の氏名		所属する監査法人名
指定有限責任社員 業務執行社員	梅 津 知 充	有限責任監査法人トーマツ
	吉田 波也人	
	箕輪 恵美子	

（注） 継続監査年数については、全員7年以内のため記載を省略しております。

監査業務に係る補助者の構成

公認会計士	10名	会計士試験合格者等	7名	その他	22名
-------	-----	-----------	----	-----	-----

⑤ 会社と会社の社外取締役及び社外監査役の人的関係等

当社の社外取締役は3名、社外監査役は2名であります。

一般株主と利益相反の生じるおそれのない独立役員2名（※）を含む3名の社外取締役から経営における意思決定の妥当性・適正性を確保するための助言・提言を受けることにより、業務に精通した取締役が経営効率の維持向上を図ることができます。また独立役員である2名（※）の社外監査役を選任し、経営に対する監督機能を強化しております。

※ 独立役員の資格を充たす社外役員4名を独立役員に指定しております。

<社外役員の属性情報>

社外取締役林郁氏は、インターネットサービス会社である㈱デジタルガレージの代表取締役を務めるなど同社グループのCEOであり、当社は同社とインキュベーション事業及びマーケティング事業に関する事業連携を目指した業務提携に関する基本合意を締結しております。当社は同社グループとの間で取引関係がありますが、その年間取引額は双方の連結取扱高に対して1%未満であります。また、同氏は㈱カカコム取締役会長、econtext Asia LimitedのDirector President and Chairman等を兼務しております。なお同氏は、㈱デジタルガレージの創業経営者として、IT、マーケティング、FinTechに関する豊富な経験と幅広い見識を有しており、当社経営に対して客観的・中立的立場から有益な助言をいただけるものと判断し、社外取締役に選任しております。

社外取締役富樫直記氏は、オリバー・ワイマングループ㈱の代表取締役日本代表パートナーを務めており、当社は同社との間でコンサルティング契約に係る取引関係がありますが、その年間取引額は当社の連結取扱高に対して0.01%未満であり、また同社の売上高に対して2%未満であります。同氏は、経営コンサルタントとして、国内・海外の幅広い金融分野において戦略コンサルティングを手がけるなど、企業経営に関する豊富な経験と幅広い見識を有しており、当社経営に対して客観的・中立的立場から有益な助言をいただけるものと判断し、社外取締役として選任しております。なお同氏は、東京証券取引所の定めに基づく独立役員の要件を満たしており、独立役員として同取引所に届け出ております。

社外取締役大槻奈那氏は、マネックス証券㈱の執行役員を務めております。当社と同社の間には提携カード発行業務に関する取引関係があり、また、同社の親会社であるマネックスグループ㈱は当社が出資するマネックス・セゾン・バンガード投資顧問㈱の共同出資者であります。その年間取引額は双方の連結取扱高に対して0.1%未満であり、同氏の独立性は十分に確保されていると判断しております。同氏は、国内系・外資系の金融機関で長年にわたりアナリストとして、国内外における金融市場等の分析に関する豊富な経験と幅広い見識を有しており、当社経営に対して客観的・中立的立場から有益な助言をいただけるものと判断し、社外取締役として選任しております。なお同氏は、東京証券取引所の定めに基づく独立役員の要件を満たしており、独立役員として同取引所に届け出ております。

社外監査役村上喜堂氏は、長年にわたり財務省及び国税庁に在籍し、一般株主と利益相反の生じる立場ではなく、また当社経営者や特定の当社利害関係者の利益に偏ることなく、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しており、会計財務に関する豊富な経験・知識を当社監査体制に活かしていただけるものと判断し、社外監査役に選任しております。なお同氏は、東京証券取引所の定めに基づく独立役員の要件を満たしており、独立役員として同取引所に届け出ております。

社外監査役笠原智恵氏は、当社から報酬を得ている「渥美坂井法律事務所・外国法共同事業」の弁護士（パートナー）ですが、その額は同法律事務所の年間報酬の1%未満であり、特別の利害関係を生じさせる重要性はありません。同氏は、弁護士としての豊富な経験と幅広い見識を有しており、一般株主と利益相反の生じる立場ではなく、また当社経営者や特定の当社利害関係者の利益に偏ることなく、当社の監査に反映していただけるものと判断し、社外監査役に選任しております。なお同氏は、東京証券取引所の定めに基づく独立役員の要件を満たしており、独立役員として同取引所に届け出ております。

（注）社外役員の属性情報における「取引概要の記載」については、その取引内容がクレジットカードの信用販売（包括信用購入あっせん）に係る加盟店契約の場合（提携カード発行や業務受委託等その他の取引関係がある場合を除く）、当該加盟店でのカード利用判断・取引額はクレジットカード会員の裁量に委ねられており、その性質に照らして株主・投資家の判断に影響を及ぼすおそれはないと考えられることから、概要の記載は省略しております。

<社外役員の選任基準>

当社は、社外取締役の選任については、経営の監督機能発揮による意思決定の妥当性・適正性を確保する目的から、企業経営者としての実践経験を有すること、もしくは特定専門分野における実績と広範な見識を有することを選任基準としております。また、社外監査役の選任については、中立的・客観的な視点から監査を行うことにより、経営の健全性と透明性を確保する目的から、様々な分野に関する豊富な知識・経験を有することを選任基準としております。

当社は、社外取締役及び社外監査役の独立性を客観的に判断するために、(株)東京証券取引所が定める独立役員の独立性に関する判断基準などを参考に、「社外役員の独立性に関する基準」を定めております。

「社外役員の独立性に関する基準」概要

1. 当社及びその連結子会社（以下「当社グループ」と総称する）の出身者
2. 当社の大株主
3. 当社グループの主要な取引先またはその業務執行者
4. 当社グループを主要な取引先とする者またはその業務執行者
5. 当社グループの主要な借入先の業務執行者
6. 当社グループが議決権ベースで10%以上の株式を保有する企業等の業務執行者
7. 当社グループの会計監査人である監査法人に所属する公認会計士
8. 当社グループから多額の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計士、税理士、弁護士、司法書士、弁理士等の専門家
9. 当社グループから多額の寄付を受けている者
10. 社外役員の相互就任関係となる他の会社の業務執行者
11. 近親者が上記1から10までのいずれか（重要な地位にある者に限る）に該当する者
12. 過去3年間に於いて、上記2から11までのいずれかに該当していた者
13. 前各項の定めにかかわらず、その他、当社と利益相反関係が生じ得る特段の事由が存在すると認められる者

なお、上記は「社外役員の独立性に関する基準」の概要であり、その全文は当社ウェブサイト (<http://corporate.saisoncard.co.jp/esg/governance/>) に掲載しております。

なお、社外取締役は、取締役会において、監査役監査・会計監査人監査の監査結果について報告を受けます。また内部監査部門である監査室や内部統制統括部門である経営企画部とは、業務執行状況についてそれぞれ報告を受けるなど連携を図っております。

社外監査役は、会計監査人及び監査室との連携強化を図り、内部統制統括部門より随時報告を求めながら、監査の実効性を高めるよう努めております。

⑥ コーポレート・ガバナンスの充実に向けた取り組み状況

当社では、持続的な企業価値の向上を実現するため、コーポレート・ガバナンスの充実を経営上重要な取り組みと位置づけ、内部統制システムの整備やリスク管理体制の強化、コンプライアンスの徹底などにより、その実現に努めています。

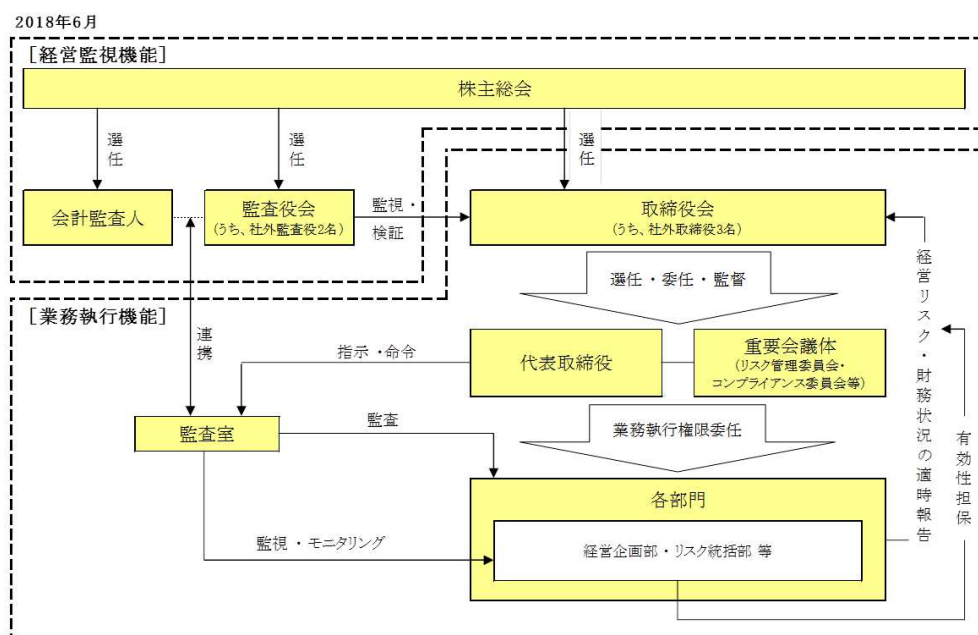
内部統制システムの構築にあたっては、内部統制統括部門である経営企画部を中心に、業務の適正性・効率性を確保するための体制構築を行うことを目的として、内部統制システム基本方針を取締役会において決定しています。なお、財務報告に係る内部統制への対応につきましては、リスク統括部を中心として当社及び連結対象会社における内部統制整備の推進と、監査室専任者による独立したモニタリングを行っております。

リスク管理については、「リスク管理委員会」及びリスク統括部を中心として、リスク発生の予防及び顕在化による当社への影響の極小化に努めています。そのため、「リスク管理規程」「損失の危険の管理に関する規程」及び「危機管理規程」の関係者に対し定期的な社内教育・訓練を行い、リスク管理体制の維持に努めています。また、当社グループ内に内在する諸問題又は重大なリスクを伴う統制事項については、経営企画部 グループ戦略室を中心としてグループ各社の業務執行状況を監督するとともに、グループ各社の主管部門と情報共有を行っております。

コンプライアンス体制については、企業活動における法令遵守、公正性、倫理性を確保するために、「コンプライアンス委員会」及びリスク統括部を設置しております。各部門にはコンプライアンス責任者を任命しているほか、会社自身がどのように行動するかを「行動宣言」として定めたうえで、役員や社員がどのように行動すべきかを「行動基準」として取りまとめ、それらを徹底するための冊子の配付、社内の相談窓口の周知、コンプライアンス研修の実施等、コンプライアンス体制の強化に取り組んでおります。

今後も引き続き、コーポレート・ガバナンスに関する国際的な潮流及び内部統制システム基本方針を踏まえて、当社に適した経営機構のあり方を検討してまいります。

当社のコーポレート・ガバナンス体制は、以下のとおりであります。



ii 提出会社の役員の報酬等

① 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

当事業年度における当社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数は、以下のとおりであります。

区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)		対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	賞与	
取締役 (社外取締役を除く)	563	414	149	14
監査役 (社外監査役を除く)	2	2	—	1
社外取締役	25	25	—	5
社外監査役	36	36	—	3

(注) 1 取締役の報酬等の総額には、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。

2 当期末現在の取締役人員は16名、監査役人員は3名であります。

② 役員ごとの氏名、役員区分、連結報酬等の総額及び連結報酬等の種類別の額

連結報酬等の総額が1億円以上の役員が存在しないため、記載を省略しております。

③ 役員報酬等の額又はその算定方法の決定方針の内容及び決定方法

役員報酬の総額については、平成19年6月23日開催の第57回定時株主総会において、取締役の報酬等の額を年額750百万円以内（うち社外取締役分は年額50百万円以内）、監査役の報酬等の額を年額150百万円以内と決議いただいております。（但し、使用人兼務取締役の使用人分給与は含まれておりません。）各取締役の個人別の報酬額については、各取締役の当社業績への貢献度に関して当該取締役を除く全取締役が評価した結果を踏まえ、決定する仕組みを導入しております。

iii 提出会社の株式の保有状況

① 保有目的が純投資目的以外の目的の投資株式の銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

82銘柄 98,093百万円

② 保有目的が純投資目的以外の目的の投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
前事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
(株)セブン&アイ・ホールディングス	6,205,000	27,066	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)良品計画	631,800	15,409	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)パルコ	7,771,500	9,255	営業協力関係の構築等関係強化のため
三井不動産(株)	1,784,000	4,235	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)高島屋	3,308,000	3,221	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)西武ホールディングス	1,456,200	2,675	営業協力関係の構築等関係強化のため
出光興産(株)	571,200	2,210	営業協力関係の構築等関係強化のため
興銀リース(株)	670,000	1,591	営業基盤構築等関係強化のため
(株)デジタルガレージ	655,200	1,506	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)アイリッジ	270,000	1,174	営業協力関係の構築等関係強化のため
マネックスグループ(株)	3,712,200	991	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)みずほフィナンシャルグループ	4,563,065	930	営業協力関係の構築等関係強化のため
スルガ銀行(株)	326,000	764	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)山口フィナンシャルグループ	393,000	474	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)ビジョン	90,400	393	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)静岡銀行	403,000	365	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)東京放送ホールディングス	181,000	359	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	85,800	347	関係強化のため
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	82,248	317	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)N o . 1	90,000	317	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)WOWOW	70,000	270	営業協力関係の構築等関係強化のため
サンヨーホームズ(株)	300,000	198	営業協力関係の構築等関係強化のため
朝日工業(株)	134,700	179	営業協力関係の構築等関係強化のため
フィデアホールディングス(株)	750,000	155	営業協力関係の構築等関係強化のため
SOMPOホールディングス(株)	34,000	138	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	191,600	134	関係強化のため
(株)バリューデザイン	27,500	122	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)りそなホールディングス	55,300	33	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)武蔵野銀行	9,500	31	関係強化のため
大日本印刷(株)	20,000	24	営業基盤構築等関係強化のため

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表 計上額 (百万円)	保有目的
(株)良品計画	631,800	22,555	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)セブン&アイ・ホールディングス	3,425,400	15,633	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)パルコ	7,771,500	11,082	営業協力関係の構築等関係強化のため
HD BANK	28,387,500	6,108	営業協力関係の構築等関係強化のため
三井不動産(株)	1,784,000	4,605	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)マネーフォワード	800,000	3,648	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)高島屋	3,308,000	3,377	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)西武ホールディングス	1,456,200	2,696	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)デジタルガレージ	655,200	2,332	営業協力関係の構築等関係強化のため
出光興産(株)	571,200	2,310	営業協力関係の構築等関係強化のため
興銀リース(株)	670,000	2,010	営業基盤構築等関係強化のため
マネックスグループ(株)	3,712,200	1,284	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)みずほフィナンシャルグループ	4,563,065	873	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)アイリッジ	540,000	805	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)ビジョン	180,800	639	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)山口フィナンシャルグループ	393,000	506	営業協力関係の構築等関係強化のため
スルガ銀行(株)	326,000	478	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)東京放送ホールディングス	181,000	408	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)静岡銀行	403,000	405	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)三井住友フィナンシャルグループ	85,800	382	関係強化のため
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	82,248	354	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)プレサンスコーポレーション	200,000	323	営業協力関係の構築等関係強化のため
サンヨーホームズ(株)	300,000	273	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)WOWOW	57,300	191	営業協力関係の構築等関係強化のため
朝日工業(株)	134,700	176	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)No. 1	90,000	151	営業協力関係の構築等関係強化のため
SOMPOホールディングス(株)	34,000	145	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)三菱UFJフィナンシャルグループ	191,600	133	関係強化のため
フィデアホールディングス(株)	565,100	109	営業協力関係の構築等関係強化のため
(株)バリューデザイン	27,500	56	営業協力関係の構築等関係強化のため

③ 保有目的が純投資目的である投資株式の前事業年度及び当事業年度における貸借対照表計上額の合計額並びに当事業年度における受取配当金、売却損益及び評価損益の合計額

区分	前事業年度 (百万円)	当事業年度 (百万円)			
	貸借対照表計 上額の合計額	貸借対照表計 上額の合計額	受取配当金 の合計額	売却損益の 合計額	評価損益の 合計額
非上場株式	0	0	—	—	(注)
上記以外の投資株式	319	383	4	23	343

(注) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「評価損益の合計額」は記載しておりません。

iv その他

① 社外取締役及び監査役との責任限定契約の内容の概要

社外取締役及び監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、当社と同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令に規定する額としております。なお、当該責任限定が認められるのは、社外取締役及び監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意であり、かつ重大な過失がないときに限られます。

② 取締役の定数

当社の取締役は25名以内とする旨定款に定めております。

③ 取締役及び監査役の選任の決議要件

当社は、取締役及び監査役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。なお、取締役の選任決議については、累積投票によらない旨を定めております。

④ 自己株式の取得の決定機関

当社は、会社法第165条第2項の規定により、株主総会の決議によらず取締役会の決議をもって自己株式の取得をすることができる旨定款に定めております。これは、自己株式の取得を取締役会の権限とすることにより、機動的な資本政策の遂行を目的とするものであります。

⑤ 中間配当制度の採用

当社は、株主総会決議に基づく剰余金の配当に加え、取締役会決議により会社法第454条第5項に定める剰余金の配当（中間配当）ができる旨定款に定めております。これは、中間配当制度を採用することにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

⑥ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬（百万円）	非監査業務に 基づく報酬（百万円）	監査証明業務に 基づく報酬（百万円）	非監査業務に 基づく報酬（百万円）
提出会社	113	446	161	213
連結子会社	104	—	101	—
計	217	446	262	213

② 【その他重要な報酬の内容】

前連結会計年度

当社の連結子会社であるPT. Saison Modern Financeは、当社の監査公認会計士と同一のネットワークに属しているDeloitte Touche Tohmatsuのメンバーファームに対して監査証明業務に基づく報酬1,683千円を支払っております。

当連結会計年度

当社の連結子会社であるPT. Saison Modern Financeは、当社の監査公認会計士と同一のネットワークに属しているDeloitte Touche Tohmatsuのメンバーファームに対して監査証明業務に基づく報酬1,701千円を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

前連結会計年度

主な非監査業務の内容は、社債発行に伴うコンフォートレター作成業務及びI F R S助言指導業務の委託であります。

当連結会計年度

主な非監査業務の内容は、社債発行に伴うコンフォートレター作成業務及びI F R S助言指導業務の委託であります。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当事項はありませんが、監査日程等を勘案した上で決定しております。

第5【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）並びに、「クレジット産業に係る会計基準の標準化について」（通商産業省通達60産局第291号）及び「信販会社の損益計算書における金融費用の表示について」（日本公認会計士協会信販・クレジット業部会 部会長報告）の趣旨に基づき作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）並びに、「クレジット産業に係る会計基準の標準化について」（通商産業省通達60産局第291号）及び「信販会社の損益計算書における金融費用の表示について」（日本公認会計士協会信販・クレジット業部会 部会長報告）の趣旨に基づき作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）及び事業年度（平成29年4月1日から平成30年3月31日まで）の連結財務諸表及び財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、セミナーへ参加しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

①【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	63,266	74,612
割賦売掛金	※1 1,768,176	1,927,544
買取債権	14,967	15,347
リース投資資産	※2 227,760	※2 231,733
その他営業債権	490	837
営業投資有価証券	33,099	35,976
販売用不動産	101,674	102,009
その他のたな卸資産	1,170	1,578
繰延税金資産	18,408	23,544
短期貸付金	3,997	5,503
その他	21,690	27,733
貸倒引当金	△47,289	△50,570
流動資産合計	2,207,412	2,395,849
固定資産		
有形固定資産		
建物	46,822	52,251
減価償却累計額	△22,148	△22,502
建物（純額）	24,673	29,749
土地	39,774	41,055
リース資産	10,515	11,043
減価償却累計額	△9,160	△9,738
リース資産（純額）	1,354	1,304
建設仮勘定	1,094	196
その他	21,227	21,021
減価償却累計額	△16,975	△16,838
その他（純額）	4,252	4,183
有形固定資産合計	71,150	76,490
無形固定資産		
借地権	970	970
ソフトウェア	5,745	175,310
リース資産	309	254
ソフトウェア仮勘定	193,309	33,782
その他	287	287
無形固定資産合計	200,622	210,605
投資その他の資産		
投資有価証券	※3,※4 168,339	※3,※4 192,224
長期貸付金	11,258	11,516
差入保証金	※2 5,439	※2 5,337
整理事業関連資産	※5 32,456	※5 32,108
繰延税金資産	21,397	8,402
その他	※3 3,468	※3 8,796
貸倒引当金	△2,977	△2,924
投資その他の資産合計	239,382	255,462
固定資産合計	511,154	542,558
繰延資産		
社債発行費	1,484	1,620
繰延資産合計	1,484	1,620
資産合計	2,720,051	2,940,027

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月 31 日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月 31 日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	238,190	295,523
短期借入金	229,960	247,960
1年内返済予定の長期借入金	69,885	55,300
1年内償還予定の社債	50,000	20,000
コマーシャル・ペーパー	358,000	389,500
リース債務	524	466
未払法人税等	9,589	5,173
賞与引当金	2,315	2,636
役員賞与引当金	157	172
利息返還損失引当金	9,445	9,229
商品券回収損失引当金	144	139
割賦利益繰延	9,028	9,579
その他	※ 2 39,388	※ 2 50,185
流動負債合計	1,016,629	1,085,865
固定負債		
社債	255,000	320,000
長期借入金	852,899	902,299
債権流動化借入金	※ 2 20,000	※ 2 20,000
リース債務	1,209	1,318
役員退職慰労引当金	133	128
債務保証損失引当金	6,418	7,359
瑕疵保証引当金	14	19
ポイント引当金	94,033	101,319
利息返還損失引当金	21,148	13,918
資産除去債務	445	467
その他	5,238	6,661
固定負債合計	1,256,539	1,373,492
負債合計	2,273,168	2,459,358
純資産の部		
株主資本		
資本金	75,929	75,929
資本剰余金	85,634	85,634
利益剰余金	302,087	334,698
自己株式	△52,879	△52,880
株主資本合計	410,773	443,381
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	35,315	36,806
繰延ヘッジ損益	△649	△458
為替換算調整勘定	△374	△601
その他の包括利益累計額合計	34,290	35,746
新株予約権	0	0
非支配株主持分	1,818	1,540
純資産合計	446,882	480,669
負債純資産合計	2,720,051	2,940,027

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業収益		
クレジットサービス事業収益	210,336	218,952
リース事業収益	13,241	12,851
ファイナンス事業収益	31,072	35,417
不動産関連事業利益		
不動産関連事業収益	37,487	37,748
不動産関連事業原価	※1 23,868	※1 22,301
不動産関連事業利益	13,619	15,446
エンタテインメント事業利益		
エンタテインメント事業収益	58,686	51,272
エンタテインメント事業原価	48,290	41,984
エンタテインメント事業利益	10,396	9,288
金融収益	279	226
営業収益合計	278,944	292,183
営業費用		
販売費及び一般管理費	※2 236,661	※2 241,740
金融費用	11,069	9,671
営業費用合計	247,730	251,412
営業利益	31,213	40,771
営業外収益		
受取利息	29	26
受取配当金	1,433	1,450
持分法による投資利益	18,446	11,896
償却債権取立益	975	1,030
整理事業関連利益	※3 413	—
その他	717	2,199
営業外収益合計	22,016	16,602
営業外費用		
支払利息	19	22
投資事業組合等分配損	90	74
整理事業関連損失	—	※3 509
貯蔵品処分損	27	26
その他	26	23
営業外費用合計	164	655
経常利益	53,065	56,717

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
特別利益		
投資有価証券売却益	1,905	8,536
受取和解金	※4 11,475	275
その他	39	17
特別利益合計	13,420	8,830
特別損失		
固定資産処分損	※6 298	※6 166
減損損失	※7 159	1
投資有価証券評価損	3,638	102
会員権評価損	1	—
システム移行費用	—	※5 12,969
その他	181	—
特別損失合計	4,279	13,240
税金等調整前当期純利益	62,207	52,307
法人税、住民税及び事業税	9,370	9,078
法人税等調整額	9,034	5,166
法人税等合計	18,404	14,244
当期純利益	43,802	38,062
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失（△）	1,549	△267
親会社株主に帰属する当期純利益	42,253	38,329

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益	43,802	38,062
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△1,263	5,676
繰延ヘッジ損益	1,015	191
為替換算調整勘定	△9	△36
持分法適用会社に対する持分相当額	△9,938	△4,386
その他の包括利益合計	※1 △10,195	※1 1,445
包括利益	33,606	39,507
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	32,060	39,785
非支配株主に係る包括利益	1,546	△277

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	75,929	85,634	265,554	△52,885	374,232
当期変動額					
剰余金の配当			△5,719		△5,719
親会社株主に帰属する当期純利益			42,253		42,253
自己株式の取得				△1	△1
自己株式の処分		0		8	8
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	0	36,533	6	36,540
当期末残高	75,929	85,634	302,087	△52,879	410,773

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	46,301	△1,665	△152	44,483	0	272	418,988
当期変動額							
剰余金の配当							△5,719
親会社株主に帰属する当期純利益							42,253
自己株式の取得							△1
自己株式の処分							8
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△10,986	1,015	△222	△10,192	－	1,546	△8,646
当期変動額合計	△10,986	1,015	△222	△10,192	－	1,546	27,894
当期末残高	35,315	△649	△374	34,290	0	1,818	446,882

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	75,929	85,634	302,087	△52,879	410,773
当期変動額					
剰余金の配当			△5,719		△5,719
親会社株主に帰属する当期純利益			38,329		38,329
自己株式の取得				△1	△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	32,610	△1	32,608
当期末残高	75,929	85,634	334,698	△52,880	443,381

	その他の包括利益累計額				新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計			
当期首残高	35,315	△649	△374	34,290	0	1,818	446,882
当期変動額							
剰余金の配当							△5,719
親会社株主に帰属する当期純利益							38,329
自己株式の取得							△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	1,491	191	△227	1,456	－	△277	1,178
当期変動額合計	1,491	191	△227	1,456	－	△277	33,786
当期末残高	36,806	△458	△601	35,746	0	1,540	480,669

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	62,207	52,307
減価償却費	7,368	11,741
繰延資産償却額	246	300
整理事業関連損益 (△は益)	△413	509
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	1,866	3,271
ポイント引当金の増減額 (△は減少)	5,457	7,286
利息返還損失引当金の増減額 (△は減少)	5,472	△7,446
その他の引当金の増減額 (△は減少)	1,564	1,272
受取利息及び受取配当金	△1,668	△1,655
支払利息	9,578	8,617
持分法による投資損益 (△は益)	△18,446	△11,896
為替差損益 (△は益)	△23	28
投資有価証券売却・償還損益 (△は益)	△1,905	△8,536
投資有価証券評価損益 (△は益)	3,638	102
減損損失	159	1
有形及び無形固定資産除売却損益 (△は益)	767	622
受取和解金	△11,475	△275
システム移行費用	—	12,969
営業債権の増減額 (△は増加)	△170,992	△160,102
リース投資資産の増減額 (△は増加)	△308	△3,972
営業投資有価証券の増減額 (△は増加)	△4,312	△3,145
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△3,077	△742
その他の資産の増減額 (△は増加)	3,499	△5,015
営業債務の増減額 (△は減少)	△1,529	57,333
その他の負債の増減額 (△は減少)	△1,860	11,344
その他	329	△1,038
小計	△113,857	△36,120
利息及び配当金の受取額	2,778	3,516
利息の支払額	△9,997	△8,895
和解金の受取額	11,475	275
法人税等の還付額	9,883	65
法人税等の支払額	△3,562	△13,649
営業活動によるキャッシュ・フロー	△103,280	△54,808

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資有価証券の取得による支出	△3,760	△14,715
投資有価証券の売却等による収入	※3 3,187	※3 14,751
整理事業に伴う支出	—	△204
整理事業に伴う収入	21,098	—
有形及び無形固定資産の取得による支出	△43,862	△44,518
有形及び無形固定資産の売却による収入	64	20
貸付けによる支出	△37	△1,783
貸付金の回収による収入	5,479	17
その他	△1,632	50
投資活動によるキャッシュ・フロー	△19,462	△46,380
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（△は減少）	15,800	18,000
コマーシャル・ペーパーの純増減額（△は減少）	122,000	31,500
長期借入れによる収入	88,800	104,700
長期借入金の返済による支出	△122,960	△69,885
社債の発行による収入	59,173	84,564
社債の償還による支出	△35,000	△50,000
リース債務の返済による支出	△884	△565
自己株式の売却による収入	0	—
自己株式の取得による支出	△1	△1
配当金の支払額	△5,719	△5,719
財務活動によるキャッシュ・フロー	121,208	112,592
現金及び現金同等物に係る換算差額	△62	△61
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△1,598	11,342
現金及び現金同等物の期首残高	64,813	63,215
現金及び現金同等物の期末残高	※1 63,215	※1 74,557

【注記事項】

(継続企業の前提に関する注記)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 11社

主要な連結子会社名

(株)セゾンファンデックス

(新規)

(株)ワークネット

(当連結会計年度において、新たに株式を取得したため、連結の範囲に含めております。)

(除外)

(株)エー・アイ・シー

(当連結会計年度において、清算が終了したため、連結の範囲から除外しております。)

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社

(株)エール

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、いずれも小規模会社であり、合計の総資産、売上高（営業収益）、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼさないためであります。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 10社

持分法適用の関連会社名

(株)セゾン情報システムズ

出光クレジット(株)

ユーシーカード(株)

りそなカード(株)

静銀セゾンカード(株)

大和ハウスフィナンシャル(株)

高島屋クレジット(株)

(株)セブンCSカードサービス

(株)イープラス

HD S A I S O N F i n a n c e C o m p a n y L t d .

(2) 持分法を適用していない非連結子会社（(株)エール他）及び持分法を適用していない関連会社（(株)ヤマダフィナンシャル他）は、当期純損益（持分に見合う額）及び利益剰余金（持分に見合う額）等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日が連結決算日と異なる会社は次のとおりであります。

会社名	決算日
(株)はやぶさトラスト	12月31日
合同会社エル・ブルーを営業者とする匿名組合	12月31日
P T . S a i s o n M o d e r n F i n a n c e	12月31日
(株)セゾンファンデックス	1月31日
ジェーピーエヌ債権回収(株)	1月31日
(株)セゾンパーソナルプラス	1月31日
(株)ワークネット	1月31日
(株)アトリウム	2月28日
(株)アトリウム債権回収サービス	2月28日

上記の連結子会社の決算日現在の財務諸表を使用しております。但し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

 その他有価証券（営業投資有価証券を含む）

時価のあるもの

 決算期末日の市場価格等に基づく時価法

 （評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。また、売却原価については、移動平均法により算定しております。）

時価のないもの

 主として移動平均法による原価法

 なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

デリバティブ

時価法

たな卸資産

販売用不動産

 個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

その他

 主として個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

 但し、貯蔵品については最終仕入原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

 主として定額法によっております。

 なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

無形固定資産（リース資産を除く）

 定額法によっております。

 なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。但し、ソフトウェアについては利用可能期間（5年、10年又は15年）に基づく定額法によっております。

リース資産

 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零として算定する定額法によっております。

(3) 重要な繰延資産の処理方法

社債発行費

 社債の償還までの期間にわたり定額法により償却しております。

(4) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

割賦売掛金等の諸債権及びリース投資資産の貸倒損失に備えるため、一般債権及び要注意先債権に相当する債権については、一定の種類毎に分類し、過去の一定期間における各々の貸倒実績から算出した貸倒実績率に基づき引き当てており、破産更生債権等については、回収不能見込相当額を計上しております。

賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に備えるため、支給見込額のうち当連結会計年度における負担額を計上しております。

役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えて、当連結会計年度における支給見込額を計上しております。

利息返還損失引当金

将来の利息返還の請求に備え、過去の返還実績等を勘案した必要額を計上しております。

商品券回収損失引当金

当社が発行する商品券等の未回収分について、一定期間経過後に収益計上したものに対する将来の引換請求に備えるため、過去の回収実績を勘案した必要額を計上しております。

役員退職慰労引当金

一部の連結子会社において、役員に対する退職慰労金の支出に備えるため、内規に基づく要支給見積額を計上しております。

債務保証損失引当金

債務保証のうち提携金融機関が行っている個人向けローン等及び、家賃保証事業に係る債務保証について将来発生する危険負担に備えるため、将来発生すると見込まれる損失見込額を、実績率等を勘案して債務保証損失引当金として計上しております。

瑕疵保証引当金

販売用不動産の引渡後の瑕疵保証等による補修費用の支出に備えるため、過去の実績を基礎に補修見積額を計上しております。

ポイント引当金

クレジットカードの利用促進を目的としてカード会員に提供しているポイント制度における将来の交換費用の支出に備えるため、交換実績等に基づき将来発生すると見込まれる交換費用負担額を計上しております。

(5) 重要な収益の計上基準

収益の計上は次の方法によっております。

クレジットサービス事業

① 包括信用購入あっせん

顧客手数料

残債方式又は7・8分法

加盟店手数料

期日到来基準

② カードキャッシング

残債方式

③ 証書ローン

残債方式

④ 業務代行

取扱高発生基準

⑤ クレジットサービス関連（個別信用購入あっせん）

顧客手数料

残債方式又は7・8分法

加盟店手数料

期日到来基準

リース事業

⑥ リース

売上高を計上せず利息相当額を各期へ配分する方法

⑦ 個別信用購入あっせん

7・8分法

ファイナンス事業

⑧ 信用保証

残債方式

⑨ ファイナンス関連（各種ローン等）

残債方式

(6) 重要な外貨建ての資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

在外子会社等の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の要件を満たす取引については繰延ヘッジ処理及び時価ヘッジ処理によっております。

なお、特例処理の要件を満たす金利スワップについては特例処理によっております。また、振当処理の要件を満たす為替予約については、振当処理によっております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段…金利スワップ、債券先渡し及び為替予約

ヘッジ対象…借入金、社債、投資信託及び貸付金

③ ヘッジ方針

財務活動に係る金利リスクをヘッジするために、デリバティブ取引を行っております。

なお、デリバティブ取引の相手先は、格付けの高い金融機関に限定しております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計又は相場変動を四半期ごとに比較し、両者の変動額等を基礎にして、ヘッジ有効性を評価しております。

但し、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

(8) のれんの償却方法及び償却期間

20年以内のその効果が及ぶ期間にわたって均等償却しております。

(9) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資であります。

(10) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税抜方式で計上しております。但し、固定資産に係る控除対象外消費税等は長期前払消費税等として、投資その他の資産の「その他」に計上し、均等償却しております。

(会計方針の変更)

(買取債権の会計処理の変更)

不動産関連事業を行っている一部の連結子会社は、不動産担保付の買取債権（以下「買取債権」という。）について、従来、買取債権を「買取債権（たな卸資産）」に計上するとともに、買取債権の回収金額を「不動産関連事業収益」、当該回収金額に対応する買取債権原価を「不動産関連事業原価」に計上しておりましたが、当連結会計年度より、買取債権を「買取債権（債権）」に計上し、買取債権の回収金額のうち買取債権の取得価額を超過した金額を「不動産関連事業収益」として計上する方法に変更いたしました。また、買取債権の評価については、従来、回収不能見込相当額をたな卸資産評価損として直接控除しておりましたが、この変更により、回収不能見込相当額を貸倒引当金として間接控除しております。

この変更は、従来買取債権の回収は実質的に担保不動産処分によるものであることからたな卸資産として取扱っておりましたが、近年、買取債権市場においては、担保不動産の処分による回収と比較して、一定の弁済が見込める買取債権が増加傾向にあり、当社の連結子会社も同様に推移していることを踏まえ、買取債権の管理区分を担保不動産単位から債務者単位に変更し、買取債権を債権として扱うことで、買取債権の回収業務の実態をより的確に表示することから実施したものであります。

この結果、買取債権の表示方法は、従来、連結貸借対照表上、買取債権（前連結会計年度末13,706百万円）からたな卸資産評価損（前連結会計年度末1,268百万円）を直接控除して表示しておりましたが、当連結会計年度末においては買取債権13,838百万円と貸倒引当金1,211百万円を間接控除して表示しております。これに伴い、買取債権から生じるキャッシュ・フローの表示方法についても、従来、連結キャッシュ・フロー計算書上、たな卸資産の増減額（前連結会計年度794百万円）として表示しておりましたが、当連結会計年度においては、営業債権の増減額△132百万円（前連結会計年度1,235百万円）と貸倒引当金の増減額△56百万円（前連結会計年度△441百万円）と表示しております。

なお、買取債権から生じる収益及び費用の表示方法は、従来、連結損益計算書上、営業収益の内訳である不動産関連事業収益（前連結会計年度8,063百万円）と不動産関連事業原価（前連結会計年度6,215百万円）を総額で表示しておりましたが、当連結会計年度においては不動産関連事業収益8,887百万円と不動産関連事業原価7,391百万円を純額で不動産関連事業収益として表示しております。

ただし、当該会計方針の変更による損益影響は軽微であるため、連結損益計算書の遡及適用は行っておりません。

また、無担保の買取債権につきましては、従来、「割賦売掛金」に含めて表示しておりましたが、当連結会計年度より「買取債権（債権）」に含めて表示しております。なお、当連結会計年度末の買取債権に含まれる無担保の買取債権は1,508百万円、前連結会計年度末の買取債権に含まれる無担保の買取債権は1,261百万円であります。

(未適用の会計基準等)

- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 平成30年2月16日改正 企業会計基準委員会)
- ・「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成30年2月16日最終改正 企業会計基準委員会)

(1) 概要

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等は、日本公認会計士協会における税効果会計に関する実務指針を企業会計基準委員会に移管するに際して、基本的にその内容を踏襲した上で、必要と考えられる以下の見直しが行われたものであります。

(会計処理の見直しを行った主な取扱い)

- ・個別財務諸表における子会社株式等に係る将来加算一時差異の取扱い
- ・(分類1)に該当する企業における繰延税金資産の回収可能性に関する取扱い

(2) 適用予定日

平成31年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「税効果会計に係る会計基準の適用指針」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(追加情報)

該当事項はありません。

(連結貸借対照表関係)

※1 割賦売掛金

流動化している割賦売掛金残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
カードショッピング 1回払い債権等	20,000百万円	—

割賦売掛金に含まれている流動化に伴う未収金債権は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
カードショッピング 1回払い債権等	2,727百万円	—

※2 担保資産

(担保に供している資産)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
リース投資資産	20,000百万円	20,000百万円

(担保資産に対応する債務)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
債権流動化借入金	20,000百万円	20,000百万円

債権流動化借入金は、リース投資資産の流動化に伴い発生した債務であります。

(担保に供している資産)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
差入保証金	1,510百万円	1,511百万円

(担保資産に対応する債務)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
その他(流動負債)	1,386百万円	1,644百万円

資金決済に関する法律第14条第1項等に基づく発行保証金等として、差入保証金を供託しております。

※3 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	82,701百万円	92,272百万円
その他(出資金)	618	25

※4 投資有価証券のうち株券貸借契約を締結しているものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株券貸借契約)	2,681百万円	4,185百万円

※5 不動産関連事業の再構築に伴い、継続事業と撤退事業に区分したことにより、撤退事業に関連する資産を「整理事業関連資産」として投資その他の資産に計上しております。「整理事業関連資産」の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
不動産	26,893百万円	26,586百万円
債権	5,563	5,521
合計	32,456	32,108

6 偶発債務
債務保証

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
(保証先)	(保証金額)	(保証金額)
1 提携金融機関が行っている 個人向けローンに係る顧客	279,588百万円	275,527百万円
2 提携金融機関が行っている 絵画担保融資に係る顧客	68	61
3 家賃保証事業に係る顧客	—	2,805
4 提携金融機関等が行っている 不動産担保ローンに係る顧客	48,067	59,541
合計	327,724	337,935

7 貸出コミットメント
(貸手側)

当社及び一部の連結子会社は、クレジットサービス事業において、クレジットカード業務に附帯するキャッシングサービス及びカードローン業務を行っております。当該業務及び関係会社に対する極度貸付における貸出コミットメントに準ずる貸出未実行額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	4,163,382百万円	4,184,380百万円
貸出実行残高	231,775	225,263
差引額	3,931,606	3,959,117

なお、上記の貸出コミットメントに準ずる契約においては、その殆どがクレジットカードの附帯機能であるキャッシングサービスとして当社の会員に付与しているものであるため、必ずしも貸出未実行額の全額が貸出実行されるものではありません。

(借手側)

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行5行と貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約における貸出コミットメントに係る借入金未実行額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	225,000百万円	225,000百万円
借入実行残高	—	—
差引額	225,000	225,000

(連結損益計算書関係)

※1 通常の販売目的で保有するたな卸資産の収益性の低下による簿価切下額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
不動産関連事業原価	923百万円	589百万円

※2 販売費及び一般管理費のうち主なものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
広告宣伝費	25,231百万円	26,354百万円
ポイント引当金繰入額	14,717	16,642
貸倒引当金繰入額	21,162	22,407
利息返還損失引当金繰入額	15,961	629
債務保証損失引当金繰入額	6,221	7,128
役員報酬	1,047	1,083
役員賞与引当金繰入額	157	172
従業員給料及び賞与	36,218	37,480
賞与引当金繰入額	2,315	2,636
退職給付費用	904	1,074
支払手数料	63,611	71,265
減価償却費	6,694	11,029

※3 不動産関連事業の再構築に伴い、継続事業と撤退事業に区分したことにより、撤退事業に関連する損益を「整理事業関連利益」として営業外収益に、または「整理事業関連損失」として営業外費用にそれぞれ計上しております。内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
不動産売却損益(△は損失)	822百万円	43百万円
賃貸収益(純額)	694	622
その他	△1,103	△1,174
合計	413	△509

※4 前連結会計年度においては、当社及び一部の連結子会社は、(株)セゾン情報システムズからの、共同基幹システム開発案件の遅延等に係る和解金を「受取和解金」として特別利益に計上しております。

※5 当社は、構築中であった共同基幹システムへの移行に係る一時費用を「システム移行費用」として特別損失に計上しております。

※6 固定資産処分損の内容は次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	〈除却損〉	11百万円	25百万円
建設仮勘定	〈除却損〉	—	19
ソフトウェア	〈除却損〉	271	1
ソフトウェア仮勘定	〈除却損〉	0	88
その他（器具備品等）	〈除却損〉	15	31
合計		298	166

※7 減損損失

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

場所	用途	種類
関東	事業用資産	ソフトウェア、その他（長期前払費用）
甲信越	遊技施設	その他（器具備品等）
関東	賃貸用不動産	建物、土地

（経緯）

事業用資産については、開発システムの使用凍結、遊技施設については、営業損益の悪化が見られると同時に短期的に業績の回復が見込まれないため、また、賃貸用不動産については、資産の売却に伴い、減損損失の計上に至りました。

（減損損失の金額）

（単位：百万円）

種類	金額
有形固定資産	
建物	16
土地	91
その他（器具備品等）	1
無形固定資産	
ソフトウェア	42
投資その他の資産	
その他（長期前払費用）	7
合計	159

（回収可能価額の算定方法）

事業用資産及び遊技施設の回収可能価額は、使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローがマイナスであるため、回収可能価額を零として評価しております。

賃貸用不動産の回収可能価額は、正味売却価額により測定しており、第三者による合理的に算定された評価額により評価しております。

（グルーピングの方法）

当社及び当社グループは、損益管理を合理的に行える事業単位によって資産グルーピングを行っております。

なお、遊技施設については施設単位、賃貸用不動産及び稼動休止資産については物件単位によって資産グルーピングを行っております。

(連結包括利益計算書関係)

※ 1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4 月 1 日 至 平成30年 3 月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	367百万円	17,988百万円
組替調整額	△1,905	△9,810
税効果調整前	△1,537	8,178
税効果額	274	△2,501
その他有価証券評価差額金	△1,263	5,676
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	745	△20
組替調整額	703	296
税効果調整前	1,449	275
税効果額	△433	△84
繰延ヘッジ損益	1,015	191
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△9	△36
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	1,502	36
組替調整額	△11,441	△4,422
持分法適用会社に対する持分相当額	△9,938	△4,386
その他の包括利益合計	△10,195	1,445

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式	185,444	—	—	185,444
自己株式				
普通株式(注)1	22,114	0	3	22,111

(変動事由の概要)

(注) 1. 増加株式数の内訳は、次のとおりであります。

・単元未満株式の買取による増加

0千株

減少株式数の内訳は、次のとおりであります。

・単元未満株式の買増し請求者への売却による減少

3千株

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

会社名	目的となる株式の種類	目的となる株式の数 (千株)	当連結会計年度末残高 (百万円)
(連結子会社) (株)キュービタス	—	—	0
合計		—	0

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成28年6月21日 定時株主総会	普通株式	5,719百万円	35円00銭	平成28年3月31日	平成28年6月22日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
平成29年6月20日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	5,719百万円	35円00銭	平成29年3月31日	平成29年6月21日

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度 期首株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)
発行済株式				
普通株式	185,444	—	—	185,444
自己株式				
普通株式（注）1	22,111	0	—	22,112

（変動事由の概要）

（注）1．増加株式数の内訳は、次のとおりであります。

・単元未満株式の買取による増加

0千株

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

会社名	目的となる株式の種類	目的となる株式の数 (千株)	当連結会計年度末残高 (百万円)
（連結子会社） ㈱キュービタス	—	—	0
合計		—	0

3 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
平成29年6月20日 定時株主総会	普通株式	5,719百万円	35円00銭	平成29年3月31日	平成29年6月21日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
平成30年6月20日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	5,719百万円	35円00銭	平成30年3月31日	平成30年6月21日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
現金及び預金	63,266百万円	74,612百万円
分別管理預金	△50	△54
現金及び現金同等物	63,215	74,557

2 重要な非資金取引

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当連結会計年度に新たに計上した ファイナンス・リース取引に係る資産及び負債の額	607百万円	571百万円

※3 投資有価証券の売却等による収入の内訳

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
投資有価証券の売却による収入	2,968百万円	13,133百万円
投資事業組合等の分配又は出資金等の返戻による収入	218	1,618
合計	3,187	14,751

(リース取引関係)

○ ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

1. 借主側

(1) リース資産の内容

- ・有形固定資産
主として、サーバー等の備品であります。
- ・無形固定資産
主として、クレジットサービス事業におけるソフトウェアであります。

(2) リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2. 貸主側

(1) リース投資資産の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
リース料債権部分	252,555	255,521
見積残存価額部分	—	—
受取利息相当額	24,794	23,788
リース投資資産	227,760	231,733

(2) リース投資資産に係るリース料債権部分の連結会計年度末日後の回収予定額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産	58,252	53,078	45,636	35,697	22,317	12,778
リース投資資産に係る リース料債権部分	67,828	59,940	50,094	38,171	23,395	13,124

(注) 上表中の金額は、約定に基づく回収予定額であります。

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (平成30年3月31日)					
	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超
リース投資資産	59,160	54,318	47,078	35,849	22,444	12,882
リース投資資産に係る リース料債権部分	68,394	60,909	51,315	38,195	23,477	13,229

(注) 上表中の金額は、約定に基づく回収予定額であります。

○ オペレーティング・リース取引に係る注記

借主側

未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31日)
1 年内	74	70
1 年超	470	403
合計	544	473

貸主側

未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年 3 月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3 月31日)
1 年内	1, 238	1, 721
1 年超	5, 207	2, 000
合計	6, 446	3, 721

（金融商品関係）

1. 金融商品の状況に関する事項

（1）金融商品に対する取組方針

当社グループは、クレジットサービス事業、リース事業、ファイナンス事業、不動産関連事業、エンタテインメント事業を行っております。これらの事業を行うため、市場の状況や長短のバランスを調整して、銀行借入れによる間接金融のほか、社債やコマーシャル・ペーパーの発行、債権流動化による直接金融によって資金調達を行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当社では、資産及び負債の総合的管理（ALM）を行っております。また、その一環として、金利スワップ等の活用によるデリバティブ取引も行っております。

（2）金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する金融資産は、主としてクレジットカード会員に対する割賦売掛金であり、会員の返済状況の悪化等によってもたらされる信用リスクに晒されております。当期の連結決算日現在における割賦売掛金のうち、多くはクレジットサービス事業に対するものであり、当該事業を巡る経済環境（景気後退に伴う雇用環境、家計可処分所得、個人消費）等の状況の変化により、契約条件に従った債務履行がなされない可能性があります。

また、（営業）投資有価証券は、主に株式、投資信託及び組合出資金等であり、純投資目的及び事業推進目的で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

借入金、社債及びコマーシャル・ペーパー等の有利子負債は、想定以上の金融情勢の変動や当社グループの格付けの引下げなど一定の環境の下で当社グループが市場を利用できなくなる場合など、支払期日にその支払いを実行できなくなる流動性リスクに晒されております。また、変動金利の借入を行っており、金利の変動リスクに晒されておりますが、一部は金利スワップ取引を行うことにより当該リスクを回避しております。

デリバティブ取引にはALMの一環で行っている金利スワップ取引があります。当社では、これらヘッジ手段として、ヘッジ対象である借入金に関わる金利の変動リスクに対してヘッジ会計を適用しております。これらのヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段のキャッシュ・フロー変動の累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして、ヘッジの有効性を評価しております。

このほか、金利スワップ取引をヘッジ手段として、ヘッジ対象である長期借入金に金利スワップの特例処理を行っているものがあります。また、振当処理の要件を満たす為替予約については、振当処理によっております。なお、投資信託に関わる市場価格の変動リスクに対してヘッジ会計を適用しております。

（3）金融商品に係るリスク管理体制

①信用リスクの管理

当社グループは、当社の信用リスクに関する管理諸規程に従い、継続的な債権内容の健全化に努めており、与信限度額、信用情報管理、内部格付けなど与信管理に関する体制を整備し、運営しております。これらの与信管理は、定期的に取締役会等を開催し、審議、報告を行っております。（営業）投資有価証券は、ALM委員会において、信用情報や時価の把握を定期的に行うことで管理しております。また、長期貸付金は、関係部門が与信先の信用リスク状況などについて定期的にモニタリングを行っております。デリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、契約不履行により生ずる信用リスクを回避するため、契約先を信用度の高い内外の銀行及び証券会社を相手として行っております。

②市場リスクの管理

（i）金利リスクの管理

当社グループは、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。ALMに関する規則において、リスク管理方法や手続等の詳細を明記しており、ALM委員会において決定された方針に基づき、取締役会において実施状況の把握、今後の対応等の協議を行っております。日常的には関係部門において金融資産及び負債の金利や期間を総合的に把握し、金利感応度（ギャップ）分析等によりモニタリングを行っております。なお、ALMにより、金利の変動リスクをヘッジするための金利スワップのデリバティブ取引も行っております。

（ii）価格変動リスクの管理

（営業）投資有価証券を含む投資商品については、ALM方針に基づき、投資案件について、事前審査、投資限度額の設定のほか、継続的なモニタリングを通じて価格変動リスクの軽減を図っております。また、業務・資本提携を含む事業推進目的で保有している株式については、関係部門を通じて、取引先の市場環境や財務状況などをモニタリングしております。

これらの情報は関係部門を通じて、ALM委員会等において定期的に報告されております。

(iii) デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取締役会で定められた社内管理規程に基づき、予め取締役会で承認された取引総枠、ヘッジ比率の範囲内で、所定の手続きを経て関係部門が執行しております。なお、主たるデリバティブ取引の状況は、四半期ごとに取締役会に報告しております。

また、連結子会社のデリバティブ取引については、各社が定めた管理規程に基づき行われております。取引期間中において、四半期ごとにデリバティブ取引と対応債権債務とのヘッジ状況、契約先、取引金額、残存期間、取引時価を当社に報告することとしております。

(iv) 市場リスクに係る定量的情報

当社グループにおいて、主要なリスク変数である金利リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「割賦売掛金」、「短期借入金」、「長期借入金」、「社債」、「債権流動化借入金」、「金利スワップ取引」であります。

当社グループでは、これらの金融資産及び金融負債について、期末後1年程度の合理的な予想変動幅を用いた当面1年間の損益に与える影響額を、金利の変動リスクの管理にあたっての定量的分析に利用しております。当該影響額の算定にあたっては、対象の金融資産及び金融負債を固定金利群と変動金利群に分けて、変動金利資産と変動金利負債の差額を金利ギャップ額として算定しております。

金利以外のすべてのリスク変数が一定であることを仮定し、平成30年3月31日現在、指標となる金利が1ベース・ポイント(0.01%)上昇したものと想定した場合には、税金等調整前当期純利益が27百万円減少(前連結会計年度は、39百万円減少)し、1ベース・ポイント(0.01%)下落したものと想定した場合には、税金等調整前当期純利益が27百万円増加(前連結会計年度は、39百万円増加)するものと把握しております。当該影響額は、金利を除くリスク変数が一定の場合を前提としており、金利とその他のリスク変数との相関を考慮しておりません。また、金利の合理的な予想変動幅を超える変動が生じた場合には、算定額を超える影響が生じる可能性があります。

③資金調達に係る流動性リスクの管理

当社グループは、ALMを通じて、適時に資金管理を行うほか、資金調達手段の多様化、複数の金融機関からのコミットメントラインの取得、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等による場合、当該価額が異なることもあります。また、「2. 金融商品の時価等に関する事項」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。また、連結貸借対照表計上額の重要性が乏しい科目については、記載を省略しております。

資産

(1) 現金及び預金

前連結会計年度(平成29年3月31日)

(単位: 百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
現金及び預金	63,266	63,266	—

当連結会計年度(平成30年3月31日)

(単位: 百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
現金及び預金	74,612	74,612	—

満期のない預金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 割賦売掛金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
割賦売掛金	1,768,176		
貸倒引当金	△38,272		
合計	1,729,904	1,784,270	54,365

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
割賦売掛金	1,927,544		
貸倒引当金	△41,725		
合計	1,885,818	1,942,908	57,089

割賦売掛金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸付先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。一方、固定金利によるものは、貸付金の種類及び期間に基づく区分ごとに、対象金融資産から発生する将来キャッシュ・フロー期間を算定し、信用リスク等を控除したものを市場利子率（リスクフリーレート）で割り引いて時価を算定しております。貸倒懸念債権については、連結決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額が時価に近似していると想定されるため、当該価額をもって時価としております。

また、割賦売掛金のうち、当該貸付を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

なお、将来の利息返還については、当該時価算定には反映しておりません。

(3) リース投資資産

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
リース投資資産	227,760		
貸倒引当金	△6,258		
合計	221,502	230,049	8,547

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
リース投資資産	231,733		
貸倒引当金	△6,102		
合計	225,631	233,089	7,457

リース契約期間に基づく区分ごとに、元利金の将来キャッシュ・フロー期間を算定し、債務者の信用リスク等を控除したものを市場利子率（リスクフリーレート）で割り引いて時価を算定しております。

(4) 営業投資有価証券及び投資有価証券

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
投資有価証券（其他有価証券）	75,828	75,828	—
投資有価証券（関係会社株式）	2,410	11,784	9,374

これらの時価について、上場株式は取引所の価格によっており、債券は取引所の価格や取引金融機関から提示された価格、又は裏付資産の価値から合理的に算定される価格によっております。また、投資信託については、公表されている基準価格によっております。投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合財産を時価評価できるものには時価評価を行ったうえ、当該時価に対する持分相当額を組合出資金の時価とみなして計上しております。

また、次表のとおり、非上場株式など、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は時価開示の対象とはしておりません。

（単位：百万円）

非上場株式	6,337
関係会社株式	80,291
其他有価証券	36,571

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記を参照ください。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
投資有価証券（其他有価証券）	85,698	85,698	—
投資有価証券（関係会社株式）	4,274	13,650	9,376

これらの時価について、上場株式は取引所の価格によっております。投資信託については、公表されている基準価格によっております。投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資については、組合財産を時価評価できるものには時価評価を行ったうえ、当該時価に対する持分相当額を組合出資金の時価とみなして計上しております。

また、次表のとおり、非上場株式など、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は時価開示の対象とはしておりません。

（単位：百万円）

非上場株式	10,342
関係会社株式	87,997
其他有価証券	39,887

また、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「有価証券関係」注記を参照ください。

(5) 短期貸付金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
短期貸付金	3,997		
貸倒引当金	△1		
合計	3,995	3,995	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
短期貸付金	5,503		
貸倒引当金	△1		
合計	5,502	5,502	—

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(6) 長期貸付金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
長期貸付金	11,258		
貸倒引当金	△0		
合計	11,257	11,257	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
長期貸付金	11,516		
貸倒引当金	△1		
合計	11,515	11,515	—

長期貸付金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸付先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから当該帳簿価額によっております。

負債

(1) 支払手形及び買掛金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
支払手形及び買掛金	238,190	238,190	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
支払手形及び買掛金	295,523	295,523	—

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 短期借入金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
短期借入金	229,960	229,960	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
短期借入金	247,960	247,960	—

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) コマーシャル・ペーパー

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
コマーシャル・ペーパー	358,000	358,000	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
コマーシャル・ペーパー	389,500	389,500	—

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期借入金（1年内返済予定含む）

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
長期借入金 （1年内返済予定含む）	922,784	933,736	△10,952

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
長期借入金 （1年内返済予定含む）	957,599	967,744	△10,145

長期借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映していることから、信用スプレッドの変動のみを時価評価しております。現時点での信用スプレッドについては、当社及び連結子会社が現時点での類似した条件で平均残余期間の借入金を新たに行う時に金融機関により提示されると思われる借入金の信用スプレッドを用いております。評価差額の算定方法は、信用スプレッドの変動による利息の差分を一定の期間ごとに区分し、各期間に相当する市場金利（リスクフリーレート）で割り引いております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該長期借入金の元利金の合計額を同様の借入において想定される利率で割り引いて時価を算定しております。

(5) 社債（1年内償還予定含む）

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
社債 （1年内償還予定含む）	305,000	307,142	△2,142

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
社債 （1年内償還予定含む）	340,000	342,145	△2,145

当社の発行する社債のうち、公募債の時価は、市場価格（日本証券業協会が定める公社債店頭売買参考統計値）によっております。当社の発行する私募債は、当社の主要取引銀行が相対で引受けたものであり、時価の計算は（4）長期借入金と同等の方法で算定しております。

(6) 債権流動化借入金

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
債権流動化借入金	20,000	20,274	△274

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
債権流動化借入金	20,000	20,219	△219

債権流動化借入金の時価は、当社の信用力の変動の影響を受けないと考えられることから、市場金利の変動による時価変動の影響のみを算定しております。一定の期間ごとに区分した当該債権流動化借入金の元利金の合計額を同様の債権流動化借入において想定される利率で割り引いて時価を算定しております。

(7) リース債務（1年内返済予定含む）

前連結会計年度（平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
リース債務 （1年内返済予定含む）	1,733	1,733	—

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
リース債務 （1年内返済予定含む）	1,784	1,784	—

元利金の合計額を、新規に同様のリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算出いたしますが、その時価は帳簿価額に近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(8) 保証契約

前連結会計年度（平成29年3月31日）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
保証契約	—	21,969	21,969

契約上の保証料の将来キャッシュ・フローを算定し、債務者の信用リスク等を控除したものを現在価値に割り引いたものを時価としております。

なお、偶発債務の保証契約額は334,142百万円であり、連結貸借対照表上に債務保証損失引当金として6,418百万円計上しております。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
保証契約	—	19,411	19,411

契約上の保証料の将来キャッシュ・フローを算定し、債務者の信用リスク等を控除したものを現在価値に割り引いたものを時価としております。

なお、偶発債務の保証契約額は345,294百万円であり、連結貸借対照表上に債務保証損失引当金として7,359百万円計上しております。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記を参照ください。

前連結会計年度（平成29年3月31日）

(注1) 金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内	5年超
現金及び預金	63,266	—	—	—	—	—
割賦売掛金	1,147,807	224,549	80,418	20,343	15,559	224,204
リース投資資産	57,328	52,323	45,088	35,365	22,172	12,742
短期貸付金	3,997	—	—	—	—	—
長期貸付金	1,148	17	17	17	17	37

なお、金銭債権のうち、破産更生債権等、償還予定額が見込めない68,032百万円は含めておりません。

(注2) 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

(単位：百万円)

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内	5年超
社債 (1年内償還予定含む)	50,000	20,000	30,000	45,000	45,000	115,000
長期借入金 (1年内返済予定含む)	69,885	55,300	83,379	102,900	77,170	534,150
リース債務 (1年内返済予定含む)	524	401	281	281	144	100
その他の有利子負債 (1年内返済予定含む)	358,000	—	—	4,694	4,948	10,358

当連結会計年度（平成30年3月31日）

（注1）金銭債権及び満期がある有価証券の連結決算日後の償還予定額

（単位：百万円）

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内	5年超
現金及び預金	74,612	—	—	—	—	—
割賦売掛金	1,135,628	236,500	86,355	21,380	15,479	370,010
リース投資資産	58,381	53,687	46,641	35,616	22,350	12,855
短期貸付金	5,503	—	—	—	—	—
長期貸付金	1,345	27	27	27	27	59

なお、金銭債権のうち、破産更生債権等、償還予定額が見込めない74,389百万円は含めておりません。

（注2）社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

（単位：百万円）

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内	5年超
社債 （1年内償還予定含む）	20,000	30,000	75,000	45,000	55,000	115,000
長期借入金 （1年内返済予定含む）	55,300	85,779	103,900	92,170	119,780	500,670
リース債務 （1年内返済予定含む）	466	459	373	240	183	61
その他の有利子負債 （1年内返済予定含む）	389,500	—	4,694	4,948	4,453	5,905

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(平成29年3月31日)

(単位:百万円)

種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
① 株式	74,862	31,202	43,659
② その他	216	160	56
小計	75,078	31,362	43,716
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
① 株式	574	656	△81
② その他	174	176	△1
小計	749	832	△83
合計	75,828	32,195	43,632

当連結会計年度(平成30年3月31日)

(単位:百万円)

種類	連結貸借対照表計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
① 株式	83,457	31,174	52,282
② その他	226	160	66
小計	83,684	31,334	52,349
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
① 株式	1,272	1,381	△108
② その他	741	741	—
小計	2,014	2,123	△108
合計	85,698	33,457	52,241

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

区分	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
① 株式	2,996	1,905	22
合計	2,996	1,905	22

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

区分	売却額	売却益の合計額	売却損の合計額
① 株式	13,133	8,536	—
② その他	235	3	—
合計	13,368	8,540	—

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度は、5,642百万円（その他有価証券4,733百万円、関係会社株式909百万円）減損処理を行っております。

当連結会計年度は、226百万円（その他有価証券226百万円）減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度（平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
為替予約の振当処理	為替予約取引 売建 米ドル	短期貸付金	2,167	—	7
合計			2,167	—	7

(注) 時価はデリバティブ取引に係る契約を約定した金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度（平成29年3月31日）

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
原則的 処理方法	金利スワップ取引 受取変動・支払固定	長期借入金及び社債	55,500	53,500	△936
	債券先渡（売建）	投資信託	174	174	△1
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引				
	受取変動・支払固定	長期借入金及び社債	366,375	340,590	△6,838
	受取固定・支払変動	長期借入金	5,000	5,000	46
合計			427,049	399,264	△7,730

当連結会計年度（平成30年3月31日）

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
原則的 処理方法	金利スワップ取引 受取変動・支払固定	長期借入金及び社債	63,500	51,500	△660
	債券先渡（売建）	投資信託	741	741	△4
金利スワップの 特例処理	金利スワップ取引				
	受取変動・支払固定	長期借入金及び社債	373,890	370,590	△6,077
	受取固定・支払変動	長期借入金	5,000	—	14
合計			443,131	422,831	△6,728

(注) 時価はデリバティブ取引に係る契約を約定した金融機関から提示された価格等に基づき算定しております。

(退職給付関係)

前連結会計年度(平成29年3月31日)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社の退職給付制度

当社及び連結子会社は、退職金制度として、確定拠出年金制度及び退職金前払制度(選択制)を採用しております。

2. 退職給付費用に関する事項

確定拠出年金への掛金支払額等

904百万円

当連結会計年度(平成30年3月31日)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社の退職給付制度

当社及び連結子会社は、退職金制度として、確定拠出年金制度及び退職金前払制度(選択制)を採用しております。

2. 退職給付費用に関する事項

確定拠出年金への掛金支払額等

1,074百万円

(ストック・オプション等関係)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
たな卸資産等評価損	3,602百万円	2,527百万円
ソフトウェア	—	4,541
ソフトウェア仮勘定	2,819	—
減損損失累計額	1,262	321
固定資産減価償却累計額	801	732
資産除去債務	245	260
投資有価証券	5,246	5,229
貸倒引当金	12,997	15,887
利息返還損失引当金	9,391	7,089
未払費用	309	302
未払事業税	872	450
ポイント引当金	28,792	31,024
債務保証損失引当金	1,980	2,254
その他の引当金	828	912
長期前受収益	76	313
繰越欠損金	14,898	4,746
繰延ヘッジ損失	286	208
その他	2,892	3,107
繰延税金資産小計	87,305	79,909
評価性引当額	△29,175	△26,483
繰延税金資産合計	58,130	53,425
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	255	159
その他有価証券評価差額金	13,759	16,261
繰延ヘッジ利益	—	5
退職負債調整勘定	235	226
非適格分割に伴う時価評価差額	1,032	1,075
その他	3,386	3,982
繰延税金負債合計	18,669	21,710
繰延税金資産の純額	39,461	31,715

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	18,408百万円	23,544百万円
固定資産－繰延税金資産	21,397	8,402
流動負債－その他（繰延税金負債）	—	—
固定負債－その他（繰延税金負債）	344	232

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率 (調整)	法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異が法定実効税率の100分の5以下であるため注記を省略しております。	30.86%
交際費等永久に損金に算入されない項目		0.21
住民税均等割等		0.30
受取配当金等の益金不算入		△0.09
持分法による投資利益		△7.02
関係会社の留保利益		1.40
評価性引当額の増減		△5.04
子会社清算に伴う連結修正		5.35
その他		1.26
税効果会計適用後の法人税等の負担率		27.23

(資産除去債務関係)

資産除去債務については重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

1. 賃貸等不動産の状況に関する事項

当社及び一部の連結子会社では、東京都その他の地域において、賃貸等不動産（整理事業関連資産を含む）を所有しております。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は3,087百万円（前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は3,111百万円）であります。

2. 賃貸等不動産の時価に関する事項

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
連結貸借対照表計上額		
期首残高	80,731	67,670
期中増減額	△13,060	6,224
期末残高	67,670	73,895
期末時価	79,978	88,422

(注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額であります。

2. 期中増減額のうち、前連結会計年度の主な増加額は不動産取得（11,277百万円）であり、主な減少額は売却による減少（23,152百万円）であります。当連結会計年度の主な増加額は不動産取得（8,262百万円）であり、主な減少額は売却による減少（456百万円）であります。

3. 期末の時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて自社で算定した金額（指標等を用いて調整を行ったものを含む）であります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、主に市場及び顧客提供サービス別を基礎として、それぞれの顧客と直結した事業活動を展開しております。これらを踏まえ、当社グループの報告セグメントは、市場及び顧客提供サービス別に、「クレジットサービス事業」「リース事業」「ファイナンス事業」「不動産関連事業」「エンタテインメント事業」から構成されております。

クレジットサービス事業は、主に当社グループの主要セグメントであるクレジットカード事業及びクレジットカード事業と密接に関連する各種周辺事業から構成されております。

リース事業は、事務用機器等の賃貸を中心としたリース事業を展開しております。

ファイナンス事業は、信用保証事業及びファイナンス関連事業から構成されております。

不動産関連事業は、不動産事業及び不動産賃貸事業等から構成されております。

エンタテインメント事業は、遊技場の運営を中心としたアミューズメント事業を展開しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一の処理によっております。報告セグメントの利益は、営業利益の数値であります。セグメント間の内部営業収益及び振替高は、市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント						調整額	連結財務諸表計上額
	クレジットサービス事業	リース事業	ファイナンス事業	不動産関連事業	エンタテインメント事業	計		
営業収益								
外部顧客への営業収益	210,596	13,254	31,074	13,623	10,396	278,944	—	278,944
セグメント間の内部営業収益又は振替高	1,037	24	—	24	—	1,086	△1,086	—
計	211,633	13,278	31,074	13,648	10,396	280,030	△1,086	278,944
セグメント利益	7,971	4,313	12,817	4,904	1,199	31,208	5	31,213
セグメント資産	1,808,494	291,264	387,868	214,079	18,481	2,720,188	△137	2,720,051
その他の項目								
減価償却費	3,820	196	119	916	2,319	7,372	△3	7,368
金融費用	6,543	1,754	1,793	978	—	11,069	—	11,069
貸倒関連費用	32,123	3,274	7,916	31	—	43,346	0	43,346
持分法適用会社への投資額	74,318	—	—	—	4,831	79,150	—	79,150
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	27,969	710	208	11,488	2,283	42,659	—	42,659

(注) 1 調整額については、セグメント間取引消去であります。

2 セグメント利益は連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント						調整額	連結財務諸表計上額
	クレジットサービス事業	リース事業	ファイナンス事業	不動産関連事業	エンタテインメント事業	計		
営業収益								
外部顧客への営業収益	219,161	12,866	35,417	15,450	9,288	292,183	—	292,183
セグメント間の内部営業収益又は振替高	1,158	19	—	22	—	1,200	△1,200	—
計	220,320	12,885	35,417	15,472	9,288	293,384	△1,200	292,183
セグメント利益	12,719	4,349	16,213	6,401	1,082	40,767	3	40,771
セグメント資産	1,848,129	301,246	544,036	225,927	20,970	2,940,309	△282	2,940,027
その他の項目								
減価償却費	8,534	196	129	1,032	1,852	11,744	△3	11,741
金融費用	4,982	1,452	2,406	830	—	9,671	—	9,671
貸倒関連費用	18,442	2,990	8,538	212	—	30,183	—	30,183
持分法適用会社への投資額	80,117	—	—	—	5,645	85,762	—	85,762
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	36,758	240	446	7,168	1,677	46,291	—	46,291

（注） 1 調整額については、セグメント間取引消去であります。

2 セグメント利益は連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

1. 製品及びサービスごとの情報

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

（1） 営業収益

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

本邦の外部顧客への営業収益が連結損益計算書の営業収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

本邦の外部顧客への営業収益が連結損益計算書の営業収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

（2） 有形固定資産

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

外部顧客への営業収益のうち、連結損益計算書の営業収益の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

外部顧客への営業収益のうち、連結損益計算書の営業収益の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント						全社・消去	合計
	クレジットサービス事業	リース事業	ファイナンス事業	不動産関連事業	エンタテインメント事業	計		
減損損失	50	—	—	107	1	159	—	159

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント						全社・消去	合計
	クレジットサービス事業	リース事業	ファイナンス事業	不動産関連事業	エンタテインメント事業	計		
減損損失	—	—	—	—	1	1	—	1

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

重要なのれんの償却額及び未償却残高はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

重要な負ののれん発生益はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の関連会社及び主要株主等

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容 又は職業	議決権等の所有（被所有） 割合（％）	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
関連会社	㈱セブンCSカードサービス	東京都千代田区	100	クレジットサービス事業	直接 49.0	役員の兼任	加盟店精算及び割賦売掛金の回収（注）1	732,961	割賦売掛金	42,716
関連会社	ユーシーカード㈱	東京都港区	500	クレジットサービス事業	直接 31.0	役員の兼任	加盟店精算及び割賦売掛金の回収（注）1	1,186,159	買掛金	73,100
									その他の流動資産	7,520
関連会社	㈱セゾン情報システムズ	東京都豊島区	1,367	クレジットサービス事業	直接 46.8	－	和解金の受取（注）2	11,475	－	－

取引条件及び取引条件の決定方針等

- （注）1 加盟店精算及び割賦売掛金の回収に係る委託料は、市場価格等を勘案して決定しております。
2 ㈱セゾン情報システムズに対する和解金は、共同基幹システム開発案件の開発遅延等に係るものであります。
3 取引金額には、消費税等は含まれておりません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容 又は職業	議決権等の所有（被所有） 割合（％）	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
関連会社	㈱セブンCSカードサービス	東京都千代田区	100	クレジットサービス事業	直接 49.0	役員の兼任	加盟店精算及び割賦売掛金の回収（注）1	728,370	割賦売掛金	42,931
関連会社	ユーシーカード㈱	東京都港区	500	クレジットサービス事業	直接 31.0	役員の兼任	加盟店精算及び割賦売掛金の回収（注）1	1,193,544	買掛金	75,018
									その他の流動資産	5,771

取引条件及び取引条件の決定方針等

- （注）1 加盟店精算及び割賦売掛金の回収に係る委託料は、市場価格等を勘案して決定しております。
2 取引金額には、消費税等は含まれておりません。

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

該当事項はありません。

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

当連結会計年度において、重要な関連会社はユーシーカード㈱でありその要約財務情報は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
流動資産合計	282,764	291,334
固定資産合計	46,791	32,320
流動負債合計	258,909	257,997
固定負債合計	6,091	127
純資産合計	64,555	65,528
売上高	26,929	28,707
税引前当期純利益	51,409	20,968
当期純利益	37,214	14,482

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり純資産	2,724.88円	2,933.46円
1株当たり当期純利益	258.70円	234.67円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	255.28円	—

(注) 1. 当連結会計年度の「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、希薄化効果を有している潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	42,253	38,329
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	42,253	38,329
普通株式の期中平均株式数 (千株)	163,330	163,332
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (百万円)	△557	—
(うち子会社又は関連会社の発行する潜在株式に係る影響額(税額相当額控除額)) (百万円)	(△557)	(—)
普通株式増加数 (千株)	—	—
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要	—	連結子会社の発行する新株予約権 (株)キュービタス 普通株式 530株

3. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
純資産の部の合計額 (百万円)	446,882	480,669
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	△1,818	△1,540
(うち非支配株主持分(百万円))	(△1,818)	(△1,540)
普通株式に係る期末の純資産 (百万円)	445,063	479,128
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数 (千株)	163,333	163,332

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
㈱クレディセゾン	第33回無担保 普通社債	平成19年 4月27日	20,000 (20,000)	—	年 2.07	無担保社債	平成29年 4月27日
㈱クレディセゾン	第41回無担保 普通社債	平成24年 4月27日	10,000 (10,000)	—	年 0.79	無担保社債	平成29年 4月27日
㈱クレディセゾン	第42回無担保 普通社債	平成24年 7月31日	10,000 (10,000)	—	年 0.63	無担保社債	平成29年 7月31日
㈱クレディセゾン	第43回無担保 普通社債	平成24年 7月24日	10,000 (10,000)	—	年 0.63	無担保社債	平成29年 7月24日
㈱クレディセゾン	第44回無担保 普通社債	平成24年 8月30日	10,000	10,000	年 0.27636 (変動)	無担保社債	平成32年 8月28日
㈱クレディセゾン	第45回無担保 普通社債	平成24年 10月31日	10,000	10,000 (10,000)	年 0.69	無担保社債	平成30年 10月31日
㈱クレディセゾン	第46回無担保 普通社債	平成25年 4月25日	10,000	10,000	年 0.70	無担保社債	平成32年 4月24日
㈱クレディセゾン	第47回無担保 普通社債	平成25年 6月14日	10,000	10,000	年 0.879	無担保社債	平成32年 6月12日
㈱クレディセゾン	第48回無担保 普通社債	平成25年 10月21日	15,000	15,000	年 1.038	無担保社債	平成35年 10月20日
㈱クレディセゾン	第49回無担保 普通社債	平成26年 1月31日	10,000	10,000	年 1.023	無担保社債	平成36年 1月31日
㈱クレディセゾン	第50回無担保 普通社債	平成26年 4月24日	10,000	10,000	年 0.904	無担保社債	平成36年 4月24日
㈱クレディセゾン	第51回無担保 普通社債	平成26年 6月18日	10,000	10,000	年 0.884	無担保社債	平成36年 6月18日
㈱クレディセゾン	第52回無担保 普通社債	平成26年 7月31日	20,000	20,000	年 0.826	無担保社債	平成36年 7月31日
㈱クレディセゾン	第53回無担保 普通社債	平成26年 10月24日	15,000	15,000	年 0.435	無担保社債	平成33年 10月22日
㈱クレディセゾン	第54回無担保 普通社債	平成27年 7月31日	30,000	30,000	年 0.256	無担保社債	平成31年 7月31日
㈱クレディセゾン	第55回無担保 普通社債	平成27年 7月24日	10,000	10,000 (10,000)	年 0.18	無担保社債	平成30年 7月24日
㈱クレディセゾン	第56回無担保 普通社債	平成27年 9月25日	20,000	20,000	年 0.538	無担保社債	平成34年 9月22日
㈱クレディセゾン	第57回無担保 普通社債	平成28年 1月29日	15,000	15,000	年 0.42	無担保社債	平成33年 1月29日
㈱クレディセゾン	第58回無担保 普通社債	平成28年 4月28日	20,000	20,000	年 0.30	無担保社債	平成33年 4月28日
㈱クレディセゾン	第59回無担保 普通社債	平成28年 10月31日	10,000	10,000	年 0.77	無担保社債	平成43年 10月31日

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
(株)クレディセゾン	第60回無担保 普通社債	平成28年 10月31日	10,000	10,000	年 0.08	無担保社債	平成33年 10月29日
(株)クレディセゾン	第61回無担保 普通社債	平成29年 3月31日	20,000	20,000	年 0.24236 (変動)	無担保社債	平成44年 3月31日
(株)クレディセゾン	第62回無担保 普通社債	平成29年 5月31日	—	25,000	年 0.16	無担保社債	平成34年 5月31日
(株)クレディセゾン	第63回無担保 普通社債	平成29年 5月31日	—	10,000	年 0.16	無担保社債	平成34年 5月31日
(株)クレディセゾン	第64回無担保 普通社債	平成29年 6月15日	—	10,000	年 1.00	無担保社債	平成49年 6月15日
(株)クレディセゾン	第65回無担保 普通社債	平成29年 7月31日	—	10,000	年 0.38	無担保社債	平成39年 7月30日
(株)クレディセゾン	第66回無担保 普通社債	平成29年 12月22日	—	30,000	年 0.09	無担保社債	平成32年 12月22日
合計			305,000 (50,000)	340,000 (20,000)			

(注) 1 「当期末残高」欄の(内書)は、1年内償還予定の金額であります。

2 連結決算日後5年以内における1年ごとの償還予定額の総額は次のとおりであります。

(単位：百万円)

1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
20,000	30,000	75,000	45,000	55,000

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	229,960	247,960	0.39	—
1年以内に返済予定の長期借入金	69,885	55,300	0.87	—
1年以内に返済予定のリース債務	524	466	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）	852,899	902,299	0.64	平成31年4月から 平成48年7月まで
関係会社長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）	—	400	0.06	平成34年6月
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く）	1,209	1,318	—	平成31年4月から 平成37年1月まで
コマーシャル・ペーパー （1年以内に返済予定）	358,000	389,500	0.00	—
債権流動化借入金 （1年以内に返済予定のものを除く）	20,000	20,000	0.50	平成32年5月から 平成37年4月まで
合計	1,532,477	1,617,243	—	—

（注）1 「平均利率」については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、平均利率を記載しておりません。

3 長期借入金、関係会社長期借入金、リース債務及びその他有利子負債（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年以内における1年ごとの返済予定額は次のとおりであります。

（単位：百万円）

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金	85,779	103,900	92,170	119,780
関係会社長期借入金	—	—	—	400
リース債務	459	373	240	183
その他有利子負債	—	4,694	4,948	4,453

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

（2）【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

（累計期間）	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
営業収益（百万円）	72,091	145,411	220,461	292,183
税金等調整前四半期（当期）純利益 （百万円）	29,632	44,991	46,676	52,307
親会社株主に帰属する四半期（当期） 純利益（百万円）	21,644	32,010	34,646	38,329
1株当たり四半期（当期）純利益（円）	132.52	195.98	212.12	234.67

（会計期間）	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益（円）	132.52	63.47	16.14	22.55

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

①【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	49,156	53,802
割賦売掛金	※1, ※2 1,697,415	※1, ※2 1,851,106
リース投資資産	※4 227,821	※4 231,774
営業投資有価証券	31,411	34,761
商品	113	113
貯蔵品	994	1,436
前払費用	1,054	4,628
繰延税金資産	16,957	21,751
関係会社短期貸付金	277,190	236,786
未収入金	※2 16,166	※2 19,817
その他	※2 2,811	※2 3,155
貸倒引当金	△41,475	△44,495
流動資産合計	2,279,618	2,414,638
固定資産		
有形固定資産		
建物（純額）	5,689	5,573
車両運搬具（純額）	0	0
器具備品（純額）	1,325	1,720
土地	6,904	6,904
リース資産（純額）	1,168	1,261
建設仮勘定	295	47
有形固定資産合計	15,383	15,506
無形固定資産		
借地権	14	14
ソフトウェア	4,117	143,179
リース資産	309	254
ソフトウェア仮勘定	101,262	4,630
その他	253	253
無形固定資産合計	105,956	148,331
投資その他の資産		
投資有価証券	※5 84,380	※5 98,708
関係会社株式	55,029	55,881
出資金	0	0
関係会社出資金	6,227	6,357
長期貸付金	10,000	10,089
関係会社長期貸付金	37,456	32,108
長期前払費用	669	28,245
差入保証金	※2, ※4 2,927	※2, ※4 2,854
繰延税金資産	23,354	11,013
その他	1,167	5,951
貸倒引当金	△9	△9
投資その他の資産合計	221,202	251,199
固定資産合計	342,541	415,038
繰延資産		
社債発行費	1,484	1,620
繰延資産合計	1,484	1,620
資産合計	2,623,644	2,831,296

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成29年 3 月31日)	当事業年度 (平成30年 3 月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	0	0
買掛金	※ 2 237,930	※ 2 295,057
短期借入金	229,760	247,960
1年内返済予定の長期借入金	68,700	54,900
1年内償還予定の社債	50,000	20,000
コマーシャル・ペーパー	358,000	389,500
リース債務	441	445
未払金	※ 2 3,517	※ 2 4,931
未払費用	※ 2 15,180	※ 2 17,886
未払法人税等	7,188	3,887
預り金	※ 2 6,947	※ 2 10,811
前受収益	198	402
賞与引当金	1,500	1,687
役員賞与引当金	128	149
利息返還損失引当金	8,826	8,558
商品券回収損失引当金	144	139
割賦利益繰延	※ 3 9,028	※ 3 9,579
その他	※ 4 3,661	※ 4 3,334
流動負債合計	1,001,154	1,069,232
固定負債		
社債	255,000	320,000
長期借入金	849,499	899,299
債権流動化借入金	※ 4 20,000	※ 4 20,000
リース債務	1,151	1,236
債務保証損失引当金	6,128	7,000
ポイント引当金	94,033	101,319
利息返還損失引当金	19,996	12,795
受入保証金	※ 2 726	※ 2 1,152
その他	1,477	※ 2 2,429
固定負債合計	1,248,012	1,365,233
負債合計	2,249,166	2,434,465
純資産の部		
株主資本		
資本金	75,929	75,929
資本剰余金		
資本準備金	82,497	82,497
その他資本剰余金	1,602	1,602
資本剰余金合計	84,100	84,100
利益剰余金		
利益準備金	3,020	3,020
その他利益剰余金		
別途積立金	200,455	215,455
繰越利益剰余金	33,121	34,592
利益剰余金合計	236,596	253,067
自己株式	△52,594	△52,595
株主資本合計	344,031	360,501
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	31,095	36,788
繰延ヘッジ損益	△649	△458
評価・換算差額等合計	30,445	36,329
純資産合計	374,477	396,831
負債純資産合計	2,623,644	2,831,296

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業収益		
クレジットサービス事業収益		
包括信用購入あっせん収益	124,655	131,828
カードキャッシング収益	33,053	32,822
証書ローン収益	1,098	896
業務代行収益	25,773	27,229
クレジットサービス関連収益	9,374	9,206
クレジットサービス事業収益	193,955	201,984
リース事業収益	13,249	12,863
ファイナンス事業収益		
信用保証収益	16,528	17,101
ファイナンス関連収益	10,063	13,183
ファイナンス事業収益	26,592	30,285
不動産関連事業利益		
不動産関連事業収益	21	23
不動産関連事業原価	※1 1	※1 1
不動産関連事業利益	19	21
金融収益	4,820	4,710
営業収益合計	※2 238,637	※2 249,865
営業費用		
販売費及び一般管理費	※2, ※3 203,038	※2, ※3 207,093
金融費用		
支払利息	9,772	8,795
その他	1,509	1,076
金融費用合計	11,282	9,872
営業費用合計	214,320	216,965
営業利益	24,316	32,900
営業外収益	※2 4,026	※2 6,090
営業外費用	132	119
経常利益	28,210	38,871
特別利益		
投資有価証券売却益	1,905	8,515
貸倒引当金戻入額	88	—
受取和解金	※2, ※5 6,647	※2 275
特別利益合計	8,640	8,790
特別損失		
固定資産処分損	※4 271	※4 124
投資有価証券評価損	3,115	102
関係会社株式評価損	—	424
減損損失	50	—
システム移行費用	—	※6 12,969
その他	※2 148	—
特別損失合計	3,585	13,621
税引前当期純利益	33,265	34,040
法人税、住民税及び事業税	5,958	6,896
法人税等調整額	6,260	4,953
法人税等合計	12,219	11,850
当期純利益	21,045	22,190

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計		その他利益剰余金		利益剰余金合計		
						別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	75,929	82,497	1,602	84,099	3,020	181,455	36,795	221,270	△52,601	328,698
当期変動額										
別途積立金の積立						19,000	△19,000	—		—
剰余金の配当							△5,719	△5,719		△5,719
当期純利益							21,045	21,045		21,045
自己株式の取得									△1	△1
自己株式の処分			0	0					8	8
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	—	—	0	0	—	19,000	△3,673	15,326	6	15,333
当期末残高	75,929	82,497	1,602	84,100	3,020	200,455	33,121	236,596	△52,594	344,031

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	32,395	△1,665	30,729	359,428
当期変動額				
別途積立金の積立				—
剰余金の配当				△5,719
当期純利益				21,045
自己株式の取得				△1
自己株式の処分				8
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△1,300	1,015	△284	△284
当期変動額合計	△1,300	1,015	△284	15,049
当期末残高	31,095	△649	30,445	374,477

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本									
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計		
						別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	75,929	82,497	1,602	84,100	3,020	200,455	33,121	236,596	△52,594	344,031
当期変動額										
別途積立金の積立						15,000	△15,000	－		－
剰余金の配当							△5,719	△5,719		△5,719
当期純利益							22,190	22,190		22,190
自己株式の取得									△1	△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）										
当期変動額合計	－	－	－	－	－	15,000	1,471	16,471	△1	16,469
当期末残高	75,929	82,497	1,602	84,100	3,020	215,455	34,592	253,067	△52,595	360,501

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	31,095	△649	30,445	374,477
当期変動額				
別途積立金の積立				－
剰余金の配当				△5,719
当期純利益				22,190
自己株式の取得				△1
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	5,692	191	5,884	5,884
当期変動額合計	5,692	191	5,884	22,353
当期末残高	36,788	△458	36,329	396,831

【注記事項】

（継続企業の前提に関する注記）

該当事項はありません。

（重要な会計方針）

1. 資産の評価基準及び評価方法

（1）有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券（営業投資有価証券を含む）

時価のあるもの

決算期末日の市場価格等に基づく時価法

（評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。また、売却原価については、移動平均法により算定しております。）

時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びそれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

（2）デリバティブの評価基準及び評価方法

デリバティブ

時価法

（3）たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品

個別法による原価法

（貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定）

貯蔵品

最終仕入原価法

2. 固定資産の減価償却方法

（1）有形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。なお、耐用年数及び残存価額については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

（2）無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。なお、耐用年数については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

但し、ソフトウェアについては利用可能期間（5年、10年又は15年）に基づく定額法によっております。

（3）リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零として算定する定額法によっております。

（4）長期前払費用

均等償却によっております。なお、償却期間については、法人税法に規定する方法と同一の基準によっております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

割賦売掛金等の諸債権及びリース投資資産の貸倒損失に備えるため、一般債権及び要注意先債権に相当する債権については、一定の種類毎に分類し、過去の一定期間における各々の貸倒実績から算出した貸倒実績率に基づき引き当てており、破産更生債権等については、回収不能見込相当額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員に対して支給する賞与の支出に備えるため、支給見込額のうち当事業年度における負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えて、当事業年度における支給見込額を計上しております。

(4) 利息返還損失引当金

将来の利息返還の請求に備え、過去の返還実績等を勘案した必要額を計上しております。

(5) 商品券回収損失引当金

当社が発行する商品券等の未回収分について、一定期間経過後に収益計上したものに対する将来の引換請求に備えるため、過去の回収実績を勘案した必要額を計上しております。

(6) 債務保証損失引当金

債務保証のうち提携金融機関が行っている個人向けローン等及び、家賃保証事業等に係る債務保証について将来発生する危険負担に備えるため、将来発生すると見込まれる損失見込額を、実績率等を勘案して債務保証損失引当金として計上しております。

(7) ポイント引当金

クレジットカードの利用促進を目的としてカード会員に提供しているポイント制度における将来の交換費用の支出に備えるため、交換実績等に基づき将来発生すると見込まれる交換費用負担額を計上しております。

4. 収益の計上基準

収益の計上は次の方法によっております。

クレジットサービス事業

(1) 包括信用購入あっせん

顧客手数料……………残債方式又は7・8分法

加盟店手数料……………期日到来基準

(2) カードキャッシング……………残債方式

(3) 証書ローン……………残債方式

(4) 業務代行……………取扱高発生基準

(5) クレジットサービス関連

(個別信用購入あっせん)

顧客手数料……………残債方式又は7・8分法

加盟店手数料……………期日到来基準

リース事業

(6) リース……………売上高を計上せずに利息相当額を各期へ配分する方法

(7) 個別信用購入あっせん……………7・8分法

ファイナンス事業

(8) 信用保証……………残債方式

(9) ファイナンス関連

各種ローン等……………残債方式

5. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 繰延資産の処理方法

社債発行費

社債の償還までの期間にわたり定額法により償却しております。

(2) ヘッジ会計の処理

ヘッジ会計の要件を満たす取引については繰延ヘッジ及び時価ヘッジ処理によっております。

なお、特例処理の要件を満たす金利スワップについては特例処理によっております。また、振当処理の要件を満たす為替予約については、振当処理によっております。

(3) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は税抜方式で計上しております。但し、固定資産に係る控除対象外消費税等は長期前払消費税等として、投資その他の資産の「その他」に計上し、均等償却しております。

(追加情報)

該当事項はありません。

(貸借対照表関係)

※1 割賦売掛金残高は次のとおりであります。

割賦売掛金残高の内訳

部門別	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
クレジットサービス事業		
包括信用購入あっせん(注)	1,038,929百万円	1,028,581百万円
カードキャッシング	214,032	217,193
証書ローン	8,912	6,376
業務代行	91,075	101,082
クレジットサービス関連	347	293
リース事業		
リース	58,740	66,621
ファイナンス事業		
信用保証	1,423	1,412
ファイナンス関連	283,954	429,546
合計	1,697,415	1,851,106

(注) 当事業年度末において、流動化している割賦売掛金残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
カードショッピング (包括信用購入あっせん)		
1回払い債権等	20,000百万円	—

割賦売掛金に含まれている流動化に伴う未収金債権は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
カードショッピング (包括信用購入あっせん)		
1回払い債権等	2,727百万円	—

※2 関係会社に対する金銭債権・債務は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
金銭債権	95,412百万円	98,075百万円
金銭債務	82,458	89,080

※3 部門別の割賦利益繰延残高は次のとおりであります。

(単位：百万円)

部門別	前事業年度 (平成29年3月31日)				当事業年度 (平成30年3月31日)			
	当期首 残高	当期 受入額	当期 実現額	当期末 残高	当期首 残高	当期 受入額	当期 実現額	当期末 残高
包括信用購入 あっせん	5,589	69,268	68,753	[5,762] 6,104	6,104	71,614	71,387	[6,039] 6,330
クレジットサ ービス関連	36	21	29	[9] 28	28	22	22	[8] 27
リース	2,615	1,793	1,513	[－] 2,895	2,895	1,961	1,635	[－] 3,221
合計	8,241	71,083	70,297	[5,771] 9,028	9,028	73,598	73,046	[6,048] 9,579

(注) 当期末残高の [] 内は、加盟店手数料であり内書きであります。

※4 担保資産

(担保に供している資産)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
リース投資資産	20,000百万円	20,000百万円

(担保資産に対応する債務)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
債権流動化借入金	20,000百万円	20,000百万円
債権流動化借入金は、リース投資資産の流動化に伴い発生した債務であります。		

(担保に供している資産)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
差入保証金	1,500百万円	1,500百万円

(担保資産に対応する債務)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
その他(流動負債)	1,386百万円	1,624百万円
資金決済に関する法律第14条第1項に基づく発行保証金として、差入保証金を供託しております。		

※5 投資有価証券のうち株券貸借契約を締結しているものは、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株券貸借契約)	2,681百万円	4,185百万円

6 偶発債務

(1) 債務保証

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
(保証先)	(保証金額)	(保証金額)
1 提携金融機関が行っている 個人向けローンに係る顧客	279,588百万円	275,527百万円
2 提携金融機関が行っている 絵画担保融資に係る顧客	68	61
3 家賃保証事業に係る顧客	—	2,805
合計	279,656	278,393

(2) 連帯債務

会社分割により㈱コンチェルトに承継した預り保証金等に関し返還義務が生じた場合の債務について債権者に対し連帯債務を負っておりますが、負担割合は㈱コンチェルト100%とすることで同社と合意しており、貸借対照表に連帯債務の金額は計上しておりません。

なお、連帯債務残高は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
連帯債務残高	517百万円	504百万円

7 貸出コミットメント

(貸手側)

当社は、クレジットサービス事業において、クレジットカード業務に附帯するキャッシングサービス及びカードローン業務を行っております。当該業務及び関係会社に対する極度貸付における貸出コミットメントに準ずる貸出未実行額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	4,456,142百万円	4,491,292百万円
貸出実行残高	520,459	474,577
差引額	3,935,682	4,016,715

なお、上記の貸出コミットメントに準ずる契約においては、その殆どがクレジットカードの附帯機能であるキャッシングサービスとして当社の会員に付与しているものであるため、必ずしも貸出未実行額の全額が貸出実行されるものではありません。

(借手側)

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため、取引銀行5行と貸出コミットメント契約を締結しております。これらの契約における貸出コミットメントに係る借入金未実行額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
貸出コミットメントの総額	225,000百万円	225,000百万円
借入実行残高	—	—
差引額	225,000	225,000

(損益計算書関係)

※1 不動産関連事業原価の内訳は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
不動産関連事業原価	1百万円	1百万円
賃貸資産減価償却費	0	0
賃貸資産保険料及び固定資産税等	1	1

※2 関係会社との取引高は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業収益	25,282百万円	26,316百万円
営業費用	28,648	31,323
営業取引以外の取引高	7,935	2,115

※3 販売費及び一般管理費のうち主なものは次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
広告宣伝費	24,324百万円	25,404百万円
ポイント引当金繰入額	14,717	16,642
貸倒引当金繰入額	20,055	20,976
利息返還損失引当金繰入額	15,339	—
債務保証損失引当金繰入額	6,126	6,999
役員報酬	446	461
役員賞与引当金繰入額	128	149
従業員給料及び賞与	19,230	20,013
賞与引当金繰入額	1,500	1,687
退職給付費用	487	674
支払手数料	67,696	75,992
減価償却費	2,877	6,369

※4 固定資産処分損の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
建物	6百万円	3百万円
建設仮勘定	—	19
ソフトウェア	260	—
ソフトウェア仮勘定	0	88
その他(器具備品等)	4	12
合計	271	124

※5 前事業年度の受取和解金は、(株)セゾン情報システムズからの、共同基幹システム開発案件の開発遅延等に係る和解金であります。

※6 システム移行費用は、構築中であった共同基幹システムへの移行に係る一時費用であります。

- 部門別取扱高は次のとおりであります。
 なお、（ ）内は、元本取扱高であります。

部門別	前事業年度		当事業年度	
	(自	平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自	平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
クレジットサービス事業				
包括信用購入あっせん		4,476,608百万円 (4,475,879)		4,683,038百万円 (4,682,330)
カードキャッシング		253,837		248,156
証書ローン		9,339		7,530
業務代行		2,671,710		2,873,183
クレジットサービス関連		32,156 (32,140)		30,653 (30,636)
リース事業				
リース		108,101 (106,308)		114,569 (112,607)
ファイナンス事業				
信用保証		159,914		131,922
ファイナンス関連		202,878		320,769
不動産関連事業				
不動産		21		23
合計		7,914,568		8,409,848

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式
前事業年度(平成29年3月31日)

(単位:百万円)

区分	貸借対照表計上額	時価	差額
① 子会社株式	—	—	—
② 関連会社株式	2,649	11,784	9,134
合計	2,649	11,784	9,134

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

(単位:百万円)

区分	貸借対照表計上額
① 子会社株式	25,775
② 関連会社株式	26,603
合計	52,379

上記については、市場価格がありません。従って、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

当事業年度(平成30年3月31日)

(単位:百万円)

区分	貸借対照表計上額	時価	差額
① 子会社株式	—	—	—
② 関連会社株式	2,649	13,650	11,000
合計	2,649	13,650	11,000

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

(単位:百万円)

区分	貸借対照表計上額
① 子会社株式	26,627
② 関連会社株式	26,603
合計	53,231

上記については、市場価格がありません。従って、時価を把握することが極めて困難と認められるものであります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
ソフトウェア	一百万円	3,194百万円
ソフトウェア仮勘定	1,466	—
資産除去債務	88	95
投資有価証券	1,266	1,258
関係会社株式	4,826	4,956
貸倒引当金	10,751	13,627
利息返還損失引当金	8,846	6,538
未払費用	238	225
未払事業税	659	374
ポイント引当金	28,792	31,024
債務保証損失引当金	1,891	2,143
その他の引当金	507	559
長期前受収益	76	313
繰越欠損金	11,898	3,992
繰延ヘッジ損失	286	208
その他	1,765	1,461
繰延税金資産小計	73,363	69,973
評価性引当額	△19,315	△20,967
繰延税金資産合計	54,047	49,005
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	13,726	16,236
繰延ヘッジ利益	—	5
その他	9	—
繰延税金負債合計	13,736	16,241
繰延税金資産の純額	40,311	32,764

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.86%	30.86%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.24	0.24
住民税均等割	0.32	0.32
受取配当金等の益金不算入	△1.22	△1.77
税率差異による期末繰延税金資産の減額修正	△2.07	0.33
評価性引当額の増減	9.90	4.91
その他	△1.30	△0.08
税効果会計適用後の法人税等の負担率	36.73	34.81

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首 残高	当 期 増加額	当 期 減少額	当 期 償却額	当期末 残高	減価償却累 計額
有形固 定資産	建物	5,689	283	3	395	5,573	4,508
	車両運搬具	0	—	—	—	0	3
	器具備品	1,325	922	12	514	1,720	5,718
	土地	6,904	—	—	—	6,904	—
	リース資産	1,168	548	1	453	1,261	5,959
	建設仮勘定	295	69	317	—	47	—
	計	15,383	1,823	336	1,363	15,506	16,189
無形固 定資産	借地権	14	—	—	—	14	
	ソフトウェア	4,117	156,926	12,821	5,043	143,179	
	リース資産	309	23	—	78	254	
	ソフトウェア 仮勘定	101,262	68,245	164,877	—	4,630	
	その他	253	1	—	1	253	
	計	105,956	225,197	177,698	5,122	148,331	

(注) 「当期増加額」及び「当期減少額」の主なものは次のとおりであります。

当期増加額

有形固定資産

器具備品	ネットワーク関連機器更改	530百万円
------	--------------	--------

リース資産	CD／ATM機種入替え	548百万円
-------	-------------	--------

無形固定資産

ソフトウェア	共同基幹システムのソフトウェア	139,913百万円
--------	-----------------	------------

ソフトウェア仮勘定	共同基幹システム開発のソフトウェア	64,687百万円
-----------	-------------------	-----------

当期減少額

無形固定資産

ソフトウェア	共同基幹システムへの移行に係る一時費用	12,821百万円
--------	---------------------	-----------

【引当金明細表】

(単位：百万円)

区分	当期首残高	当期増加額	当期減少額		当期末残高
			目的使用	その他	
貸倒引当金	41,485	27,103	24,083	—	44,504
賞与引当金	1,500	1,687	1,500	—	1,687
役員賞与引当金	128	149	128	—	149
利息返還損失引当金	28,822	—	7,468	—	21,353
商品券回収損失引当金	144	0	5	—	139
債務保証損失引当金	6,128	6,999	6,126	—	7,000
ポイント引当金	94,033	16,642	9,356	—	101,319

(注) 1. 損益計算書上、債務保証損失引当金の取崩額と貸倒引当金繰入額は、相殺後の純額で表示しております。
 なお、相殺した貸倒引当金繰入額は6,126百万円であります。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告による。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利
- (4) 株主の有する単元未満株式と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその 添付書類並びに確認書	事業年度 (第67期)	自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日	平成29年6月20日 関東財務局長に提出
(2) 内部統制報告書及びその 添付書類			平成29年6月20日 関東財務局長に提出
(3) 訂正発行登録書			平成29年6月21日 平成29年7月14日 平成30年1月24日 関東財務局長に提出
(4) 四半期報告書及び確認書	第68期第1四半期	自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日	平成29年8月14日 関東財務局長に提出
	第68期第2四半期	自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日	平成29年11月14日 関東財務局長に提出
	第68期第3四半期	自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日	平成30年2月14日 関東財務局長に提出
(5) 臨時報告書	金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示 に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づ き提出する臨時報告書であります。 金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示 に関する内閣府令第19条第2項第12号の規定に基づき提 出する臨時報告書であります。		平成29年6月21日 関東財務局長に提出 平成30年1月24日 関東財務局長に提出
(6) 発行登録追補書類及びそ の添付書類			平成29年6月8日 平成29年7月19日 平成29年12月12日 平成30年4月11日 関東財務局長に提出
(7) 有価証券報告書の訂正報 告書及び確認書	事業年度(第67期)(自 平成28年4月1日 至 平成 29年3月31日)の有価証券報告書に係る訂正報告書及び その確認書であります。		平成29年7月14日 関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年 6 月20日

株式会社 クレディセゾン

取締役 会 御中

有限責任監査法人 トー マ ツ

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 梅 津 知 充 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 吉 田 波 也 人 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 箕 輪 恵 美 子 ⑩

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社クレディセゾンの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社クレディセゾン及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社クレディセゾンの平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社クレディセゾンが平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年 6 月20日

株式会社 クレディセゾン

取締役 会 御中

有限責任監査法人 トー マ ツ

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 梅 津 知 充 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 吉 田 波 也 人 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 箕 輪 恵 美 子 ⑩

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社クレディセゾンの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第68期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社クレディセゾンの平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月20日
【会社名】	株式会社クレディセゾン
【英訳名】	Credit Saison Co., Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 林 野 宏
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長林野宏は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、財務報告に係る内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであり、固有の限界を有するため、財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成30年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠いたしました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用関連会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社並びに連結子会社6社及び持分法適用関連会社4社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、連結子会社5社及び持分法適用関連会社6社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の営業収益が高い拠点から合算し、連結営業収益の概ね2／3に達している拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として営業収益、割賦売掛金及び借入金に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに、選定した重要な事業拠点及びそれ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生の可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して、重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加いたしました。

3【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点（平成30年3月31日）において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4【付記事項】

該当事項はありません。

5【特記事項】

該当事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月20日
【会社名】	株式会社クレディセゾン
【英訳名】	Credit Saison Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 林 野 宏
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長林野宏は、当社の第68期（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2【特記事項】

特記すべき事項はありません。